

麗澤大学大学院

平成27年度 博士論文

韓国開化期における  
日本語教育に関する研究

言語教育研究科 日本語教育学専攻

指導教授 井上 優

学籍番号 1101110023 黄 雲

# 【 目次 】

第1章 序論	1
第1節 研究の目的	2
第2節 論文の構成	2
第2章 韓国における日本語教育の概観	8
第1節 はじめに	9
第2節 朝鮮時代期	12
第3節 開化期	15
第4節 日本統治期	18
第5節 第二次世界大戦終了後	19
第6節 まとめ	21
第3章 「日語学堂」の設立について	23
第1節 はじめに	24
第2節 研究対象の一次史料の概観	26
2.1 『統理交渉通商事務衙門日記』	26
2.2 『統椽日記』	30
2.3 『仁川港關草』	33
2.4 『日本語學校教師雇傭契約書』	36
2.5 『東京朝日新聞』	39
第3節 「日語学堂」の設立時期	40
第4節 「日語学堂」の設立地域	42
第5節 まとめ	44

第4章 「日語学堂」の初代教官－岡倉由三郎	46
第1節 はじめに	47
第2節 岡倉由三郎とバジル・ホール・チェンバレン	48
第3節 岡倉由三郎の韓国語研究	51
第4節 岡倉由三郎と韓国語研究者の交流	56
第5節 岡倉由三郎の日本語教育	70
第6節 まとめ	74
第5章 韓国開化期の日本語学習書の概観	76
第1節 はじめに	77
第2節 『日語工夫』(1891；明治24)	80
2.1 著者	82
2.2 構成及び表記	83
2.3 発行背景及び目的	86
第3節 『日語捷徑』(1895；明治28)	86
3.1 著者	88
3.2 構成及び表記	88
3.3 発行背景及び目的	89
第4節 『日本語獨案内』(1895；明治28)	90
4.1 著者	92
4.2 構成及び表記	92
4.3 発行背景及び目的	93
第5節 『単語連語日話朝雋』(1895；明治28)	93
5.1 著者	95
5.2 構成及び表記	96
5.3 発行背景及び目的	97

第6節	『簡易捷徑日語獨學』(1897 ; 明治30)	98
6.1	著者	100
6.2	構成及び表記	100
6.3	発行背景及び目的	100
第7節	『獨修自在日語捷徑』(1905 ; 明治38)	102
7.1	著者	104
7.2	構成及び表記	105
7.3	発行背景及び目的	106
第8節	『日語會話』(1908 ; 明治41)	107
8.1	著者	108
8.2	構成及び表記	109
8.3	発行背景及び目的	110
第9節	まとめ	111
第6章	韓国開化期の日本語学習書の概観	114
第1節	はじめに	115
第2節	韓国開化期の日本語学習書の語彙	117
2.1	『日語工夫』(1891 ; 明治24)	117
2.2	『日語捷徑』(1895 ; 明治28)	117
2.3	『日本語獨案内』(1895 ; 明治28)	118
2.4	『単語連語日話朝雋』(1895 ; 明治28)	119
2.5	『簡易捷徑日語獨學』(1897 ; 明治30)	119
2.6	『獨修自在日語捷徑』(1905 ; 明治38)	120
2.7	『日語會話』(1908 ; 明治41)	121
第3節	韓国開化期の日本語学習書の内容分析	122
3.1	商業に関連した内容	124

3.2	教育・開化を促求する内容	128
3.3	倫理に関わる内容	131
3.4	時代的背景がわかる内容	134
第4節	まとめ	135
第7章	結論	137
	【参考文献】	141
	【付録】 開化期学習書目録	156

## 第1章 序論

### 第1節 研究の目的

### 第2節 論文の構成

# 第1章 序 論

## 第1節 研究の目的

本研究では韓国における日本語教育史の観点から、近代韓国における日本語教育の始まりの時期に焦点をあて、日本語教育機関と日本語教師及び日本語学習書について考察する。

具体的にはまず近代韓国における最初の日本語教育機関である「日語学堂」について、従来の研究において未調査であった一次資料を収集・解読し、「日語学堂」の設立時期と設立地域を明らかにする。

また「日語学堂」の初代教官、即ち、近代韓国における最初の日本語教育者である岡倉由三郎について、彼の著作や同時期の関連資料に基づき考察する。考察にあたっては植民地教育に繋がる言語政策としての日本語教育ではなく、外国語教育としての日本語教育という点に焦点をあて、岡倉の「日語学堂」における日本語教授法、ならびに岡倉の韓国語研究と日本語教育との関連性について明らかにし、日本語教育者としての岡倉の位置づけについて考察する。

最後に開化期における日本語学習書について、従来の研究では個別的・部分的に行なわれてきた開化期日本人著の日本語学習書を収集、時代順に概観し、文献学的検討を行なうとともに内容的特徴について考察する。

この研究によって韓国開化期の日本語教育の実状が明らかになり、韓国の日本語教育史の全体像がより明確になると考えられる。

## 第2節 論文の構成

本論の構成は以下のとおりである。

- 第1章 序論
- 第2章 韓国における日本語教育の概観
- 第3章 「日語学堂」の設立について
- 第4章 「日語学堂」の初代教官－岡倉由三郎
- 第5章 韓国開化期の日本語学習書の概観
- 第6章 韓国開化期の日本語学習書の内容的特徴
- 第7章 結論

本章の序論では、研究の目的と論文の構成について述べる。

第2章から第6章までは本論である。

第2章では先行研究を中心に韓国における日本語教育について時代別に概観し、韓国開化期の日本語教育の時代的背景について考える。

第3章では開化期における日本語教育の嚆矢となる「日語学堂」を、第4章では「日語学堂」の初代教官である岡倉由三郎を取り上げ、近代韓国における日本語教育の始まりの一端について考察する。

「日語学堂」については、以下の一次資料を用いて、その設立時期と地域を明らかにする。

#### 【韓国ソウル大学奎章閣韓国学研究院 所蔵】

① 『統理交渉通商事務衙門日記』

編者：（朝鮮）統理交渉通商事務衙門編

記録時期：1883年～1895年

② 『統椽日記』

編者：（朝鮮）統理交渉通商事務衙門編

記録時期：1888年～1894年

③ 『仁川港關草』

編者：（朝鮮）議政府記録局編

記録時期：1887年～1895年

④『日本語学校教師雇傭契約書』

編者：閔鍾默（朝鮮）・岡倉由三郎（日本）締結

記録時期：1891年

韓国開化期の「日語学堂」における岡倉の日本語教育の実状、ならびに岡倉の韓国語研究と日本語教育との関連性について考察するにあたっては、主に以下の岡倉の著書を用いる。

**【韓国語研究】**

①「朝鮮の文学」（1893a）

『哲学雑誌』8巻74号 pp.843-849、8巻75号 pp.1038-1052 有斐閣

②「吏道・諺文考」（1893b）

『東洋学芸雑誌』143号 pp.432-438、144号 pp.491-497 東洋学芸社

③「字音考」（1893c）

『東洋学芸雑誌』145号 pp.528-538 東洋学芸社

④「東洋博言学研究の必要」（1893d）

『東京人類学会雑誌』第93号 pp.88-95 東京人類学会

⑤「為古吐考」（1897）

『帝国文学』3巻4号 pp.378-394 大日本圖書

⑥「主格を示す本来の辞」（1900）

『帝国文学』6巻2号 pp.152-162 大日本圖書

**【日本語教育】**

①「朝鮮国民教育新案」（1894a）

『東邦協会会報』第2号附録 東邦協会

②「朝鮮の教育制度を如何すべき」(1894b)

『教育時論』第 338 号 pp.23-24 開発社

③「外国語教授新論・附国語漢文の教授要項」(1894c)

『教育時論』第 338-340 号附録 pp.1-49 開発社

また、岡倉由三郎と韓国学研究者との学問的交流についての考察には以下の資料を検討する。

**【日本 学習院大学東洋文化研究所 所蔵 「小倉進平関係文書」】**

■岡倉由三郎のはがきと手紙—小倉進平宛

① 大正 9 年年賀はがき [1920 年]

京城市大平通総督府官舎第六号 小倉進平様

東京小石川区雑司ヶ谷町三七 岡倉由三郎

② 大正 10 年年賀はがき [1921 年]

朝鮮京城大平通官舎第六号 小倉進平様

東京小石川区雑司ヶ谷町三七 岡倉由三郎

③ 大正 13 年 5 月 25 日の封書 [1924 年]

朝鮮京城府和泉町六 小倉進平様

東京市小石川区雑司ヶ谷三七 岡倉由三郎

④ 昭和 4 年 5 月 5 日封書 [1929 年]

朝鮮 京城帝国大学教授 小倉進平殿 御前

東京市外・中新井 岡倉由三郎

⑤ 昭和 8 年 1 月 20 日付け消印封書 [1933 年]

朝鮮京城府三坂通二七 小倉進平様

東京市板橋区中新井町三丁目 岡倉由三郎

⑥ 昭和 8 年 7 月 1 日付け龍山局消印封書 [1933 年]

朝鮮京城 総督府学務局 小倉進平様 平信

**【日本 九州大学 朝鮮史学研究室 所蔵】**

## ■ 在山楼文庫資料103 玄界庵日記

①明治24年11月24日 [1891年]

②明治25年1月17日 [1892年]

③明治26年2月12日 [1893年]

第5章では、韓国開化期に日本人により著された日本語学習書について概観する。開化期の日本語学習書については、韓国人によって発行された学習書の先行研究は多く見られるが、日本人により著された学習書に関する研究は最近始まったばかりであり、個別的にしか行なわれていない。開化期における日本語学習書の全般について把握するためには、日本人により著された学習書の全般的について検討が必要であり、本章では以下の7種の日本語学習書について概観し、当時の日本語学習書の特徴について考察する。

## ①『日語工夫』(1891;明治24)

著者： 中野許多郎

発行日：1891年5月21日

日本 国会図書館 所蔵

## ②『日語捷徑』(1895;明治28)

著者： 金澤末吉

発行日：1895年5月31日

日本 国会図書館 所蔵

## ③『日本語獨案内』(1895;明治28)

著者： 稻益謙吉

発行日：1895年6月16日

日本 国会図書館 所蔵

④『単語連語日話朝雋』(1895;明治28)

著者： 境益太郎・李鳳雲

発行日：1895年6月

日本 奈良県立図書館・韓国 国立中央図書館 所蔵

⑤『簡易捷徑日語獨學』(1897;明治30)

著者： 弓場重栄

発行日：1897年12月26日

日本 国会図書館 所蔵

⑥『獨修自在日語捷徑』(1905;明治30)

著者： 金島苔水・廣野韓山

発行日：1905年9月21日

日本 国会図書館 所蔵

⑦『日語會話』(1908;明治41)

著者： 島井浩

発行日：1908年6月1日

日本 国会図書館 所蔵

第6章では、開化期日本語学習書の全般的な内容について考察するため、前述の日本語学習書7種の単語部に収録されている語彙を内容別に分析し、学習書の会話文に現れる特徴的な内容を項目別に検討する。

第7章は本研究のまとめである。

## 第2章 韓国における日本語教育史の概観

### 第1節 はじめに

### 第2節 朝鮮時代期

### 第3節 開化期

### 第4節 日本統治期

### 第5節 第二次世界大戦終了後

### 第6節 まとめ

## 第2章 韓国における日本語教育史の概観

### 第1節 はじめに

本章では韓国における日本語教育史に関する先行研究を検討し、時代別の日本語教育の様相について教育機関及び学習書を中心に概観する。

河先(2013:2)が「日本語教育史研究は、日本語教育学会の学会誌『日本語教育』に掲載される論文数が少ないことから、関心の薄い分野であると言することができる。日本語教育史研究は、日本語教育学以外の領域における研究の成果によるところが大きい」と述べているように、日本語教育史研究は社会・政治学や歴史学など日本語教育学以外の分野で多く研究されているが、本論文では日本語教育学の分野に重点をおいて考察した先行研究を中心に、韓国における日本語教育を通時的な観点から検討する。

韓国における日本語教育史の全般についての研究としては、稲葉(1986e)、森田(1982)、조문희(2005、2011)、金義泳(2012)が挙げられるが、各研究の時代区分は学者の観点により基準が異なっている<sup>1</sup>。以下では各研究で設定された時代区分について以下に記しておく。

森田(1982)は、韓国における日本語教育の歴史について考察しているが、時代区分においては、歴史的イベントを中心に分類している。

- ① 朝鮮時代 (～1876年<sup>2</sup>)
- ② 開化期前期 (1876年～1906年)
- ③ 開化期後期(統監府<sup>3</sup>開設後) (1906年～1910年)

---

<sup>1</sup> 金義泳(2012:10-12)にも、稲葉(1986e)、森田(1982)、조문희(2005)の時代区分が引用されている。

<sup>2</sup> 1876年は、日朝修好条規が締結された年である。

- ④ 日本統治期 (1910年～1945年)
- ⑤ 第二次世界大戦終了後 (1945年～)

조문희(2005、2011)は、教育関係の法制を基準に日本語教育の時代区分をおこなっている。

- ① 経国大典期 (1392年～1895年)
- ② 学部<sup>4</sup>令期 (1895年～1911年)
- ③ 朝鮮教育令期 (1911年～1945年)
- ④ 教授要目期 (1945年～1955年)
- ⑤ 教育課程期 (1955年～現在)

稲葉(1986e)は韓国社会における日本語の位置付けに注目して、時代を区分している。久保田(2005)も同じ基準で分類している。

- ① 英・独・仏・露・漢語などと対等の「外国語」であった時期 (1905年以前)
- ② 官公立各級学校の必修科目として、第二外国語ともいふべき「日語」の教育が行なわれた保護国時代 (1906年～1910年)
- ③ 日本語が「国語」として強要された植民地時代 (1910年～1945年)
- ④ 英語に次いで「第二外国語」のひとつとされている (1961年以後)

金義泳(2012)は、日本語教科書の分析を通じた日本語教育史という観点から時代を

<sup>3</sup> 統監府は、第二次日韓協約に基づいて大韓帝国の外交権を掌握した日本が、漢城(現ソウル市)に設置した官庁である。1910年10月1日、韓国併合により、大韓帝国政府の組織と統合の上、朝鮮総督府に改組された。

<sup>4</sup> 学部は、朝鮮末期の学務行政を管掌していた官庁である。1895年4月に設置され、1910年「庚戌国辱」に至るまで存続した。1894年、礼曹の所管業務を引き継いだ学務衙門を改称したもので、今日の教育部にあたる。(한국정신문화연구원 1991:814)

区分しているが、「教科書分析と高等学校の日本語教育を主な研究対象としているため、法令や政治的な要因による細かい時代区分ではなく、各時代の日本語教育の特徴を述べるのに便利な形で時代区分をしておく」と述べ、以下のように記している。

- ① 開化期 (1891年～1910年)<sup>5</sup>
- ② 植民地期 (1910年～1945年)
- ③ 解放後 (1945年～現在)
  - 1) 教授要目期 (1945年～55年)
  - 2) 教育課程期 (1955年～現在)

本研究の考察は開化期に限られているため、他の時代に関しては言及しないが、日本語教育の時代区分については以下のように分類する。また開化期の区分については、「韓国語学習書」と「日本語学習書」<sup>6</sup>の発行推移についての考察から下記のように分類する。開化期の学習書に関する考察は第5章で行う。

- ① 朝鮮時代期 (～1876年)
- ② 開化期 (1876年～1910年)
  - 1) 前期(日露戦争以前) (1876年～1905年)

---

<sup>5</sup> 金義泳(2012:13)は、開化期の設定基準について「一般的に開化期は、朝鮮が日本と丙子修好条約を締結する1876年から日本の植民地になる1910年までをいう。しかし、近代的な日本語教育が始まる時期は「日本語学堂」が設立された1891年であるといえる。本稿では、近代日本語教育が始まる1891年から1910年までの期間を日本語教育における開化期と呼ぶ」としている。

<sup>6</sup> 日本語学習書は、開化期に韓国人の日本語教育のため編纂されている教材の総称であり、その分類については、学者によって異なっているが、大きく「教科書」と「一般学習書」に分けられる。教科書は教育機関で使われた学習書のことであり、学部で編纂されたものと、民間人により作られ、学部の検定を受け、私立学校などで使われたものに分けられる。一般学習書は、内容によって文法書・会話書・辞典に分けることが多いが、本研究では、内容的分類ではなく著者によって分類し、日本人によって著された一般学習書を対象とする。また、日本人の韓国語学習のため編纂され、韓国に輸入された学習書及び日・韓国語学習書については、対象にしない。

- 2) 後期(日露戦争以降)(1905年～1910年)
- ③ 日本統治期 (1910年～1945年)
- ④ 第二次世界大戦終了後 (1945年～)

以下では、この時代区分にもとづき、朝鮮における日本語教育史について概観するが、本研究の対象となる開化期を中心として検討する。

## 第2節 朝鮮時代期

一般に韓国における日本語教育の嚆矢は、1414年、朝鮮王朝の司訳院において外交事務に必要な通訳、翻訳の仕事を担当する訳官の養成を目的で始まったとされているが、朝鮮時代以前の日本語教育機関の存在の可能性について、鄭光(2007)で考察されている。

鄭光(2007:317-318)では、『三国史記』巻38、「雑志」第7、「職官」上、「領客府」条から、新羅(B.C.57-A.D.935)<sup>7</sup>の日本語教育について「早くから倭典を置いて日本人の接待を担当させており、日本以外の国とも接触が頻繁になると真平王43年(621)にこれを領客典とし、景德王代には司賓府としたのだが、恵恭王代にはまたこれを領客府と変えていることを記し、新羅の倭典や領客府が日本人とその他の外国人を接待する所であったとしたら、ここで日本語や他の外国語を通訳する訳官が配置され、その教育も成されていたはずである」と述べ、朝鮮時代以前の日本語教育機関の存在の可能性について考察している。しかし、このような主張を裏づける資料はいまのところ見つからないとも記している。

また新羅以後、弓裔の泰封では「史台」を置いて諸方の訳語を担当するようにしたと

---

<sup>7</sup> 新羅(しらぎ/しんら、紀元57年-935年)は、古代の朝鮮半島南東部にあった国家である。新羅、半島北部の高句麗、半島南西部の百済の三か国が鼎立した七世紀中盤までの時代を朝鮮半島における三国時代という。

いう記事があり、この時の「史台」が外国語教育機関であったことはわかるが、これ以上の詳しい記録がないため、具体的にどんな言語をどのように教育したかについてはわからないと述べ、日本語教育は遠く新羅の倭典などでなされた可能性があるが、やはり教育方式や教材などに対して具体的な資料を残しているのは、司訳院の日本語教育が最も古いことを強調している<sup>8</sup>。

朝鮮時代における司訳院の日本語教育については、『太宗実録』(巻28)太宗14年10月26日丙申条<sup>9</sup>に「命司訳院習日本語 倭客通事尹仁甫上言 日本人来朝不絶 訳語者少 願令子弟博習 従之」という記事があり、これが、韓国における日本語教育に関する最も古い記録とされている。

司訳院は、高麗末期に外国語教育と通訳のために設置された官庁であり、高麗忠烈王2年(1276)に漢語の学習のために設置された「通文館」がその前身である<sup>10</sup>。高麗時代の司訳院では主に漢語と蒙古語を教育したが、朝鮮初期(1414年)に日本語の教育が追加され、朝鮮朝の制度が完成された世祖朝には女真語の教育機関も設置されて司訳院の四学が完備されることになったようである<sup>11</sup>。司訳院は1894年に甲午改革の制度改革によって廃止され、「日語学堂」(1891年設立)を前身とする「官立漢城外国語学校」(1895年設立)がその役割を果たすようになる。

鄭光(2007:328)では朝鮮時代の日本語教育について、司訳院で使われた日本語教材について時代別に分類し、「前期は(壬辰倭乱<sup>12</sup>以前まで)日本の古往来類の訓蒙教科書を

---

<sup>8</sup> 鄭光(2007)「韓国における日本語教育の歴史」 p.318、p.324

<sup>9</sup> 甲午年乙亥月丙申日は旧暦であり、これは、西暦の1414年12月8日にあたる。

<sup>10</sup> 朝鮮時代の司訳院が通文館の後身であることは周知のことであるが、鄭光(2007:322)では、「高麗時代には通文館とは別に漢文都監を置いたため、司訳院は漢文都監や漢語都監とは直接関連がないが、おそらく司訳院が高麗後期に漢児(ママ)言語の教育のために設置した二つの機関と関連があると見たようであると述べられている。

<sup>11</sup> 鄭光(2007)「韓国における日本語教育の歴史」 pp.320-321

<sup>12</sup> 豊臣秀吉が1592~1598年に2度にわたって企てた朝鮮に対する侵略戦争である。朝鮮側では「壬辰・丁酉倭乱」または「壬辰倭乱」とよぶ。

輸入してそのまま使った。中期(壬乱以後英祖・正祖朝まで)<sup>13</sup>は壬辰倭乱の被拉刷還人である康遇聖が編纂した『捷解新語』を中心に、実用的な会話教育が成され、後期(その後)はこれを改修して使用し、『倭語類解』を別途に編纂して語彙教育を強化した」と述べている。

朝鮮時代の司訳院で使われた日本語教材は「倭学書」と呼ばれている。朝鮮前期の倭学書に関しては、『世宗実録』(巻47)世宗12年3月戊午条の記事に、「消息、書格、伊路波、本草、童子教、老乞大、議論、通信、庭訓往来、鳩養勿語、雑語」の11種が、『経国大典』(巻三)礼典では、「伊路波、消息、書格、老乞大、童子教、雑語、本草、議論、通信、鳩養物語、庭訓往来、応永記、雑筆、富士」の14種類の倭学書があったという記録があり<sup>14</sup>、これらのうち現存しているのは『伊路波』だけである。

朝鮮中期には司訳院の訳官であった康遇聖により『捷解新語』が刊行され、朝鮮後期には中期の『捷解新語』が改修・重刊されるほか、語彙集なども刊行されるが、陳南澤(2003:3)によると現在朝鮮時代の倭学書、すなわち日本語学習書としては残されているのは次の6種である。

- ① 弘治年伊路波 (1492刊行)
- ② 捷解新語 (原刊本1676、改修本1748、重刊改修本1781刊行)
- ③ 倭語類解 (1783-1789刊行推定)
- ④ 方言集積 (1778写本)
- ⑤ 三学訳語 (1789写本)
- ⑥ 隣語大方 (1790刊行)

また、クーラン(1894:Tome 1<sup>er</sup>, 100-112)は、Livre II: Etude des langues. Chapitre IV : Langue Japonaise (言語部・倭語類)として「141. 伊呂波、142. 消息、143. 書格、144. 老乞大、145. 童子教、146. 雑語、147. 本草、148. 議論、149. 通信、150. 鳩養物語、

---

<sup>13</sup> 英祖・正祖朝は、1694~1800年にあたる。

<sup>14</sup> 鄭光(2013)「草創期における倭学書の資料について」p.373

151. 庭訓往来、152. 應永記、153. 雑筆、154. 富士、155. 捷解新語、156. 改修捷解新語、157. 重刊捷解新語、158. 捷解新語文釋、159. 倭語類解、160. 長語、161. 類解」の21種の書を挙げているが、大差はない。

上記の倭学書は、日本語仮名文と発音を記録したハングル音注またその意味を記録した韓国語対訳がついており、時代の変化による日本語の変化が見られている点で日本語研究の資料として高く評価され、多くの研究者によって研究されている<sup>15</sup>。

### 第3節 開化期

韓国は1876年の日本との日朝修好条規をはじめとして、1882年以降にはアメリカ・ロシア・清・ヨーロッパ諸国と修好通商条約を結ぶようになり、この1876年から1910年の日韓合併にかけての時期を韓国史上「開化期」<sup>16</sup>と称するが、これが韓国近代の始まりである。

韓国近代における日本語教育は1891年7月に漢城(現ソウル市)に設立<sup>17</sup>された「日語学堂」から始まり、その成立は日本公使の勧告による<sup>18</sup>とされている。

また1895年6月にはこの「日語学堂」と、同文学・育英公院の跡を受けて1894年2月に設立されていた英語学校に「外国語学校官制」を適用し、同時に仁川支校を新設する形で官立外国語学校がスタートする<sup>19</sup>。

稲葉(1997)は、韓国での近代日本語教育は韓国で1894年7月から1896年2月にかけて行われた急進的な近代化改革である「甲午改革」の過程で、官公立小学校・中学校に日

---

<sup>15</sup> 朝鮮時代の倭学書研究史については、김영옥(2003)で年度別・資料別・研究分野別に分けて検討しているので、これを参照されたい。

<sup>16</sup> 「開化期」は「韓末」、「旧韓末」、「開港期」、「愛国啓蒙期」という用語が混用されているが、その詳細については、이윤상(2006)の考察を参照されたい。

<sup>17</sup> 「日語学堂」の設立時期と地域については、第3章で後述する。

<sup>18</sup> 鈴木(1894)『朝鮮紀聞』p.220

<sup>19</sup> 稲葉(1997)『旧韓末「日語学校」の研究』pp.13-15

本語教育が導入されており、官公立学校と私立学校のほかに「日語学堂」を始めとする開化期に生成した一群の学校で、日韓併合後日本語の国語化とともに自然消滅した開化期独特の学校形態を「日語学校」と総称し、その詳細について考察している。

稲葉(1997:17)は「日語学校」の成立において日本側の働きが多かったが、「甲午改革」において、その大枠は日本側によって規定されていたものの、日本公使館や日本人顧問の干渉にはほとんどの期間を通じて制約が付きまっており、そこに韓国側の自主性が発揮される余地は大いにあったことをあげ、「当時の日本語教育も主として韓国側による自主的採択の結果であった」と論じている。

韓国開化期の日本語教育の中心であった「日語学校」は、日本側の働きが多かったとは言え、韓国政府の自主的に成立であることがわかる。

一方で1894年9月、韓国政府の「小学校令」にもとづき設立された官立小学校の尋常科・高等科とも、時宜に従い学部大臣の許可を得て「外国語」を教科目に加えることができると規定しており、官立中学校は、1899年10月に開校式を挙げているが、そこにも外国語として日本語が課された<sup>20</sup>。

上記の「日語学堂」及び小学校尋常科でどのような教科書を用いたかについてはまた明らかにされていないが、開化期前期には民間人により日本語学習書が出版された。その著者は以下のとおりである。『単語連語日話朝雋』(1895)の共著者である李鳳雲を除くとすべて日本人である。

①『日語工夫』(1891)

著者：中野許多郎 発行日：1891年5月21日 発行地：釜山

②『日語捷徑』(1895)

著者：金澤末吉 発行日：1895年5月31日 発行地：東京

③『日本語獨案内』(1895)

著者：稲益謙吉 発行日：1895年6月16日 発行地：大阪

④『単語連語日話朝雋』(1895)

---

<sup>20</sup> 稲葉(1997)『旧韓末「日語学校」の研究』p.14

著者：境益太郎・李鳳雲 発行日：1895年6月 発行地：京城（現ソウル市）

⑤『簡易捷徑日語獨學』（1897）

著者：弓場重栄 発行日：1897年12月26日 発行地：東京

⑥『獨修自在日語捷徑』（1905）

著者：金島苔水・廣野韓山 発行日：1905年9月21日 発行地：東京

日本人により作られた日本語学習書を韓国人が購入し学習したという点では、学習書による民間人の日本語教育も前述の開化期「日語学校」の性格と同様に日本側の働きが多かったが、韓国側による自主的採択の結果であったと考えられる。

1905年11月には第二次日韓協約によって韓国を保護国とした日本が翌年2月統監府を開設し、官公立学校において「模範教育」を開始するようになり、日本語は従前の小学校を改編した4年制の普通学校で「国語(朝鮮語)」と同様の比重を占め、中学校の後身である高等学校では優位に立つに至る<sup>21</sup>。

教科書としては学部で編纂された『日語読本』が用いられる他、日本で出版された『高等小学読本』、『尋常小学読本』、『実業補習大国民読本』なども使われた<sup>22</sup>。

朱秀雄(1986a:132)は、「統監府はその教育方針を韓国人に対する愚民化政策、日本語の普及、斬進的な同化政策、教科を通じた親日教育、日本人教員配置等に置き、植民地教育の準備作業を進めていくのであった」と述べている。

また稲葉(1986e:139)は、官公立学校と日語学校を始めとし、民族系私立学校やキリスト教系私立学校でも日本語教育が行なわれたことについて「このように模範教育期のすべての官公立学校および一部の私立学校において日本語が教えられたことは、併合後、日本語が「国語」となり、日本語によって同化教育が進められるにあたっての下地となった」としている。

このように開化期後期に入り、韓国における日本語教育に対する日本側の働きはさらに大きくなっており、その目的も言語教育のみではなかったと見られる。

---

<sup>21</sup> 稲葉(1986e)「韓国における日本語教育史」p.137

<sup>22</sup> 박성희(2005)『개화기의 일본어 교과서에 관한 연구』p.12

しかし民間人によって出版された学習書についての研究で、박성희(2005)は、開化期民間人によって著された学習書は、当時教育救国運動の一環として教育を通じた自強と、近代社会に必要な人材養成に注力した知識人の意図が教科書の本文内容に反映されていたとしており、金義泳(2012:92-107)は、(韓国人の)民間人による日本語学習書について、「日本語を学ぶということが民族的自主性を確立し、自主独立を成し遂げることにつながる」として認識されていた」と述べている。

日本語教育に対する韓国人の態度は、国権回復のための愛国啓蒙運動として、あるいは日本語を通じて、西洋を学ぶという考え方で、自ら日本語教育に努めた側と日本語教育を反対する側に大きく分かれていたと見られ、日本語による同化教育が進められたものの、開化期の日本語教育はまだ「外国語」であり、学習者の「自主的採択」が可能であったと考えられる。

以上で見たように開化期の日本語教育は、教育時期(前期・後期)、教育主体(官公立学校・日語学校・私立学校・民間人、等)、学習者の態度などの条件により、その様相と目的が異なっていたと見られる。

#### 第4節 日本統治期

1910年8月29日「日韓併合に関する条約」とともに朝鮮総督府が設置され、日本語は「国語」となる。

普通学校の教科書は、「朝鮮語及び漢文」を除けば日本語で記述され、官公立の学校では日本語を教授用語とし<sup>23</sup>、私立学校でも1915年の「私立学校規則」によって国語と修身が必修とされ、伝統的な漢学教育機関である書堂に対しても国語の教授が奨励された<sup>24</sup>。

---

<sup>23</sup> 森田(1982)「韓国における日本語教育の歴史」 p.1

<sup>24</sup> 稲葉(1986e)「韓国における日本語教育史」 p.141

日本統治期に学校教育で使用された教科書は以下のとおりである<sup>25</sup>。

1期：1911年『(訂正)普通学校学徒用国語読本』8巻

2期：1912年『普通学校国語読本』8巻

3期：1918年『(訂正再版)普通学校国語読本』8巻

4期：1923年『普通学校国語読本』8巻

5期：1930年『普通学校国語読本』12巻

6期：1937年『国語読本』12巻

7期：1939年『初等国語読本』12巻

8期：1943年『初等国語』16巻

一方で日本統治期初期には、「国史(韓国史)」と「国語(朝鮮語)」の講義を許容していたが、1938年の教育令改正により「朝鮮語」は随意科目とされ、翌1939年には全体的に第四年生以上での朝鮮語廃止手続が行われた。また、森田(1982:6)は、「朝鮮語の授業が姿を消すとき、社会文化面でも日本語が強調された」と述べている。

日本統治期において「国語(日本語)」教育の目的は、論ずる余地もなく「同化」そのものであり、学習者即ち韓国人の自主的な選択は不可能であった。

## 第5節 第二次世界大戦終了後

第二次世界大戦終了、即ち韓国が日本の植民地支配から解放された1945年8月15日から、1961年に韓国外国語大学に日本語科が設置されるまでの16年間、韓国では公式的な日本語教育は行なわれなかった。韓国外国語大学に次ぎ、1962年には国際大学に日本語日文学科が設置されるが、その後10年余各大学の観光科・通訳科・貿易科・秘書科などで日本語は教えられたものの、日本語関連学科の新設はなかった。また韓国政府が高

---

<sup>25</sup> 金義泳(2012)『韓国の日本の教科書に関する研究』pp.45-46

等学校で日本語教育を始めたのは1973年のことで、日韓間の国交正常化(1965年12月)から8年経ってからである。

1973年2月14日「韓国文教部令」第310号により教育課程が改正され、人文系高等学校、実業学校の第2外国語の選択科目に日本語が付加された。人文系高等学校の日本語の指導目標には、以下のとおり記された<sup>26</sup>。

- ① 現代日本語の発音と基本語法を習得させ、日常生活で使用するやさしい言葉と文を理解する能力とともに簡単な発表力を養う。
- ② 日本語を通じてわれらの固有の伝統と文化を紹介し、正しく意思伝達できる基礎能力を養う。
- ③ 日本の文化・経済などに対する理解を増進させ、国際的協助心を養うと同時に、われらの自覚を確固たらしめる。

上記の指導目標に「われらの固有の伝統と文化を紹介」、「われらの自覚を確固たらしめる」と書かれているが、これは日本語教育を通じて自らの民族的誇りを作り出す目的があったと考えられる。

高等学校で使用された日本語教科書に関して、金義泳(2012)は第2次教育課程期(1963～1974)から第7次教育課程期(1997～2009)まで韓国の高等学校で使われた教材を分析し、「第2次から第6次の日本語教科書の内容には、否定的な日本観が記述されているのは事実である」と述べ、韓国では、日韓歴史関係による反日感情が、現代の日本語学習者にも影響を与えているとしている。

現在、日本語教育は、韓国で重要な外国語教育として位置づけられ、各教育機関で日本語が教授されているが、現在も韓国人の日本観においては、本章で述べてきた歴史的な問題が作用していると考えられる。

森田(1987:234-235)によると、1973年高校における日本語教育とともに、大学でそれぞれ設置されていた韓国外国語大、国際大について、他の大学で日本語関係学科が開

---

<sup>26</sup> 金義泳(2012)『韓国の日本の教科書に関する研究』p.10

設されるようになり、観光関係学科、図書館科で日本語が必須として教えられるほか、第二外国語の科目に日本語を採択している大学も多い。また、ソウル大の語学研究所(ソウル大学生のみ対象)は1972年から、延世大の外国語学堂(一般社会人に開放)では1973年から日本語を教えており、専門大学でも日本語教育が実施されている。

一方で、1975年10月以降には、国際交流基金から韓国における大学に対し、日本人教授を派遣することになるが、啓明大学に派遣された梅田博之<sup>27</sup>(当時東京外国語アジア・アフリカ言語文化研究所教授)と誠信女子大学師範大学の森田芳夫(前在韓国日本大使館参事官)が、その嚆矢となる。

## 第6節 まとめ

韓国における日本語教育は、1414年、朝鮮王朝の司訳院において、外交事務に必要な通訳、翻訳の仕事を担当する訳官の養成を目的として始まった。近代においては、1891年7月、漢城に設立された官立「日語学堂」を前身とする「日語学校」を始め、官公立学校と民族系私立学校・キリスト教系私立学校でも日本語教育が行なわれたことになるが、この時期の日本語教育は日本側の働きが多かったとは言え、韓国政府の自主的な選択による成立であった。1910年には、日本の植民地になり、日本語は、35年間にわたって外国語ではなく国語として教授されることになったが、第二次世界大戦の終了、即ち日本から解放された1945年からは、韓国では、公的な教育機関において日本語教育は行われていなかった。

韓国において日本語教育が再登場したのは、16年後の1961年のことで、現在日本語教育は韓国で重要な外国語教育として位置づけられ、各教育機関で日本語が教授されており、海外での日本語学習者3,984,538人のうち840,187人が韓国人で、世界日本語学習者数の20%以上を占めている<sup>28</sup>。

---

<sup>27</sup> 梅田博之は1982年にソウル大に1年間、韓国外大に後期6ヶ月間出講している。

<sup>28</sup> 国際交流基金の2012年海外日本語教育機関調査結果による。

以上のように韓国における日本語教育は時代によってその目的と体系が異なっており、多くの学者によって日本語教育史に関する研究がなされてきた。

しかし韓国の開化期(1876年～1910年)における日本語教育についての研究は、開化期の日本語教育が植民地教育に繋がったという意識から、植民地期と併せて考察する傾向が見られ、まだその実状が明らかにされているとは言えない。

上記を踏まえ、本研究では韓国開化期の日本語教育の様相について考察し、日本語教育史における開化期の日本語教育の位置づけについて考える。

### 第3章 「日語学堂」の設立について

#### 第1節 はじめに

#### 第2節 研究対象の一次史料の概観

#### 第3節 「日語学堂」の設立時期

#### 第4節 「日語学堂」の設立地域

#### 第5節 まとめ

### 第3章 「日語学堂」の設立について

#### 第1節 はじめに

本章では近代韓国における日本語教育の始まりの時期に焦点をあて、韓国最初の近代外国語教育機関である「日語学堂」の設立時期・地域について考察する。

「日語学堂」は、1891年に韓国政府が初代教師として岡倉由三郎(1868～1936)を招聘し、漢城に設立した外国語教育機関である。1895年6月2日の「外国語学校官制」によって「官立日語学校」となり、1906年に「官立漢城日語学校」、1908年に「官立漢城外国語学校日語部」と変遷して、併合後の1911年まで存続した。

このように学校の名称が時代によって変わったため、先行研究において言及される際の名称も異なっている。本稿では上記を「官立日語学校」と総称するが、本研究の対象になる設立初期に関しては区分して「日語学堂」と称する。

先述のように「日語学堂」は、韓国における日本語教育の嚆矢となり、韓国の日本語教育史上重要な存在であるといえるが、先行研究における「日語学堂」の叙述をみると設立時期と設立地域についての記述にも揺れが見られる。

「日語学堂」の設立時期を記している研究をみると、尹健次(1982)では1891年4月、稲葉(1982、1986e)・金沢(2006、2007)<sup>29</sup>では同年5月、李光麟(1973)・森田(1982、1991)・稲葉(1988b、1997)<sup>30</sup>・陸英恵(2003)では同年6月、이계형(2007)・黄雲(2011)では同年7月と記されている。

また、「日語学堂」の設立地域に関しては、李光麟(1973)では「鑄字洞」、渡辺

---

<sup>29</sup> 「日語学堂」の設立に関する記述に「任榮哲「韓国人から見た日本語」大阪樟蔭大学にて講演、1997年」によると脚注が付けられている。

<sup>30</sup> 稲葉(1997)はその緒言で、「端的に言って本書は、上掲拙稿を再編成したものである」と述べている。その掲げられた論文は、先行研究に挙げないこととする。

(1973)では「南部寿洞」<sup>31</sup>、이계형(2007)では「鑄洞」と書いており、陸英恵(2003)と稲葉(1997)では小倉(1940:17)を引用し、「日本公使館内」<sup>32</sup>としている。

以上の状況を踏まえ、本研究では「韓国ソウル大学奎章閣韓国学研究院」<sup>33</sup>(以下、「奎章閣韓国学研究院」とする)での現地調査を通じて入手した『統理交渉通商事務衙門日記』、『統椽日記』、『仁川港關草』、『日本語学校教師雇傭契約書』、ならびに日本の『東京朝日新聞』を資料として用い、「日語学堂」の設立時期と地域について考察する。

上記の「奎章閣韓国学研究院」の所蔵資料は、現在デジタル化されており、原則的にその閲覧・複製及び撮影が制限されている状況であるが<sup>34</sup>、本研究の資料調査においては「奎章閣韓国学研究院」の院長の承認を得て、係員の立合いのもとで原本を確認することができた。また、本稿で使用する資料のイメージは、「奎章閣韓国学研究院」により撮影された原本写真であることを記しておく。

---

<sup>31</sup> 渡辺(1973)は『李太王朝史』から引用しているが、これに関して「「鑄洞」の誤りかと想像される」と考察している。

<sup>32</sup> 日本公使館は、開化期、「倭城臺」にあったが、これは、現在「藝場洞」と「會賢洞1街」にあたる。

<sup>33</sup> 奎章閣は、正祖が即位した1776年、王室図書館兼学術研究機関として創設され、歴代国王の御製、御筆及び王室関連資料と朝鮮・中国で刊行された各種記録物を所蔵しており、学問的能力に優れた官吏を訓練させ、国の主要政策の準備を主管するなど、学問と政治の中心機関として発展した。正祖代に奎章閣を通じて具現された「法古創新」の精神がこもっている奎章閣の記録物は、日帝強占期、光復と韓国戦争などの栄光と受難の歴史を語りながら、現在のソウル大学奎章閣韓国学研究院に移管された。民族文化が息づいている記録文化財(世界記録遺産3種、国宝7種、宝物26種を始め314,640点)が科学的な保存管理システムで管理され、国内外の韓国学研究支援のため、最善をつくしている。(홍기표 2010:66)

<sup>34</sup> 【奎章閣韓国学研究院 運営細則】

第18条 閲覧資料の制限

- ① 既に影印刊行されているかフィルム資料とデジタル資料などで複製された資料の原本は、原則的に閲覧を制限する。

第25条 複製及び撮影の制限

- ② 既に影印刊行されているかフィルム資料とデジタル資料などで複製が完了されている資料については、原則的に複製を制限する。ただし、必要な場合には院長の承認を得て原本資料を追加的に複製できる。

(<http://e-kyujanggak.snu.ac.kr/home/index.do?idx=01&siteCd=KYU&topMenuId=201&targetId=231>)

## 第2節 研究対象の一次史料の概観

本章では本研究の研究対象となる『統理交渉通商事務衙門日記』、『統椽日記』、『仁川港關草』、『日本語學校教師雇傭契約書』、ならびに日本の『東京朝日新聞』の書誌情報を記し、その中の「日語学堂」の設立に関する部分を紹介するが、その記述において、「奎章閣韓国学研究院」が記している書誌情報と解題を参照したことを断っておく。

### 2.1 『統理交渉通商事務衙門日記』

『統理交渉通商事務衙門日記』は、1883年(高宗20)から8月1日から1895年(閏年)5月2日に至る約12年間の「統理交渉通商事務衙門」の基本的日記である。

「統理交渉通商事務衙門」は、1876年日本と日朝修好条規を締結し開港した後、変化する国内外の情勢に対応するために1880年(高宗17)12月21日に設置された「統理機務衙門」が前身となる。「統理機務衙門」は1882年6月に壬午軍乱を契機に廃止されたが、1882年11月17日に「統理機務衙門」の後身である「統理衙門」が設置され、同年12月4日に「統理交渉通商事務衙門」と改称した<sup>35</sup>。

『奎章閣韓国本図書解題(史部1)』(p.201)によると、『統理交渉通商事務衙門日記』は現在、第二十六冊が缺帙されている零本<sup>36</sup>であり、表紙書名は「統署日記」・「統記」などになっている。

西欧列強との直接的な接続に直面した開化期政府が、激変する対外業務に能動的に対処するために設立・整備した機関の記録であり、19世紀末の外交問題を総括的に収録した基本資料である。

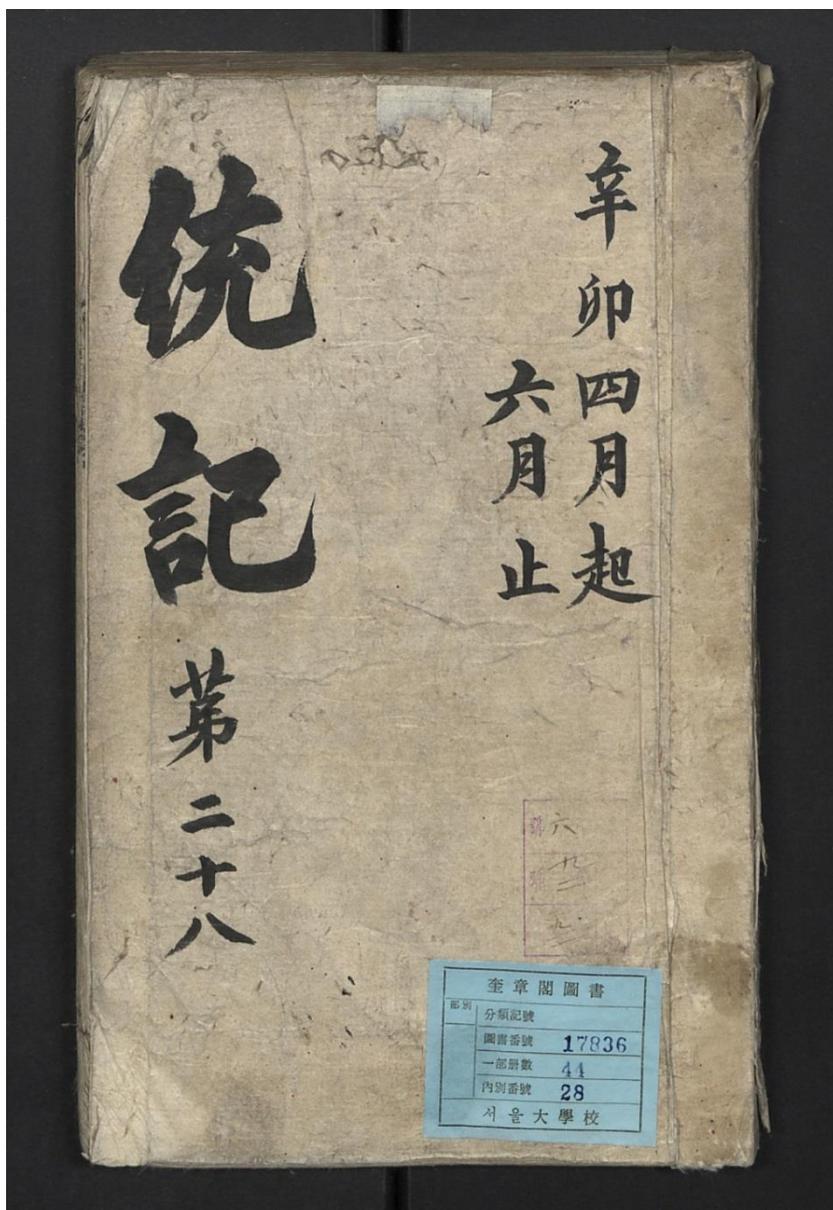
次の【資料1】は『統理交渉通商事務衙門日記』の表紙で、【資料2】は辛卯六月二十日付の日記の内容であり、「日語学堂」の設立と岡倉に関して記している。

---

<sup>35</sup> 한국정신문화연구원(1991) 『한국민족문화대백과사전 23』 pp.217-219

<sup>36</sup> ひとそろいとなる本の、何冊かが欠けているもの。

【資料1】『統理交渉通商事務衙門日記』の表紙



【書誌情報】

- ① 書名：統理交渉通商事務衙門日記
- ② 編者：統理交渉通商事務衙門(朝鮮)編
- ③ 記録時期：19世紀末(高宗20-32年：1883-1895)
- ④ 冊・巻数：存44冊(落帙)<sup>37</sup>
- ⑤ 大きさ：30.6×19.6cm

---

<sup>37</sup> 『奎章閣韓国本総目録』(1965年12月)ソウル大学校文理大・東亜文化研究所編では統理交渉通商事務衙門日記(17836)統理交渉通商事務衙門(朝鮮)編.[高宗20年8月1日-32年閏5月1日(1883-95)].73冊.30.6x19.6.表紙書名：統署日記,統記,第二十四冊(庚寅四月～六月)及び第二十五冊(庚寅七月～九月)腐食本,第二十六冊(庚寅十月～十一月)缺本とある。なお、『奎章閣圖書韓国本総合目録』(1983年8月)ソウル大学校図書館編及び『修正版 奎章閣圖書韓国本総合目録』(1994年 ソウル大学校奎章閣、p.932)にも同様に「73冊」とある。しかし、本資料は以下の現在奎章閣韓国学研究所のウェブサイトで見ることができるが、ここには44冊の原文が確認できる。

(<http://e-kyujanggak.snu.ac.kr/home/index.do?idx=06&siteCd=KYU&topMenuId=206&targetId=379>)

【資料2】『統理交渉通商事務衙門日記』の本文

外照復查照轉飭仁川洪直牧事關仁監辭意全上又  
新設日語學堂教師岡倉由三郎薪水一百元式自本  
年七月為始就本港稅項中按撥事奉  
旨閱飭事北兵使報華人紅衣賊作鬧於境內之類逐

新設日語學堂教師岡倉由三郎薪水一百元式自本  
年七月為始就本港稅項中按撥事奉旨閱飭事

又

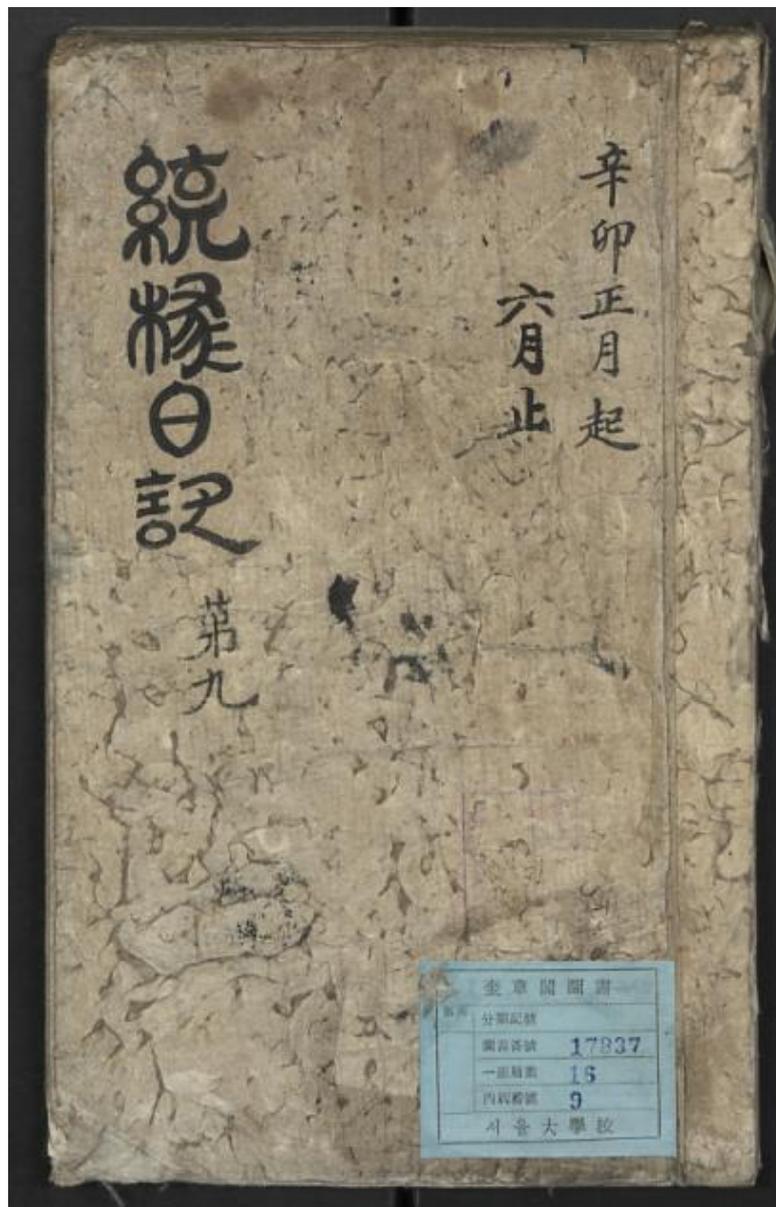
## 【和訳】

また新設日語学堂教師岡倉由三郎に薪水一百元式(ずつ)を本年7月より始めと為し、本港税項中に就きて按撥の事、旨を奉じて関飭すべき事。

### 2.2 『統椽日記』

『統椽日記』は「統理交渉通商事務衙門」の、1888年(高宗25)1月1日から1894年(高宗31)8月20日までの日記で、同衙門の書吏によって書かれたものである。同衙門には正式日記として『統理交渉通商事務衙門日記』があり、1883年8月1日から1895年閏5月1日までを収めるが、『統椽日記』とその作成年度が重複している。本日記はその内容から見ると、上記『統理交渉通商事務衙門日記』の付随的な記録と見られる。次の【資料3】は『統椽日記』の表紙で、【資料4】は辛卯六月二十日付の日記の内容であり、「日語学堂」の設立と岡倉に関して記している。

【資料3】『統椽日記』の表紙



【書誌情報】

- ① 書名：統椽日記
- ② 編者：統理交渉通商事務衙門(朝鮮)編
- ③ 記録時期：19世紀末(高宗25-高宗31年：1888-1894)
- ④ 冊・卷数：16冊
- ⑤ 大きさ：29.6×18cm

【資料4】『統椽日記』の本文

Two vertical strips of handwritten Japanese text. The right strip contains the characters '又關鑄洞新設' (Again, the new casting of the cave). The left strip contains the text '日語學堂教師岡倉由三郎月給一百元式從' (The Japanese Language School teacher Okakura Yusaku's monthly salary is 100 yen, as per the regulations), followed by '本港稅項中自本年七月為始按發事' (In the local taxes, starting from July of this year, the payment is made according to the regulations), and '又閱鑄洞新設' (Again, the new casting of the cave). At the bottom of the left strip, there is a red stamp and the characters '元山報' (Genzan Report).

又關鑄洞新設

日語學堂教師岡倉由三郎月給一百元式從

本港稅項中自本年七月為始按發事

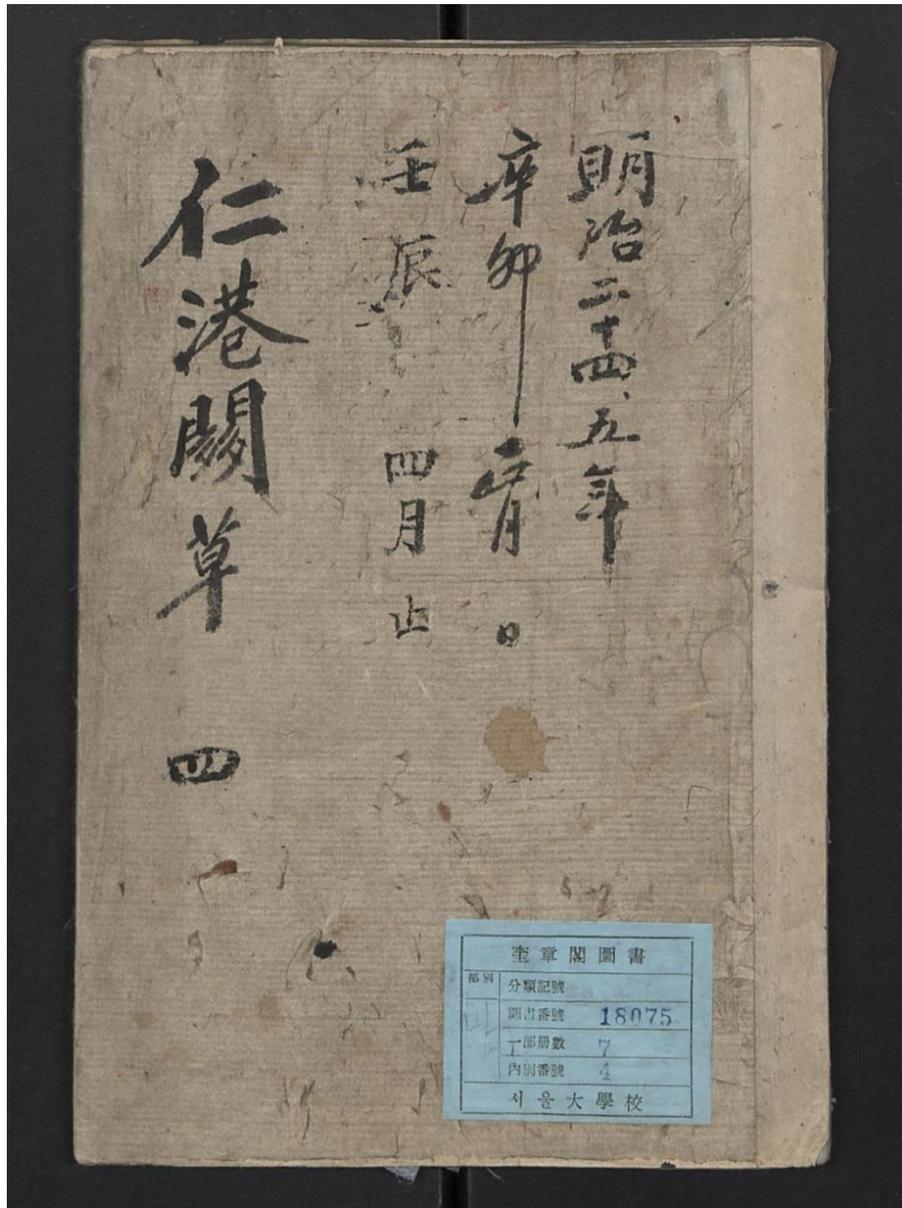
### 【和訳】

また関すらく、鑄洞新設日語学堂新教師岡倉由三郎に月給一百元式(ずつ)を本港税項中に従いて、本年七月より初めと為し按発すべき事。

### 2.3 『仁川港關草』

『仁川港關草』は1887年(高宗24)5月から1895年(高宗32)10月までの記録で、「統理衙門」から「仁川港監理」に送った関飭と「仁川港」から送った報題が併録されている。1895年3月以降の記録は、「統理衙門」の業務を外部に移管して外部で行なわれており、この時の文書には国漢文の混用が現れる場合もある。収録された内容は、給料の支給、客主営業税、韓日両国漁船往来捕漁、各邑主人差定、統理交渉通商事務衙門経費排定事、各国租界などがある。次の【資料5】は『仁川港關草』の表紙で、【資料6】は辛卯六月二十日付の日記の内容であり、日語学堂の設立と岡倉に関して書かれている。

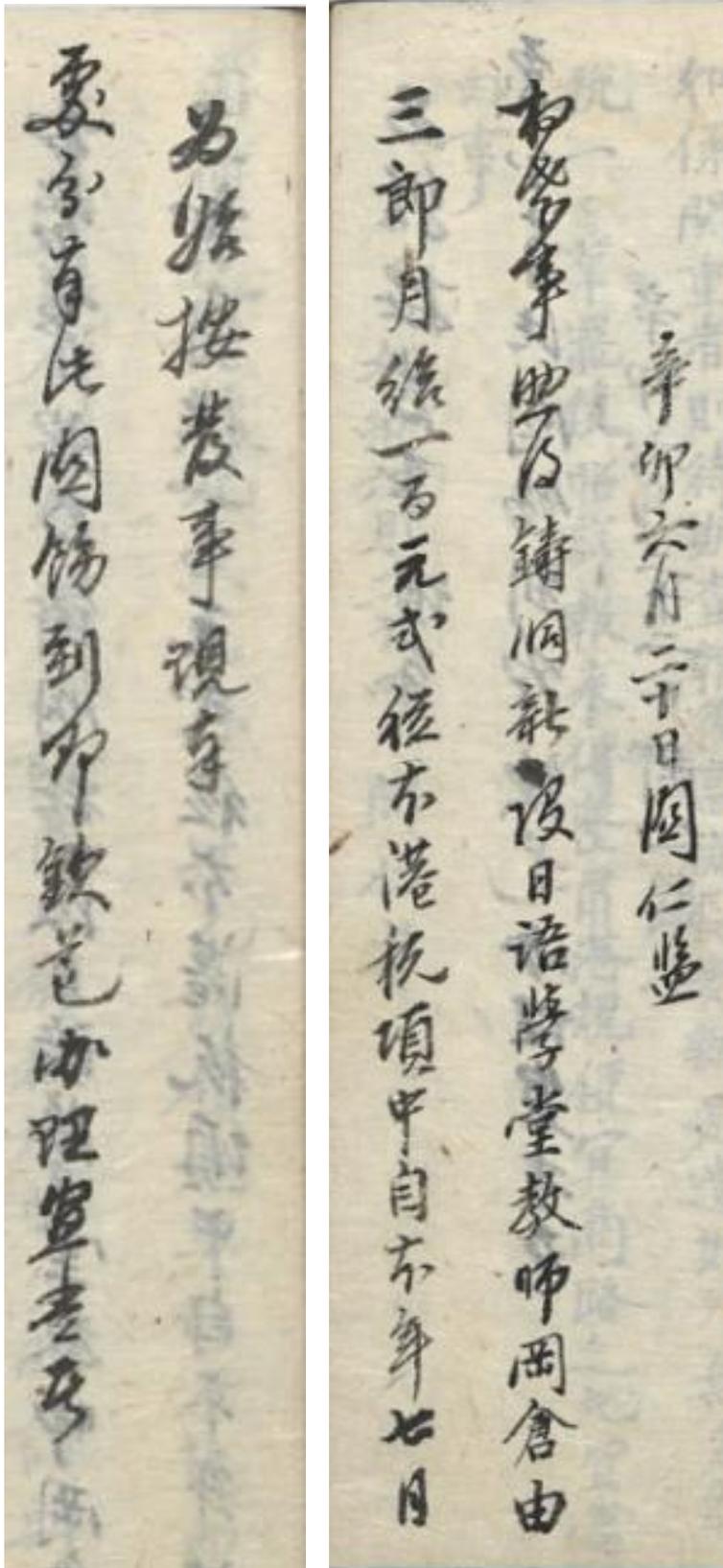
【資料5】『仁川港關草』の表紙



【書誌情報】

- ① 書名：仁川港關草
- ② 編者：(朝鮮)議政府記録局編
- ③ 記録時期：19世紀末(高宗24年-32年:1887-1895)
- ④ 冊・卷数：7冊
- ⑤ 大きさ：31.8×19.7cm(大小不同)

【資料6】『仁川港關草』の表紙



辛卯六月二十日關仁監  
相考事照得鑄洞新設日語學堂教師岡倉由  
三郎月給一百元式從本港稅項中自本年七月  
為始按發事現奉  
處分奉此關飭到即欽遵辦理宜當者

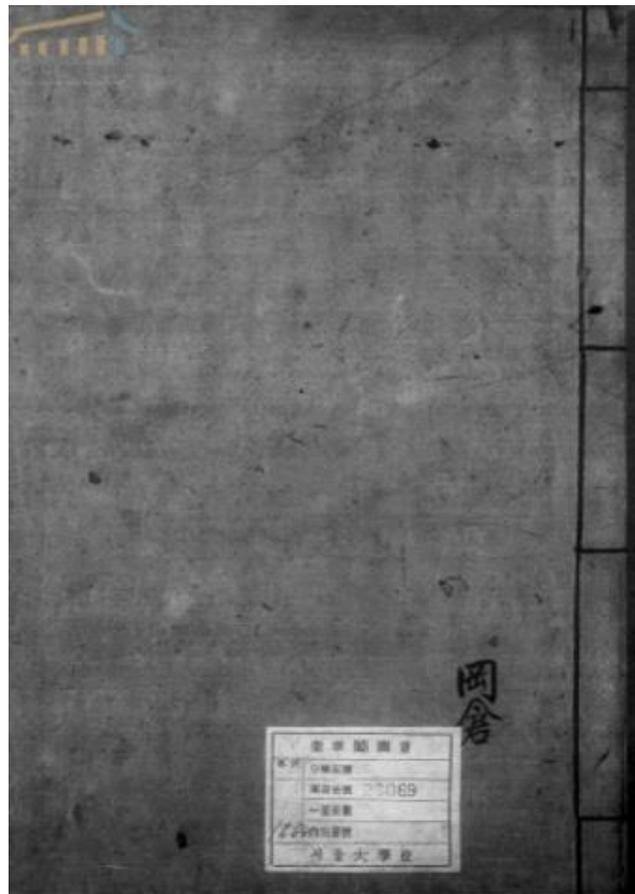
## 【和訳】

辛卯六月二十日仁監(仁川監理署)に關すらく、相考すべき事、照らし得たる鑄洞新設日語学堂教師岡倉由三郎に月給一百元式(ずつ)を本港税項中に従いて本年七月より始めと為し、按發すべき事、今処分を奉り、この関飭の至るを奉りて即ちに欽遵辦理してまさに宜しかるべき事。

## 2.4 『日本語學校教師雇傭契約書』

『日本語學校教師雇傭契約書』は、1891年に韓国政府が「日語学堂」の教師として招聘した「岡倉由三郎」と、「督辦交渉通商事務」の「閔鍾默」が締結した雇用契約書である。【資料7】は『日本語學校教師雇傭契約書』の表紙で、【資料8】はその内容の全文である。

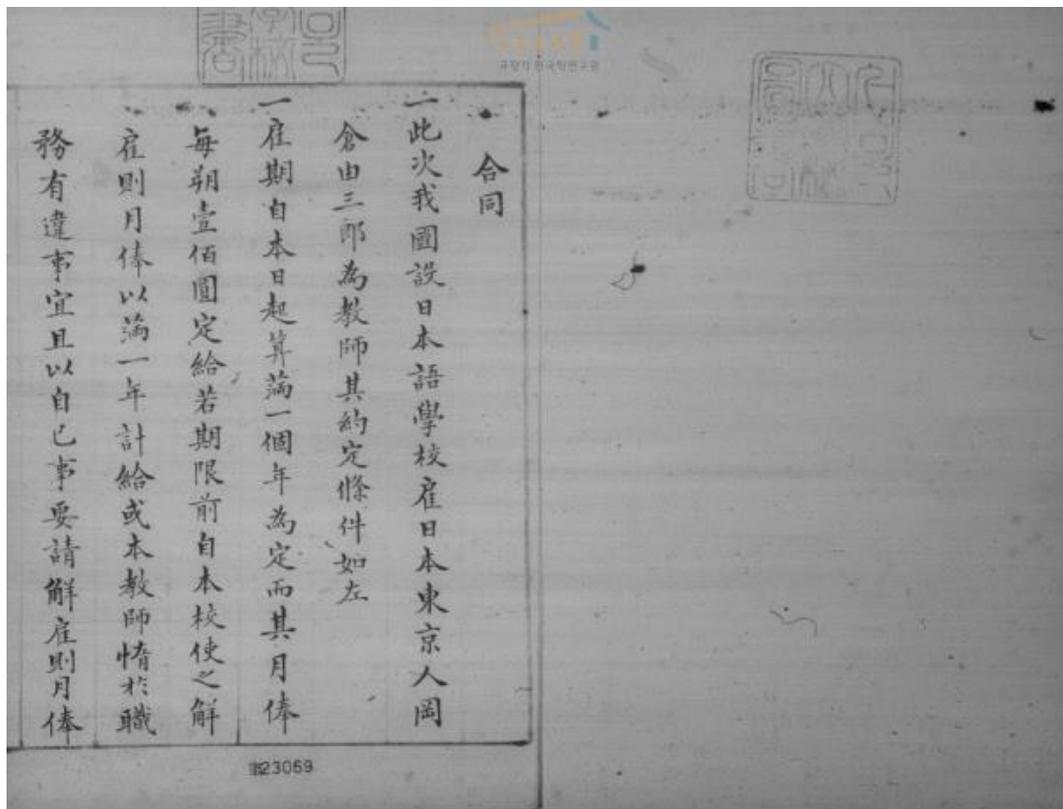
## 【資料7】 『日本語學校教師雇傭契約書』の表紙

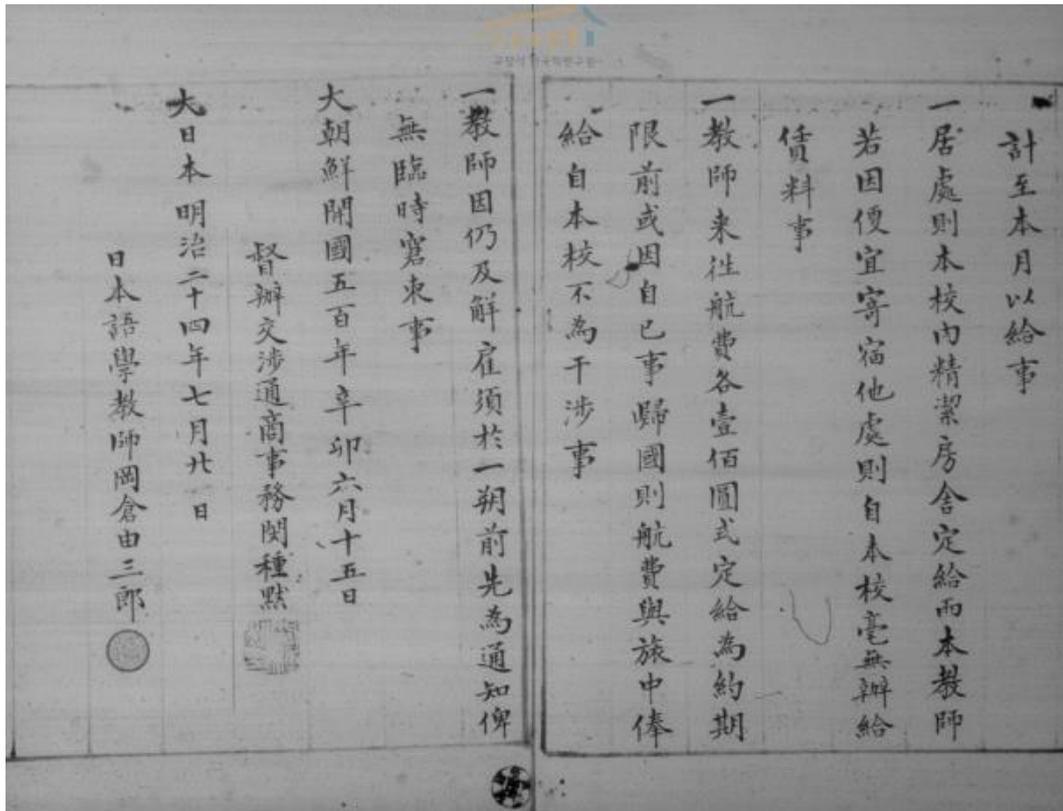


【書誌情報】

- ① 書名：合同[日本語學校教師雇傭契約書]
- ② 記録者：閔鍾默(朝鮮)・岡倉由三郎(日本)締結
- ③ 成立時：開國500年(1891)
- ④ 冊・卷数：1冊(2張)
- ⑤ 大きさ：30.3×21.5cm

【資料8】『日本語學校教師雇傭契約書』の本文





合同

一此次我国設日本語學校雇日本東京人岡倉由三郎為教師其約定条件如左

一雇期自本日起算滿一個年為定而其月俸每朔壹佰圓定給若期限前自本校使之解雇則月俸以滿

一年計給或本教師惰於職務有違事宜且以自己事要請解雇則月俸計至本月以給事

一居處則本校內精潔房舍定給而本教師若因便宜寄宿他處則自本校毫無辦給賃料事

一教師来往航費各壹佰圓式定給為約期限前或因自己事帰国則航費與旅中俸給自本校不為干涉事

一教師因仍及解雇須於一朔前先為通知俾無臨時窘束事

大朝鮮開國五百年辛卯六月十五日

督辦交涉通商事務閔種默(印)

大日本明治二十四年七月廿日

日本語學校教師岡倉由三郎(印)

## 【和訳】

### 合同

- 一 今度我国、日本語学校を設け、日本東京人岡倉由三郎を雇いて教師と為す。その約定条件は左のごとし。
- 一 雇期は本日より起算し満一個年を定めと為す。而してその月俸は毎朔壹佰圓を定めて給す。若し期限前本校よりこれをして解雇せしむれば、月俸は満一年を以って計り給す。或いは本教師職務において怠け、事宜に違ふことあり、且つ自己の事を以って解雇を要請せば、すなわち月俸は本月に至るを計りて以って給すべき事。
- 一 居処はすなわち本校内の精潔なる房舎を定めて給す。而して本教師が若し便宜に因り他処に寄宿せば、すなわち本校より毫も賃料弁給なき事。
- 一 教師来往航費は各々壹佰圓式(ずつ)定給することを約と為す。期限前或は自己の事に因りて帰国せば、すなわち航費と旅中の俸給は本校により干渉を為さざる事。
- 一 教師は因仍及び解雇には、須らく一朔前に先ず通知を為し、時に臨んで寤束無からしむべき事。

大朝鮮開国五百年辛卯六月十五日

督辦交渉通商事務関種黙(印)

大日本明治二十四年七月廿日

日本語学校教師岡倉由三郎(印)

## 2.5 『東京朝日新聞』

『東京朝日新聞』は、日本の日刊新聞である『朝日新聞』の東日本地区での旧称である。現在の「朝日新聞東京本社版」の前身にあたる。略称は「東朝」<sup>38</sup>。現在『朝日新聞』が創刊された1879年1月から1989年までの、110年分の検索が可能な紙面データベースで、掲載日や見出しのほか、人名、地名、事象名などのキーワード、分類で検索し、ヒットした記事が載った紙面イメージを拡大・縮小しながら、閲覧できるようになっている。

1891年5月22日(明治二十四年五月二十日)の雑報欄に、「日語学堂」の設立に関して

---

<sup>38</sup> 沿革：朝日新聞社インフォメーション (<http://www.asahi.com/shimbun/history.html>)

書かれているが、その内容は以下のとおりである。

【資料9】『東京朝日新聞』の1891年5月22日(明治二十四年五月二十日)の雑報

朝鮮の日本語學校 朝鮮にては今回日本語學校を設くるに決し京城鑄字洞(我領事館の傍)に其校舎を建築する筈にて目下地形中ありと同國にて外國語學校の設立あるは之が始にてまた耶蘇教會附屬の學校を除くの外公立學校の設立あるも亦之が嚆矢なりとぞ

● 朝鮮の日本語學校 朝鮮にては今回日本語學校を設くるに決し京城鑄字洞(我領事館の傍)に其校舎を建築する筈にて目下地形中なりと同國にて外國語學校の設立あるは之が始にてまた耶蘇教會附屬の學校を除くの外公立學校の設立あるも亦之が嚆矢なりとぞ

### 第3節 「日語学堂」の設立時期

韓国は1876年の日本との江華条約をはじめとして、1882年以降にはアメリカ・ロシア・清・ヨーロッパ諸国と修好通商条約を結び、国際世界との交流を開始した。このような国際情勢の中で、韓国政府は1891年漢城に「日語学堂」を開き、初代教師として岡倉由三郎を招聘する。この岡倉によって近代韓国における最初の日本語教育が始まったのである。

<sup>39</sup> 「地形」は一般的に土地の様子の意味で使われるが、『日本国語大辞典 7』(p.334)には「建築などのために地面をならし地固めをすること。整地すること。」と記されている。

鈴木(1894:220)には、次のように書かれている。

日本語学校は往年我公使より朝鮮政府に勧告して両国の交通年々頻繁に赴くの時双方言語の通せざるは不便甚はだしきを説き韓廷も之を然りとして教師を日本より聘して設立したるものにて(後略)

この記述から、「日語学堂」が在韓日本公使からの勧告によって設立されたということは窺えるが、その設立時期に関しては記されていない。また、「日語学堂」の初代教師を務めた岡倉が当時の「日語学堂」の状況を記録した資料を残していないため、「日語学堂」の設立初期に関する研究は非常に難しい状況であり、その先行研究における「日語学堂」の設立に関する記述にも揺れが見られる。

1891年5月22日付の『東京朝日新聞』には、上述のように「日語学堂」の校舎の建築に関して「朝鮮にては今回日本語学校を設くるに決し京城鑄字洞(我領事館の傍)に其校舎を建築する筈にて目下地形中なり」と記されている。

この記述から5月22日の時点では「日語学堂」の校舎の整地中であったことが確認できる。その一方で村岡(1928:400)は、岡倉の韓国渡航の経緯について書いている。

明治二十四年六月、「日本新文典」を著された。その頃のこと京城に朝鮮政府が新設することになった日本語学校で唯一人の教師兼校長を求めてをる由を和田万吉氏から耳にせられ、予てから朝鮮語研究の希望もあつたので、進んで之に当たることに決心し、六月末任地へ赴かれた。

6月末に渡航した岡倉は、1891年7月20日に「日語学堂」の教師として契約を交わしているが、その内容については『日本語学校教師雇傭契約書』から確認できる。『日本語学校教師雇傭契約書』には、「大朝鮮開国五百年辛卯六月十五日」/「大日本明治二十四年七月廿日」に督辦交渉通商事務であった関種黙と岡倉が結んだ契約の内容が書かれているが、「唯一人の教師兼校長」である岡倉の契約前に学校が始まったとは考えにくい。「日語学堂」の設立は1891年7月20日、またはそれ以降であると考えられ

る。また前章で確認したように『統理交渉通商事務衙門日記』、『統椽日記』、『仁川港關草』には「辛卯六月二十日」の条に「新設日語学堂」のことが書かれている。上記の史料は漢文で書かれており、文章に時制が表されていないため、「新設日語学堂」が当日のことであるか否かについて断言はできないが、毎日のことを記録する史料の特徴から考えると、「辛卯六月二十日」即ち、「西暦1891年7月25日」であると判断される。

#### 第4節 「日語学堂」の設立地域

「日語学堂」の設立地域について、李光麟(1973)では「はじめ鑄字洞に設立していた」<sup>40</sup>と記しており、이계형(2007)では「漢城府南部鑄洞に「日語学堂」を開いた」<sup>41</sup>と書いている。渡辺(1973:68-69)<sup>42</sup>では、「『李太王朝史』の李太王二十八年(明治二四年、一八九一年)六月二十日条に「日語学堂ヲ漢城付南部寿洞ニ開設シ、日本人岡倉由三郎ヲ教師ト為ス」と書いてあることをあげ、日語学堂の所在地について以下のように考察している。

その所在地であったという「南部寿洞」についても、南部(区)には「寿洞」という洞名はなく、「鑄洞」の誤りかと想像されるが、これも詳かにしえない。ただ「鑄洞」というのは「鑄字洞」のことで、今日も洞名が残っており、恐らく「南学」の置かれていた所と思われる「南学洞」のすぐ隣の洞であり、のちに日本人の居留地の中心となった「泥岬」の西隣の地であるから、このあたりに日語学堂があったらしくは思われる(今日の日新国民学校、日帝時代の元日之出小学校の付近?)。

---

<sup>40</sup> これは『統理交渉通商事務衙門日記』と『統椽日記』によるものとしているが、『統理交渉通商事務衙門日記』には設立地域に関する記述がなく、『統椽日記』には「鑄洞」と記されている。

<sup>41</sup> これは『統理交渉通商事務衙門日記』によるものとしているが、『統理交渉通商事務衙門日記』には設立地域に関する記述がない。

<sup>42</sup> 渡辺(1973)は「鑄」の新体字である「鑄」を用いて「鑄洞」、「鑄字洞」と表記しているが、本稿ではそのまま引用する。

渡辺(1973:69)は上記の『李太王朝史』の引用について、「この記事は、『統理交渉通商事務衙門日記』から拠ったものとされており、今日われわれはまだその原典をみることができていないため、これ以上の詳細は分からない」と述べられており、当時の研究者は原典が見られなかったことが分かる。

しかし、今回『統理交渉通商事務衙門日記』を確認したところ、同書には設立地域に関する記述はなく、『統椽日記』に「又関鑄洞新設日語学堂」、『仁川港關草』に「相教事照得鑄洞新設日語学堂」と記されていた。

『ソウル地名辞典』(2009)には「(鑄洞は)、漢字名で鑄字洞であり、略して鑄洞とする。倣洞と表記することもある」と記されており、『東亜日報』1975年5月7日付の鑄字洞に関する記事でも次のように書かれており、「鑄洞」は「鑄字洞」を漢字で略した表記であったことが分かる。

「鑄字洞」의 유래는 이곳에 주자소(鑄字所)가 자리잡고 있었기 때문에 붙여진 이름이다. 속칭으로는 「주자골」이라하고 한문으로는 이름을 줄여 「鑄洞」이라도 한다. 1914년 경성부제(京城府制) 실시에 따라 「鑄洞」의 쇠금자인 「金」 획을 떼내버리고 「壽町」이라고 했다가 해방후 다시 「鑄字洞」으로 바뀌었다.

#### 【和訳】

「鑄字洞」の由来は、ここに鑄字所があったため付けられた名前である。俗称では「ジュザッコル」と言い、漢字では略して「鑄洞」とも言う。1914年京城府制実施により「鑄洞」から「金」をとり「壽町」にしたが、解放後再び「鑄字洞」に変わった。

日本側資料である『東京朝日新聞』1891年5月22日付の記事にも、「日語学堂」の設立地域について「京城鑄字洞(我領事館の傍)に其校舍を建築する筈にて目下地形中なり」と記されている。

この記述から見ると「日語学堂」が「漢城府南部薰陶坊鑄字洞契鑄字洞」に設立されたことは確かであると考えられる。『李太王朝史』の「寿洞」という表記について

「<sup>ママ</sup>鑄洞の誤りかと想像される」、また「<sup>ママ</sup>鑄洞というのは<sup>ママ</sup>鑄字洞のこと」とした渡辺(1973)の推測は、正しかったのである。その一方で、小倉(1940:17)は、次のように書いている。

日語学校 乙末年以前から存して居た。最初は日本公使館内に設けられ、次いで敦化門前の或る箇人の家に移され、箇人教授式の簡単な学校であったが、其の後校洞に移転し、正式の日語学校となった。

これを稲葉(1997)と陸英恵(2003)<sup>43</sup>が引用しているが、小倉(1940)がその参考文献を挙げていないため、その内容の確認はできない。関連資料の有無の確認やその考察は他日に期したい。

## 第5節 まとめ

本研究では併合前韓国の日本語教育に関する研究の基礎調査として、一次史料に基づき「日語学堂」の設立時期と地域について考察した。

設立時期に関しては史料の考察から「辛卯六月二十日」、即ち「西暦1891年7月25日」に設立されたと判断される。先行研究で揺れが見られる理由のひとつは西暦と旧暦の混同によるものと推測される。実際に先行研究で旧暦と西暦が区別されず書かれているケースが少なくなかった。

「日語学堂」の設立地域についての考察からは、「日語学堂」が「漢城府南部薰陶坊鑄字洞契鑄字洞」に設立されたことを確認した。「鑄洞」という表記は「鑄字洞」を漢字で略した表記であり、「寿洞」は、渡辺(1973)の考察のように「鑄洞」の誤りであると考えられる。

---

<sup>43</sup> 陸英恵(2003)では、「日語学堂」の設立時期に関する記述で鈴木(1894:220)からも引用しているため、同論文内で揺れが見られるが、本稿ではこれに関する議論はしないこととする。

「日語学堂」は近代韓国における最初の日本語教育機関であり、韓国における日本語教育の歴史について考える上で重要な存在である。本研究では1891年4月から同年7月という先行研究の幅広い揺れの原因に関して完全に解明するには至りえなかったが、今後さらに「日語学堂」の実状について詳しく考察を行い、その詳細を明らかにしたい。

## 第4章 「日語学堂」の初代教官－岡倉由三郎

### 第1節 はじめに

### 第2節 岡倉由三郎とバジル・ホール・チェンバレン

### 第3節 岡倉由三郎の韓国語研究

### 第4節 岡倉由三郎と韓国語研究者の交流

### 第5節 岡倉由三郎の日本語教育

### 第6節 まとめ

## 第4章 「日語学堂」の初代教官－岡倉由三郎

### 第1節 はじめに

本章では日本語教育者としての岡倉を取り上げ、開化期「日語学堂」における日本語教育の実状ならびに彼の韓国語研究と日本語教育との関連性を明らかにする。

岡倉由三郎(1868～1936)は、開化期、漢城に設立された「日語学堂」の初代教官を務めた人物であり、韓国における日本人による日本語教育に先鞭を着けたという意味で、日本語教育史上にも重要な存在である。

しかし、韓国における近代日本語教育の嚆矢となる岡倉の日本語教育についての先行研究では、彼の教育と後の植民地教育との関連からの否定的評価が多くみられている。渡辺(1973:74)は、「岡倉自身の主観的意識はどうであれ、その日語による二言語主義の論理構造の中には、後年の日帝期の日語教育が包蔵した性格をそのままに潜在させていた、というほかはないようである」と述べ、宮川(2000)は岡倉の韓国教育論に関して考察し、岡倉の教育観と言語観が明治期から大正期にかけての侵略的国粹主義者たちの理論的後ろ楯になったと記しており、彼の日本語教育が日本の「ハングル」廃止政策につながる言語統制の先兵的役割をはたしたと述べている。また、稲葉(1990b:63)では、「旧韓末『日語学校』の全体像への接近を試みたものとして渡辺学の先行研究の他に見るべきものはなく、とくに韓国人研究者の間では、日語学校の存在は奇妙なほどに軽視されている」と述べているが、これは「日語学校」が植民地教育に繋がったという意識が、韓国人研究者の間で作用していたからではないだろうか。

本研究では植民地教育に繋がる言語政策としての日本語教育ではなく、外国語教育としての日本語教育という点に焦点をあて、開化期日語学堂における岡倉の日本語教育法、ならびに岡倉の韓国語研究と日本語教育との関連性について考察する。また、岡倉の韓国語研究の始まりとなったチェンバレンの授業について考察し、チェンバレ

ンから受けた教育が岡倉の韓国語研究と日本語教育にどのような影響を与えたかについて考えるとともに当時韓国学研究者との交流関係についても検討する。

## 第2節 岡倉由三郎とバジル・ホール・チェンバレン

岡倉は、「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」(1935a:39)で「僕が今日まで他の人から受けた感化は、素より多種多様で、それを一一挙げて言うことは不可能であるが、その中で、特に強大な力を及ぼした存在としては、次兄の天心、星崎はつ子、それから王堂チャムブレン氏である」と記している。

アーネスト・サトウ(Sir Ernest Mason Satow、1843~1929)やウィリアム・ジョージ・アストン(William George Aston、1841~1911)とともに、19世紀後半~20世紀初頭の最も有名な日本研究家の一人であるバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain、1850~1935)は、1873年5月29日お雇い外国人として来日した。翌1874年より東京の海軍兵学寮(後の海軍兵学校)で英語、数学、地理、万国史を教え、1886年には文科大学長・外山正一の推薦により帝国大学の外国人教師となったチェンバレンは、わずか4年にすぎなかった教授在任中に、言語学者の上田万年や本論文の対象である岡倉由三郎といった次代の俊英を育てあげた。

岡倉は、英語学・英語教育学の専門家として知られているが、韓国における日本人による日本語教育に先鞭を着けたという意味で、日本語教育史上にも重要な存在である。岡倉(1935a:41)は韓国渡航の理由について、「先生から教へて戴いた朝鮮語の研究が、深めたかつたからであり」と述べており、チェンバレンから教授された韓国語が韓国における日本語教育の契機になったと考えられる。

チェンバレンが正確にいつから韓国語研究を始めたのかは不明であるが、楠家(1986:160)は、1880年8月には、サトウ、アストン、チェンバレンの三人が共同で韓国語の研究をはじめていると記している。また楠家(1986)には、サトウがアストンと

ディキンス宛に送った書簡が載せられており、チェンバレンの韓国語研究について窺うことができる。

1881年10月7日のサトウがアストン宛に送った書簡

チェンバレンとわたしは、今日、朝鮮人教師のもとで一緒に勉強しています。わたしたちは翻訳について話し合ったのですが、チェンバレンは強固な意見を持っています。たとえば[朝鮮語の]아、어、으は[アルタイ語の]ä, ö, üにあたると言いだしたのです。(p.177)

1882年3月7日のサトウがディキンスにあてた書簡

アストン、チェンバレンとわたしは朝鮮でずっと勉強して、互いに研究を推進しています。(p.178)

こうした共同研究でアストンは韓国語について論文を数多く発表し、サトウも韓国書籍に関する研究を推進したが、チェンバレンはこの時期に『古事記』の完全英訳という大仕事をかかえていたので、韓国関係の目立った業績をあげることはなかった(楠家1986:160)。しかし、このような韓国語研究が、後のチェンバレンの比較言語研究と帝国大における博言学の教授に役立ったと考えられる。

岡倉はチェンバレンの在任2年目の1887年に、選科生として帝国大学に入学した。バジル・ホール・チェンバレンの授業については、毎年度の授業内容の報告書である「申報」が東京大学に残され、堀川(1992)「チェンバレン帝大教師時代の資料」で翻刻されているが、その内容は次のとおりである。

教師チェンバレン申報

千八百八十七年九月ヨリ千八百八十八年七月ニ至ル一学年ノ第一、二学期ハ日本語ノ変例及  
往古ヨリ現今ニ至ル和歌ノ方式全般ヲ研究ス其ノ硬概ヲ掲クレバ語原論動詞基原語尾ノ性質  
屈曲及言語ノ組立トス而シテ常ニ学生習熟ノ外国語ヲ参照シテ日本語ト外国語間ノ異同ノ点  
ヲ指摘シ且ツ之レヲ解釈シ得ルトキハ其理ヲモ合セテ説明シタリ是ノ如ク自国ノ語ノ沿革及

組織ニ略々通シタル後博言学ノ原理即チ博言学科ノ基礎ヲ説明シ余ニ比較博言学ノ研修ニ導クヲ勉メタリ（後略）(pp.16-17)

国語博言学教師チャンブレン申報

本学年ニ於テハ余ハ博言学科第二級学生ニホイットネー氏「ライフ、エンドグロース、ヲフ、ラングエージ、」ヲ教科書トシ勤メテ学生ノ熟知スル東洋ノ諸言語ヲ引用シテ比較博言学ノ諸原理ヲ講授セリ(p.17)

岡倉(1935b:192)では、上記のチェンバレンの授業を以下のように回想している。

チャムブレン氏のお講義は、日本語の、言語系統中の位置やら、その姉妹語と視られる他の国語との構造の異同等を、考に入れての説述であつたからであつた。それらの事は、今日から考へると、特に耳新しいことでもないが、明治の二〇年と云ふ、この方面の学問の極めて若かつた時代には、先生の言々句々が我々に驚異の眼を見ひらかせたのであつた。

後に岡倉(1894c)は外国語教育における語学教授論について説いているが、文法の教授方法について、「原語の文法書の祖述を止め常に国語を比較の基礎として兼て生徒の学び知れる文章の中より説明の材料を取り原文に存する規則のしかも我等に入用なるものゝみを授くべきなり」(pp.33-34)と述べており、教師の矯正の要点は外国語と国語との連絡を密にすることであるとし、「外国語の教師は其教ふる外国語と其教へ方とに精通したるは勿論国語と漢文に就きても能く之を比較の基と成すに足らん程は必ず之を知らざるべからず」(p.42)と説いている。岡倉は外国語教授において国語と外国語との比較を基礎とし、外国語教師は外国語はもちろん国語と漢文についても精通しているべきであることを主張しているが、このような彼の外国語教授観は、上記のチェンバレンの授業から育てられ、開化期日語学堂の日本語教育におけるオレンドルフの教授法につながったと考えられる。

博言学の講義については、「先生から次に教を受けたのは、アイヌ語の構造のあらましであつた。その次に先生は、朝鮮語の文典を説かれ、且つ、仏国宣教師の夙に

出版してみた *La Grammaire Coréenne* を資料として、同語の演習をも指導して下さった。(中略)アイヌ語は、日本語とは別の系統の語で、日本語に知られない、受身の前置詞のある事や、アイヌの数詞が二十を単位として物を数へ、例へば、七十を示すには  $(20 \times 4) - 10 = 70$  の迂りくどい様式を取ることを説明して下さったので、僕は、アイヌ語より朝鮮語に一層強い親しみを感じるやうになった」(岡倉 1935a:39)と述べている。岡倉はチェンバレンから比較博言学を学ぶとともに、3年間アイヌ語と韓国語の指導を受けていたが、上のように日本語と韓国語との構造上の類似ゆえに、韓国語に強い親しみを感じたようである。

上記からみると岡倉の外国語教授観ならびに韓国語研究は、帝国大学に在学中チェンバレンから受けた影響が大きかったと考えられる。前述のように岡倉はチェンバレンから教えてもらった韓国語の研究を深めたいということで韓国へ赴いているが、チェンバレンとの出会いがなかったら、日本語教師としての岡倉もいなかったであろう。

### 第3節 岡倉由三郎の韓国語研究

佐藤(2004a:64)によると一般的には岡倉は英語学・英語教育学の専門家として有名で、その業績も英学関係が主であるが、最初から英語学・英語教育学を志したわけではなく、初期の研究は日本語文法、韓国語、琉球方言を主としていた。

村岡(1928:400)には岡倉が日本語教師として韓国に渡った経緯について以下のように書かれており、チェンバレンから教授された韓国語に対する研究希望が岡倉の韓国渡航の契機になったと考えられる。

明治二十四年六月、『日本新文典』を著された。その頃のこと京城に朝鮮政府が新設することになった日本語学校で唯一人の教師兼校長を求めてをる由を和田万吉氏<sup>44</sup>から耳にせられ、予てから朝鮮語研究の希望もあつたので、進んで之に当たることに決心し、六月末任地へ赴かれた。

また岡倉は「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」(1935a)でチェンバレンからもらった手紙を数通示しているが、1901年3月27日の書簡の「I am glad your Korean studies are being kept up. Japan has, I believe, a great future as instructress of the whole Far-East」(p.41)について「“Korean studies”云々は、僕が東京外国語学校で一時朝鮮語科を主裁し、そのついでに同語の研究を続けてゐる旨を、先生に報じたからである」(p.41)と説明しており、東京外国語学校教授に任じられ、韓国語を担当している際にも岡倉が韓国語の研究を続けていたようである。

岡倉の韓国語研究の業績としては「朝鮮の文学」(1893a)、「吏道・諺文考」(1893b)、「字音考」(1893c)、「東洋博言学研究の必要」(1893d)、「為古吐考:附朝鮮語講究史」(1897)、「主格を示す本来の辞」(1900)が挙げられ、「朝鮮朝野年中行事」(1892)、「朝鮮の墳墓」(1895)といった韓国文化についての業績も残しているが、その業績から見ると、彼が文学から吏道、諺文、音韻、文法、文化まで幅広く研究をしていたことがわかる。

なお、平井法・小尾寿子(1975:157)の「著作年表」には、「朝鮮語典総論草稿」(1902)があげられているが、これは、「東洋博言学研究の必要」(1893d:95)に「この草稿は余か朝鮮語の語典を編述するに當り漫ろに考へ付きし事を取り急きて覚えがきの様に書き付けたる者なれば」からの誤りではないかと推測される。

モーリス・クーラン『朝鮮書目解題』第一巻の序説に続く主要参考文献リスト(Liste des principales références, ccvi)の中に、Aston の”On Corean popular litterature” や Griff

---

<sup>44</sup> 和田万吉(1865-1934)：日本人名大辞典第6巻(平凡社)に「岐阜県生まれ。図書館学者、文学博士。明治23年に東京帝国大学国文科を卒業し、東京帝国大学書記に就任、図書館管理を経て、29年助教授兼図書館司書官に任命された。明治43年から欧米各国に留学し、帰国後東京帝国大学文学部教授となる」とある。

-is(1882) ”Corea, The Hermit Nation”、仏蘭西宣教師による「韓仏辞典」(1880)や「韓国語文法」(1881)と並んで、以下のように岡倉の「朝鮮の文学」が挙げられている。

岡倉由三郎, おかくらよしさぶらう

OKAKURA YOSHISABURAU,

朝鮮の文學, ちやうせんのぶんがく

Tiyau sen no bun gaku,

Au sujet de la littérature coréenne; 【和訳：朝鮮の文學について】

Article donnant des détails intéressants sur les livres et la littérature en langue vulgaire et reproduisant, avec traduction japonaise, plusieurs poésies

populaires; 【和訳：韓国語による書籍および文学に関する興味深い詳細を示し、多くの詩文を日本語の翻訳とともに翻刻した論文】

(哲學雑誌、てつがくざっし, Tetu gaku zatu si, Revue de philosophie, 8<sup>e</sup> vol., n<sup>os</sup> 74 et 75, Tōkyō, avril et mai 1893).

また、梅田(2013:4-5)には岡倉について「近代期の吏道研究の嚆矢となる」と記されている。以下に引用する。

近代期の吏道研究の嚆矢となる岡倉由三郎(1893)は、吏道とはわが国の「万葉仮名」のように漢字の音韻、訓釋の全部または一部を借りて音義上多少の類似がある朝鮮本来の語を示すために、漢文の間に「送り仮名」のように挿入したものを云うのだと述べている。(中略)なお、岡倉由三郎(1897)「爲古吐考附朝鮮語講究史」(『帝国文学』3-4、明治30年4月、pp.378-394)もあるが、經書訓点の吐についての説明である。

上記の岡倉の吏道研究は、当時の日本人学者からも認められていたようで、岩橋(1918:208)は、「本邦に於いて吏道に対する正當の<sup>ママ</sup>理會は、<sup>ママ</sup>實に岡倉氏の吏道・<sup>ママ</sup>諺文考に始まるのである」と記しており、白鳥(1897:98)にも、「吏は胥吏の吏なり、道は仮

名にて、彼国の語に語尾と云ふことなり、と岡倉由三郎の吏道・諺文考に見えたり」と述べられている<sup>45</sup>。

しかし小倉(1928:309)には「岡倉先生が嘗て朝鮮に在任せられた際、朝鮮語の研究に没頭せられ、それらに関する幾多の有益な論文を發表せられたことは、今日知る人も少なからうが、(後略)」と書いており、岡倉の韓国語研究業績について広く知られてないようである。

와타나베(2002)では、日本人研究者による訓民正音研究史を検討しており、岡倉の訓民正音研究について考察している。

本稿では、上記先行研究を参考しつつ、岡倉の韓国語研究および諺文観について考察し、韓国における日本語教育との関連性について考える。

岡倉(1893a)は、諺文について「世宗の朝の製作は決して創作に非ず必ず模作なるべし」(p.434)と述べ、諺文の起源について創作ではなく模作であると主張しているが、理由として、「凡そいづれの文字にても一朝一夕にして容易に出来あがるべき物に非ず、殊に諺文の如き形象の跡なく文字の本分たる音韻想起の単純なる符号に至りては、他の既に種々の発達を経て纔に成就せし者を其儘借り来るか、または之が製方を見做ひ斟酌して造るに非るよりは決して、一時に其域に急進する能はざるなり」(p.434)、  
「諺文の製作に関しては未だ其充分なる事を知るを得ず世宗の朝禁裡に諺文庁を設け既成の仮名を参酌し現在の諺文を整へしは実事なるべきも其時まで朝鮮に仮名なかりきとも又其時始めて仮名を創作せしなりとも未だ断言すべからざるなり」(p.495)と述べている。岡倉は、諺文が既存の文字を規範にしないで、「其時始めて」作られたとは信じられないとしているが、これについて와타나베(2002)は、岡倉が諺文を模作としているのは諺文を見下したのではなく、むしろ高く評価しているためであると述べている。

また岡倉は「吏道・諺文考」で、『国朝宝鑑』に載せられている鄭麟趾の序文から、  
「(前略)癸亥冬我 殿下世宗創制正音二十八字、略掲例義以示之、名之曰訓民正音、象形而字倣古篆、因声而音叶七調、(中略)遂命臣等詳加解読、以諭諸人庶、使觀者

---

<sup>45</sup> 와타나베(2002) 『훈민정음 연구사 : 일본인 학자들의 연구를 중심으로』 p.14

不師而自悟、若其淵源之妙、則非臣等之所能發發揮也」(p.433)を挙げているが、この中で、「遂命臣等詳加解読」と「略掲例義以示之」に注目し、解例本の存在を推測している。彼は「名之曰訓民正音」から、諺文を訓民正音と称することと一旦理解しているが、「『臣等に命じて詳に解読を加へしむ』の句あるのみならず、『ほゞ例義を掲げて之を示す』ともあれば訓民正音の諺文の別名には非ずして、さる題目の書籍にはなきかとの思はるれども（後略）」(p.434)と述べ、訓民正音が諺文の別名ではなく、そのような題目の書籍ではないかと推定している。岡倉がその存在を信じていた訓民正音の解例本は、1940年、安東郡臥龍面周下洞で発見された。本の題目は、『訓民正音』であり、訓民正音の解例があることから、現在『訓民正音解例本』と呼ばれている。「訓民正音」についての岡倉の考察は正しかったのである。

一方で、岡倉(1894b:24)では「其組立略羅馬字に同じく、世界無比のアルハベットと云ふも不可なきが如く、誠に突然なるものなり。然れども、其行はるゝ範囲は、極めて狭小にして、女子又は下賤のものゝ書簡等に用ゐるに過ぎず、受取証の如き迄、尚日本に於いて正に受取申候也と、日本流の文章にて、一の日本字を交へず、全く漢字のみなると同じく、朝鮮流の文章にて、支那人にも何の事やら分るまじけれども、兎に角漢字のみを用ゐるなり」と諺文の優秀性について述べるとともに、諺文が漢字漢文より軽視されていたことを惜しんでおり、岡倉(1894a:10-11)でも朝鮮国民教育に際し、漢字を廃すことを唱え、諺文を用いることを主張している。

国語の採否は其国独立心の養成に係る。故に修学に際しては、国家独立一端として、是非とも彼等自国語を似て学ばしめざるべからず。由来朝鮮は、漢籍を用ゆと雖も、言語は全く相異なり、寧ろ日本語と稍や似たり。然れば、従来漢学を勉めたるにも拘はらず、言語は全く自国語を以つて学ばしめ、同時に文字も漢字を廃し、而かも朝鮮国固有の仮名文字即ち諺文を用ひしめざるべからず。蓋し朝鮮の文章は凡て仮名文字を用ひしむべし。（中略）今の時に當り、朝鮮教育を改良せんと欲せば、断して従来漢字を廃し朝鮮文字朝鮮言語を以て修学せしめざるべからず

以上のように岡倉は、韓国語について幅広く研究をしており、韓国の固有文字である「諺文」に対して高い評価を与えていた。前述で岡倉(1894c)は、外国語教授において国語と外国語との比較を基礎とし、外国語教師は外国語は勿論国語と漢文についても精通しているべきであることを主張しており、外国語教育における母語の重要性を力説した。岡倉が「日語学堂」の日本語教授において直接法ではなく文法訳読法を用いたのは、岡倉の韓国語に対する深い理解および彼の諺文観と無関係ではないと考えられる。

#### 第4節 岡倉由三郎と韓国語研究者の交流

岡倉は 1887 年から 1890 年まで帝国大学のチェンバレンの下で博言学を修めており、1901 年度には東京外国語学校韓語学科で韓国語を教えた経歴もあり、多くの日本語学者や韓国語学者と交流関係があったが、岡倉の学問的交流関係についての研究は英語学者との交流に焦点が当てられている。

本章では明治期の韓国語研究者として代表される小倉進平(1882-1944)と前間恭作(1868-1942)が残した記録<sup>46</sup>をもとに彼らと岡倉由三郎の交流について考察する。

小倉進平は宮城県仙台市出身の言語学者で『増訂朝鮮語学史』、「郷歌及吏読の研究」、『朝鮮語方言の研究』を著するなど韓国学の基礎確立に尽力した人物であり、特に郷歌の全面解説により、新羅歌謡の全容を明らかにした功績が大きいと評価されている。小倉は 1903 年から東京帝国大学で言語学を専攻し、1906 年の卒業後には上田万年の下で国語学研究室助手を努めるが、鄭承喆(2010:18)に東京帝国大学での小倉の交流について、以下のように記されている。

小倉進平は、大学および大学院で上田万年以外に保科孝一と新村出の講義、そして金沢庄三郎の出講講義を聴いたと思われます。同期と後輩にあたる伊波普猷、橋本進吉、金田一京

---

<sup>46</sup> 本章で用いる記録の繙読に際して梅田由美子氏(荻窪読売文化センター書道講師)の協力を得た。

助、東條操等とも緊密に交流しました。保科孝一をはじめ彼らは皆、上田万年の弟子であり、その後日本の言語学発展に大きく寄与した人物です。

また、イ・ヨンスク(1996:162)には「上田万年の門下からは、新村出、小倉進平、金田一京助、橋本進吉、藤岡勝二、岡倉由三郎など多くのすぐれた言語学者・国語学者が輩出した」と述べられており、村岡(1928:401)には「(岡倉が)明治三十二年二月(中略)新村出氏、藤岡勝二氏、八杉貞利氏等と「言語学雑誌」を出されたのもこの頃のことである」と記されている。

上記のような、東京帝国大学を中心として学問的交流から考えると、岡倉(1887年-1890年在学)と小倉(1903年-1906年在学)は在学期間は離れているものの東京帝国大学を中心として交流が始まったと思われる。

本稿では、学習院大学東洋文化研究所所蔵の「小倉進平関係文書」の小倉宛の岡倉の私信から二人の交流を窺うことにする。

1911年6月3日、小倉は朝鮮総督府学務局編輯課編修書記に任命され、韓国に渡航しているが、鄭承喆(2010:19)によると朝鮮総督府では教科書に関することに加え、『朝鮮語辞典』(1920、朝鮮総督府)編纂に関連した仕事を担当したようである。そのような中で全国各地で方言調査を進める一方、総督府に所蔵されていた朝鮮時代の奎章閣(1920年代末、京城帝大に移管)の古書古文献と自分の収集品をもとにして郷歌および文献についての調査研究を進め、その結果のひとつとして『朝鮮語学史』(1920)を刊行する。

以下①～③では、韓国で朝鮮総督府学務局に在職していた小倉宛に岡倉が送った書簡である。

① 大正九年(1920)の年賀はがき (九年一月一三日消印)

【表面】

京城市大平通総督府官舎第六号 小倉進平様

【裏面】

東京小石川区 雑司ヶ谷町三七

拝啓

元旦 昨年是一方な／らぬお世話に／なりました 此(の)間黒／田氏の上京の時承れば

恭賀新年 その後久く御不例<sup>47</sup>との事／邦家<sup>48</sup>の為に御自愛を祈ります あまり学問

岡倉由三郎 にのみ御凝りなく、御静養を祈ってやみません

敬具

大正九年(1920)の年賀はがきの裏面は、上段と下段に分かれ、上段右端に「大正」、左端に「九年」とあり、絵の中央上に庚の字、下に猿(申)の絵があることから、大正九年・庚申(かのえーさる)年の年賀はがきであることがわかる。

下段は中央に「恭賀新年」の大きな朱印、右に「元旦」、左に岡倉由三郎の朱色の角印が捺され、右端に東京小石川区、左端に雑司ヶ谷町三七と住所が印刷されており、余白の部分に文章が書かれている。

## ② 大正十年(1921)の年賀はがき (□年 1月 4日消印)

【表面】

朝鮮京城大平通官舎第六号 小倉進平様

【裏面】

東京小石川区 雑司ヶ谷町三七

拝啓

元旦 いよいよ例の／韓語辞典も／御大成あられたとの由／この間伝聞<sup>49</sup>邦家の為に

<sup>47</sup> (例でないの意から)貴人の病むこと。

<sup>48</sup> 国家

<sup>49</sup> (～との由)この間、伝え聞き、(邦家の為に大慶至極～)

**恭賀新年** 大慶至極で御座います その後御丈夫ですか先年の御好意いつまでも嬉しい

**岡倉由三郎** 思い出の種で御座います

御身御大切に。

上記のはがきは「①大正九年(1920)の年賀はがき」と同様に上段と下段に分かれ、上段右端に「大正」、左端に「十年」とある。絵の中央上に辛の字、下に鶏(酉)の絵があることから、大正十年・辛酉(かのとーとり)年の年賀はがきであることがわかる。

下段は中央に「恭賀新年」の大きな朱印、右に「元旦」、左に岡倉由三郎の朱色の角印が捺され、右端に**東京小石川区**、左端に**雑司ヶ谷町三七**と住所が印刷されており、余白の部分に次の文章が書かれているのも、「①大正九年(1920)の年賀はがき」と同じである。

### ③ 大正十三年(1924) 五月二十五日の封書 (口年口月口日消印)

#### 【封書表書き】

朝鮮京城府和泉町六 小倉進平様

#### 【封筒書裏書き】

封 五月二十五日岡倉由三郎 **東京市小石川区雑司ヶ谷三七** (住所印/2行)

#### 【本文】

拝啓

私共が都のいそがし／い生活にあたふたして／をる間にぐんぐんと御／研究を續けられ学／界に貢献を重ねら／れる事はまことに喜ば／しい御羨しい御事と／深く邦家の為／に慶／賀致します

「南部朝鮮の方言」御／恵與にあづかり御礼／の一言を申し上げながら／御身いやが上にも御健勝にと遥かに祈りあげます

岡倉由三郎

敬具

五月廿五日

小倉進平殿

この書簡は内容から「南部朝鮮の方言」(1924)をもらった謝辞であることが窺える。消印の日付は解読できないが、「南部朝鮮の方言」は大正十三(1924)年三月に朝鮮史学会で発行されており、同書奥付に著作者として小倉の名前が住所とともに掲げてあり、その住所は本書簡の封筒の宛書に同じである。即ち、京城府和泉町六番地となっている。従って、本封書は大正十三年(1924)のものであると考えられる。

上記のような研究成果が認められた小倉は総督府の在外研究員資格で1924年8月から1926年4月まで、当時の言語学の中心地であったヨーロッパに留学することとなり、帰国後には、京城帝大法文学部文学科朝鮮語朝鮮文学専攻の第2講座(朝鮮語学)担当教授として赴任する<sup>50</sup>。

この時期に小倉は『岡倉先生記念論文集』に「朝鮮語の toin-siot」(1928)を発表するが、そこで、「先生が朝鮮語学の上に残された偉大な成績は、今日吾人其の学に志す者の蒙を啓き、後進を益するところ頗る多きものあるを感ずる」(p.309)と岡倉の韓国学研究について高く評価をしている。

以下の「1929年5月5日の書簡」では、岡倉は小倉に論文に対する礼を言っているが、白井(2015:41)では、「小倉進平〔朝鮮語学の基礎を築く。京城帝国大学・東京帝国大学教授を歴任〕は大正一三(一九二四)年九月に『郷歌及び吏読の研究』を脱稿し、昭和四年(一九二九)年三月に京城帝国大学法文学部紀要として出版し恭作に郵送した。恭作は五月八日に小倉へ返信した。」と書かれており、小倉が恭作と同時に岡倉にも「郷歌及び吏読の研究」を送ったと推測できる。

#### ④ 昭和四年五月五日(1929)の封書

【封書表書き】

---

<sup>50</sup> 鄭承喆(2010)「小倉進平の生涯と学問」p.20

(4.5.5.消印) 朝鮮 京城帝国大学 教授 小倉進平殿 御前<sup>51</sup>

【封筒書裏書き】

封 五月五日 東京市外・中新井/岡倉由三郎/電話・練馬・一三六 (住所印/3行)

【本文】

拝啓 いよいよ御きげん／よく御研究御発表あ／らるゝ御事を心の奥から／深く邦家の  
の為に御慶び申あげます

この度御出版の郷歌と／吏讀の御研鑽はいづれも／若き日の私の小さな心を／動した  
事項であるだけ唯／今斯うした余蘊のない／御調査の跡に接しひと／倍御苦心の程  
をありがたく／存じます

この上とも御身お大切に遊／ばされこの道の為に御盡／し下さるやう神かけて祈られ  
／ます

先は御惠贈の一本に對／する御礼の一言のみをかく／は、早々敬具

五月五日 岡倉由三郎

小倉進平様

ここに「若き日の私の小さな心を動した事項であるだけ」と記しているのは、岡倉も若き日々に吏道に関心を持ち「吏道・諺文考」(1893)を発表したことを想起してのことであろう。

また、「唯今斯うした余蘊のない御調査の跡に接し」という言葉からも、岡倉がかつて「東洋博言学研究の必要」(1893d:95)に「この草稿は余か朝鮮語の語典を編述するに當り漫ろに考へ付きし事を取り急きて覚えがきの様に書き付けたる者なれば」と書いていながらも、今日韓国語の語典は存在してない現状を思うとき岡倉は韓国語研究に心残りがあったと思われる。

以下の「昭和八年一月二十日(1933)の封書」は、いつものお礼として、岡倉が小倉に「英語綴字法改良に関する私見」を発表しその著書を送ったようである。上記は書

---

<sup>51</sup> 手紙の脇付。

名ではなく内容に関する記述であると思われるが、その内容に当てはまるものは、まだ見つかっていない。

⑤ 昭和八年一月二十日(1933)の封書

【封書表書き】

(8.1.20 消印) 朝鮮京城府三坂通二七 小倉進平様

【封筒書裏書き】

封 一月二十日 東京市板橋区/中新井町三丁目/(電話練馬一三六) (住所印/3行)

【本文】

小倉進平さま

毎々お研究のおん/すりものをおわかち/いたゞき、光榮にぞんじあつくお礼/申しあげます。

小生このあひだ英語綴/字法改良に関する/私見を発表いたしました/たが、もとより痴人の夢<sup>52</sup>/にすぎませんけれども、/おわらひぐさまでに一本/おめにかけます。

まづはお礼の一端のみ/草々敬具

八・一・二〇、

岡倉由三郎

1933年3月31日、小倉は東京帝国大学言語学科教授を任命されるが、鄭承喆(2010:21)によると小倉は京城帝国大学教授を兼任し、毎年一度づつ集中講義のための韓国滞在中は、韓国語方言に対する調査も行なったようである。

以下の昭和8年7月の書簡は、小倉が東京帝国大学言語学科に在任している時期のものであるが、岡倉は韓国に送っており、久しぶりの韓国訪問を楽しみにしている様子が窺える。

---

<sup>52</sup> ばかばかしいことのたとえ

⑥ 昭和八年七月十八日(1933)の封書 【久しぶりの訪朝を知らせる】

【封書表書き】

(8.7.18 龍山局消印) 朝鮮京城 封 総督府学務局 小倉進平様 平信<sup>53</sup>

【封筒書裏書き】

(8.7.22 京城消印) 七月十八日 房州北條町/南浜 岡倉 (住所印/2行)

【本文】

拝覆

その後は御無音を申し上げてをりました。益々御盛ん／で何よりに存じます。

偕この度久しぶりで御／地へ渡ることになりまし／たが御地では何くれとなく／また

御厚情に浴する事と存じます発音に関／する講義をせよとのことで／十分様子はわか

りませぬが／御援助を得て多少でも益／になる話をのこして帰り度ものと存じます

宿所等の事は黒田氏に／御手数を願ひました廿／八日の四時の急行で東京を発／して

三十日の夜御地に入る／予定で御座います

久しぶりで面の晤を今から／楽しみにしてをります／御親切の御手紙に對し／御礼の為

早々敬具

八月二十八日 岡倉由三郎

小倉進平様

小倉進平は韓国語学の基礎を確立した人物とされているが、その基礎を築いた人物と評価されているのが前間恭作である。

前間恭作は対馬巖原出身の韓国語学者で『在山楼菟書録』『韓語通』『古鮮冊譜』などの多くの著作を残し、韓国語学の基礎を築いた人物であり<sup>54</sup>、末松(1957)と白井(2011、2013、2015)で彼の生涯と業績について考察されている。

<sup>53</sup> 平常の音信、無事のたより。封書の宛名の脇付にも用いる。

<sup>54</sup> 白井(2015)『前間恭作の学問と生涯』p.3

前間の主要業績と評価について以下、白井(2015:3)を引用する。

前間恭作は、明治二四年から明治四四年まで朝鮮に滞在し通訳官として働く一方で、在野において朝鮮研究をした人物である。大正一三年一月に前間恭作は、朝鮮に滞在した間に集めた蔵書〔在山楼蒐書〕を東洋文庫に寄贈し、在野の研究者として終生朝鮮研究を続けた。彼の『校訂交隣須知』(明治三七年、一九〇四)・『韓語通』(明治四二年、一九〇九)・『龍歌古語箋』(大正一三年、一九二四)・『鷄林類事麗言攷』(大正一四年、一九二五)・『朝鮮の板本』(昭和一二年、一九三七)・『半島上代の人文』(昭和一三年、一九三八)・『訓読吏文』(昭和一七年、一九四二、没後刊行)・『古鮮冊譜』(昭和一九年、一九四四・昭和三十年、一九五六・昭和三二年、一九五七没後刊行)などは、朝鮮学の基礎を築いた業績と言っても過言ではないだろう。

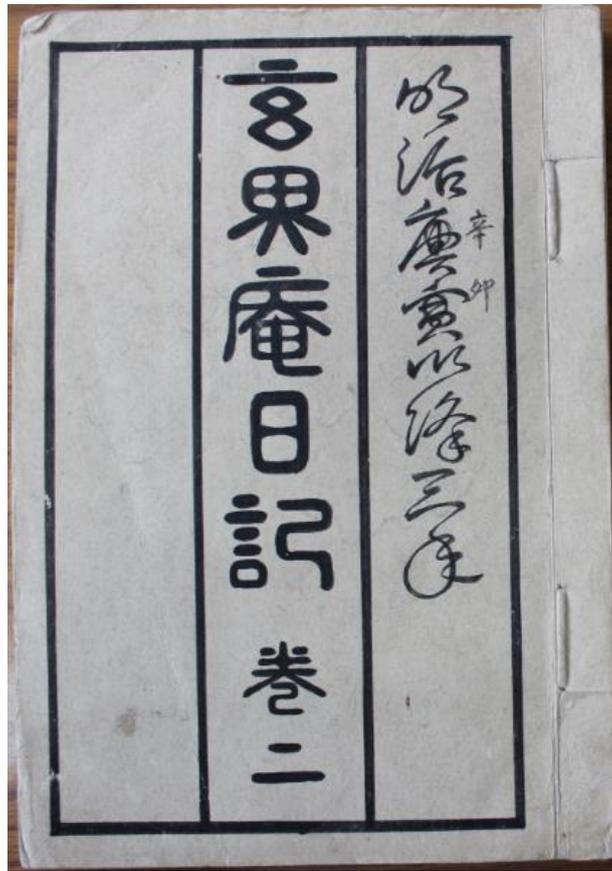
白井(2015)では、前間恭作の学問と生涯について考察しており、同論文には、前間と岡倉の交流についても記されている。本稿では先行研究を参考しつつ、岡倉と前間の交流関係について考える。

本稿では、九州大学朝鮮史学研究室所蔵の「在山楼文庫<sup>55</sup>資料 103 玄界庵日記」(以下、「玄界庵日記」とする)を使用するが、九州大学朝鮮史学研究室所蔵「玄界庵日記」は、明治 19(1886)年から明治 23(1890)年までの記録である「初巻」と明治 24(1891)年から明治 26(1893)年までの「巻二」からなっている。前間の漢城留学時の日常を記した「巻二」に岡倉との交流が窺える記述があり、以下の【資料 10】は、九州大学朝鮮史学研究室所蔵「玄界庵日記」(巻二)の表紙の画像である。

---

<sup>55</sup> 在山楼文庫とは、九州大学朝鮮史学研究室が所蔵している前間恭作の書簡や日記・原稿・メモ・通帳といった私的資料のことである。これらは、前間の孫・前間良爾(元・佐賀大教授)により一九八〇年九月一六日、箱崎の旧宅より九大朝鮮学教室に寄贈されたものである。九州大学朝鮮史学教室の長正統主任教授が一九八七年一〇月二五日死去したのをきっかけに、教授の遺志であった本文庫の基礎整理が開始された。九州大学・中村質、九州産業大学・長節子両教授のもと、一九八八年七月四日より同月一三日まで作業が行われた。(白井 2015:6)

【資料10】 「玄界庵日記」(巻二)



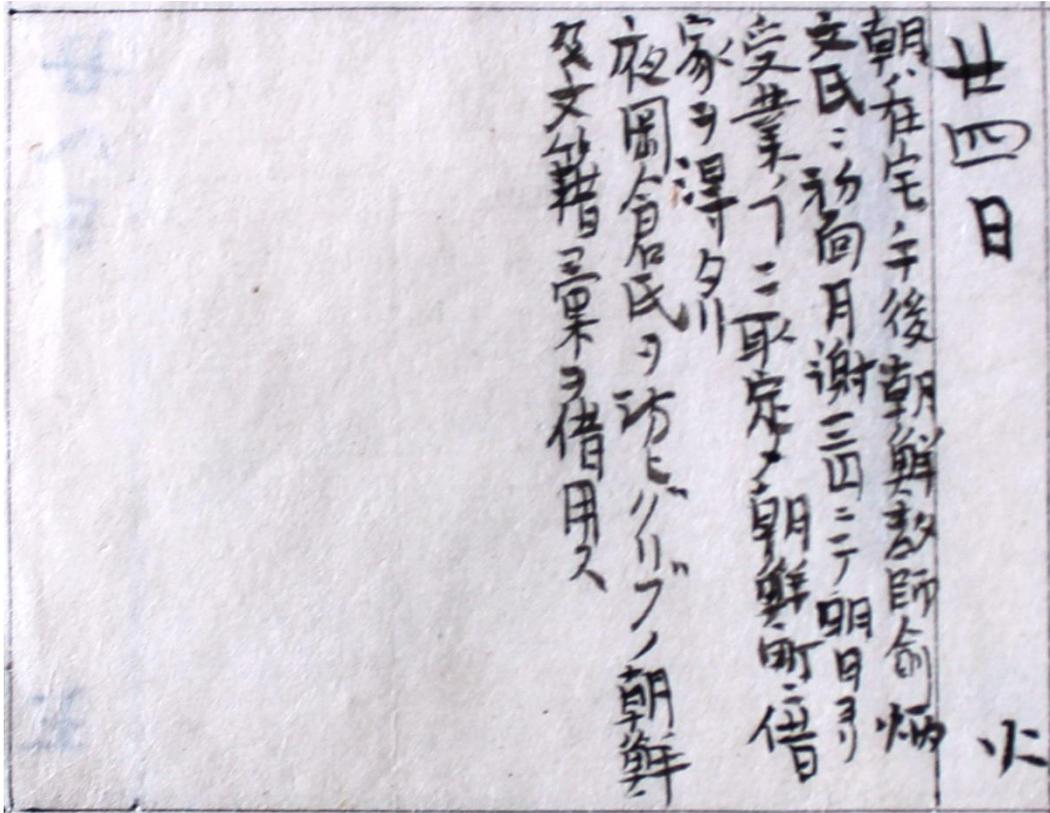
末松(1957:6)は、岡倉と前間の交友関係について次のように述べている。

(前間)先生が留学生としてはじめて漢城に入ったとき<sup>56</sup>、一日の長として岡倉由三郎があった。岡倉は先生と同年の生れ、朝鮮政府に聘せられて日本語学校を創めんとしていた。先生は入城数日ののち岡倉を訪い、グリーヒスの「朝鮮」と「三韓紀略分籍彙」を借り受け、翌日から分籍彙の謄写をはじめている。

末松の記述は以下の「玄界庵日記 明治24(1891)年11月24日(火)の条」に基いているものと思われる。

<sup>56</sup> 明治24(1891)年11月13日のことである。

【資料 11】 「玄界庵日記」 明治 24 年 11 月 24 日(火)の条



廿四日 火

朝ハ在宅午後朝鮮教師愈炳／文氏ニ初面 月謝三円ニテ明日ヨリ／受業ノヲニ取定メ 朝鮮町ニ借／家ヲ得タリ  
夜岡倉氏ヲ訪ヒグリブノ朝鮮／及文籍彙ヲ借用ス

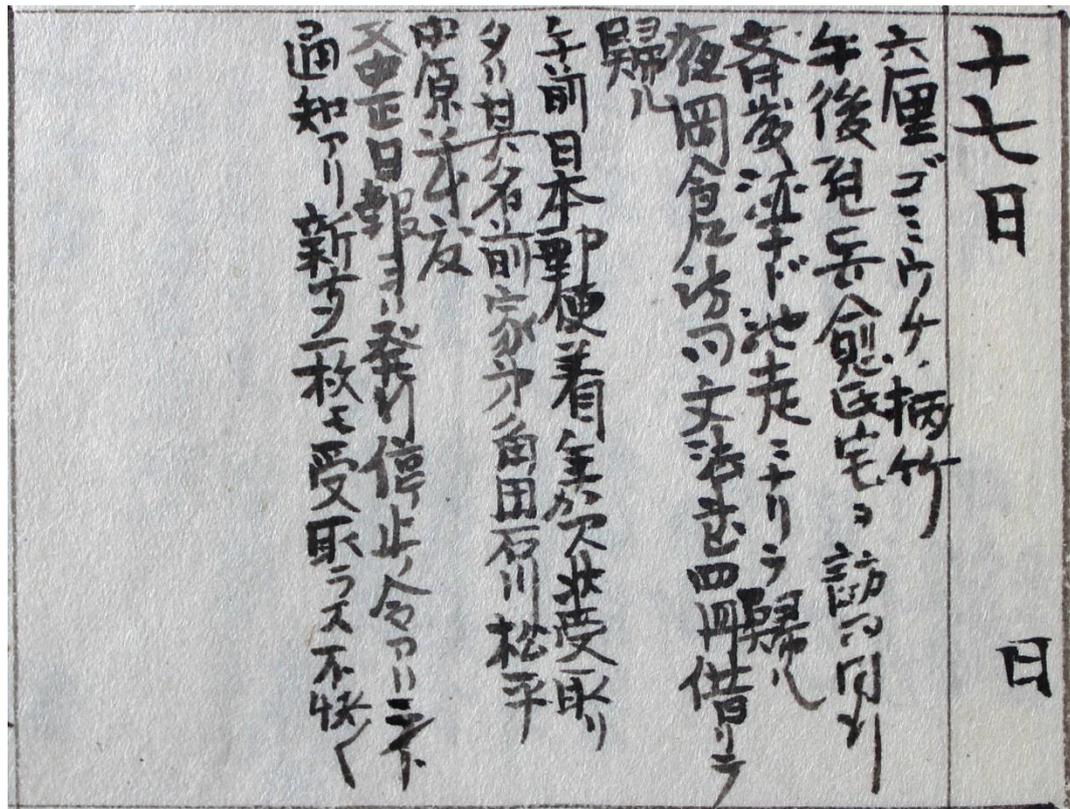
白井(2015:17)には、「11 月 23 日には(中略)岡倉由三郎には『三韓紀略』文籍彙を借りて筆写した」と記しているが、上記の「グリーンフィスの朝鮮」とは、W. E. Griffis(1882, 1<sup>st</sup> ), "Corea, The Hermit Nation" のことであり<sup>57</sup>、「文籍彙」は伊藤東涯『三韓紀略文籍彙』<sup>58</sup>のことであろう。

<sup>57</sup> ウィリアム・エリオット・グリフィス(William Elliot Griffis, 1843 年 9 月 17 日－1928 年 2 月 5 日)は、19 世紀に韓国と日本で活動したアメリカ合衆国出身の東洋学者である。

<sup>58</sup> 伊藤東涯『紹述雑抄』中の一編「三韓紀略」(「方言略」等々に分けて三韓の史実を解説したもの)書き外題の書名: 朝鮮文籍彙巻頭に「三韓紀畧 文籍彙」、表紙に「三韓紀畧ヨリ抄」と書入れあり。

また、前間の韓国教師兪炳文については末松(1957:373)において、「先輩國分象太郎の世話により、11月25日兪炳文を教師として韓国語の勉強をはじめられた。最初の教科書は「興夫伝」で、それは入京後数日、四度目の鐘路散歩のときに買い求めて置いたものであった」と書いている。

【資料12】 「玄界庵日記」 明治25年1月17日(日)の条



二七日 日

六厘ゴミウケ・柄竹

午後兪炳文氏宅ヲ訪ネ同行ノ齊藤酒ナド馳走ニナリテ歸ルノ夜岡倉訪問 文法書四冊借  
リテ歸ル

午前日本郵便着年賀状受取りノタリ其名前家弟角田石川松平ノ中原□□

又中正日報ヨリ発刊停止ノ令アリシトノ通知アリ新聞一枚モ受取ラズ不快不快

後表紙裏に墨書で「辛卯十一月念六日岡倉氏ヨリ借りテ膳書 玄界庵主」とあり。

墨書と朱墨の書き入れあり。見せ消ちによる修正あり。 印記：「岡倉文庫」（岡倉由三郎）

上記の明治 25 年 1 月 17 日の記録にある文法書四冊が果たして何であったのか興味をそそられるが、滞在時期と出版年を考え合わせれば、以下のようなものが掲げられる。

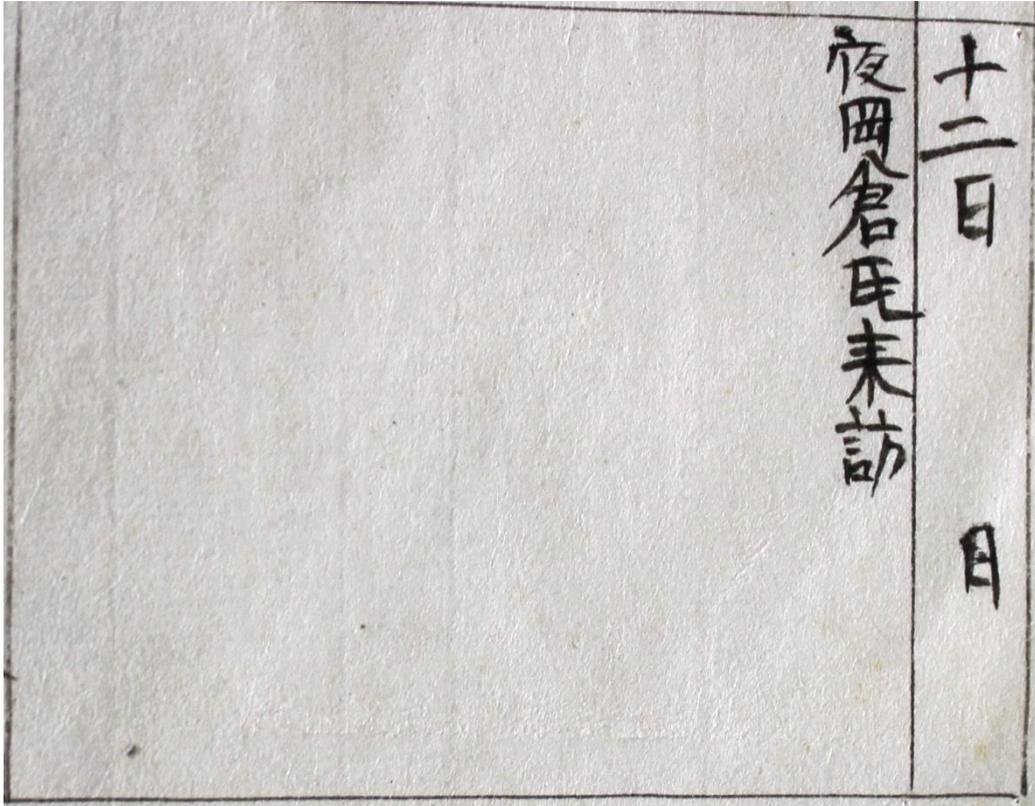
- ① John Ross(1877) *Corean primer, being lessons in Corean on all ordinary subjects, translated on the principles of the "Mandarin Primer" by the same author.*
- ② John Ross(1878) *The Corean language, "China Review", Vol. VI.*
- ③ John Ross(1882) *Korean Speech, with Grammar and Vocabulary. New Edition*
- ④ Félix-Clair Riedel(1881) *Grammaire Coréenne, par Les Missionnaires de corée de la Société des Missions étrangères de Paris, 1881 Yokohama*

上記に掲げたもののうち、③Ross(1882)(小倉 1964:77ff 参照)及びかつて若き日に恩師チェンバレン教授より手ほどきを受けた④の Riedel 師を中心とするフランス宣教師等による韓語文法書(1881)(小倉 1964:30f, 79 参照)が含まれていたであろう。

白井(2015:17-18)には「また恭作は岡倉由三郎とともに朴齊晩の朝鮮風俗に関する話を聞き、岡倉の筆によってこれも『朝鮮新報』の記事として掲載された」と記しているが、この記事は前間恭作共述(1892)「朝鮮朝野年中行事(十三回)」のことを指している。

【資料 13】のとおり、二人は 1893 年 2 月にも会っている。また、「明治 26(1893)年には、(中略)岡倉が『東洋学芸雑誌』に発表した『吏道・諺文考』の抜刷も恭作は貰っている」(白井 2015:18)と記している。『吏道・諺文考』を発行されたのは、1893 年 8 月のことであるが、その時期に岡倉は既に日本に帰っており、上記のことは、郵便でのことであると考えられ、二人の学問的交流はその後も続いていると思われる。

【資料 13】 「玄界庵日記」 明治 26 年 2 月 12 日(月)の条



十二日 日

夜岡倉氏来訪

岡倉に関する記述は上に引用したものに限られているが、明治 24 年 11 月から、25 年 1 月、そして 26 年 2 月までにわたって漢城において若き日の岡倉と前間の二人の言語教育、韓国語学・書誌学の大先輩たちが学問的交流を行っていたことが分かり深い感銘を覚える。また、岡倉の帰国後にも二人の交流が続いたとみられるだけに、今後更なる調査が求められる。

岡倉由三郎と小倉進平そして前間恭作との学問的な交流関係を考える時、岡倉先生に韓国語研究を続けていただきたかったと空しい思いに駆られるのは筆者のみであろうか。

## 第5節 岡倉由三郎の日本語教育

「日語学堂」は、1891年7月に韓国政府が漢城に設立した最初の近代外国語教育機関であり、その初代教官を務めた人物が岡倉由三郎である。

岡倉は日語学堂の初代教師として、1891年7月から2年間にわたり日本語教育に携わったが、日語学堂における日本語教育の実践について詳らかに記した資料を残していない<sup>59</sup>。そのため、当時の日語学堂の実状及び岡倉の授業の内容について、その詳細を知ることはできないが、1905年に農商務省山林局が発行した『韓国史』に「日語学校 此学校ハ千八百九十一年ノ創立ニ係リ初メハ生徒ノ数、百名ニ達セシカ」と記されており、開校時の生徒数が分かる。『韓国史』の小引には、「本書ハモト露国大蔵省ノ調査編纂セル所、(中略) 現状其他未發の當源ヲ精査セルこと頗ル明確ナルヲ覺ユ因テ之ヲ抄訳シテ殖産ニ志スルモノノ参考ニ資ス」と述べられており、信頼性の高い資料であると言える。

本章においては、岡倉が韓国から帰国した翌年発表した「朝鮮国民教育新案」(1894a)<sup>60</sup>と「外国語教授新論・附国語漢文の教授要領」(1894c)<sup>61</sup>を中心に、日語学堂における岡倉の日本語教育について考察する。

「朝鮮国民教育新案」のなかで岡倉は、当時の韓国の教育や国情について「…該国従来の教育は、唯孔孟の教を奉じ、忠孝の道を説くの一途あるのみ。他に教育あるを知らず(マ)。但し近年に至り、日本語支那語英語三語学校を順次創設せしも、実効未

---

<sup>59</sup> 『教育時論』第340号の「岡倉由三郎氏の語学教授論」には、「又此論文に於て、岡倉氏が朝鮮人に日本語を教授したる方法を、詳細に聞くを得ざりしは、甚遺憾なり。願くは氏再び之を世に公にせられんことを」(羽生田編 1894:13)と述べられており、岡倉が日語学堂における日本語教育の詳細を語っていないことがわかる。

<sup>60</sup> 岡倉は、東京府尋常中学校外国語科主任当時の1894年8月22日、東邦協会において東京府下の教育家を招いて朝鮮国民の教育新案に対する相談会が開催された際に講演をした。その講演が筆記され、校閲補修を経て出版されたものが、『東邦協会会報』第2号附録に掲載されている「朝鮮国民教育新案」(1894a)である(金沢 2007:3)。

<sup>61</sup> 岡倉は、『教育時論』第338号から340号にかけて、附録として連載された「外国語教授新論・附国語漢文の教授要領」(1894b)で外国語教育における語学教授論について説いている。

だ現はれず。而して、今は孔孟の教も徒に虚名を存し、忠孝の道も殆んど湮晦に属せり。故に一言之を約して、朝鮮には教育なし、と謂ふも、尚過酷の評に非ずと信ず」(p.2)、「教育の一部に限らず、広く該国の全体より観るも、其の国力、共に我国維新前後の比に非す。之を我国に比すれば千年位は慥かに後れ居れり」(p.5)と述べており、韓国の教育や国情について批判の姿勢を見せている。また学生の勉学に支障を来す四つの問題点を次のように挙げている。

其一忌服の事なり。(中略)父母の喪に丁れは、三年の喪を勤むとて、少くも二三ヶ月は出校せず。出校するの時に至ては、学力が殆んど入学の時に還へり。之か為め遂に廃学するに至るものあり。(後略)

其二是、雨天外出せざる事なり。(中略)隨て彼等の雨を畏るゝこと甚しく、非常特別の用事あるにあらざれば、敢て外出せず、故に雨天には休校するもの多し。(後略)

其三、科擧の事なり。科擧は前述の如く、士人立身唯一の途と考られたるを以て、其の当日に至れば、学生の已に冠禮を行ひたる者は、概ねその試場に赴く、故に当日は、他の語学校等は臨時休校を為すの有様なり。而して科擧の多き時には、一ヶ月三四回以上にも達することありたり。

其四、門地と金力の事なり。(中略)彼等の勉学せざる所以て討ねるに、その原因多々あるべしと雖も其の最も大なるものは、門地の職業を制限し、金力の官位を左右するに在り。抑も該国に於て、門地と金力を欠く時は就官すること至て難い。而して、幸に就官するを得るも、高官に登る能はず。且つ内直、即ち京城在勤の官吏と為れば、近来一切無給とせられ、地方官と為らんとせば、一定の賄賂金額を以て之を買取らざるを得ず。要するに、該国の官途は、門地と金力とのために杜塞せられ居るを以てなり。(岡倉 1894a:4-5)

このように韓国の教育上の問題を指摘した岡倉は、「朝鮮国民教育新案」で韓国における学校教育制度を提案している。彼は韓国が急務として開設すべきは中学校、実業専修学校、小学校であるとし、中学校の外国語科目として日本語を科すことを提案しているが、外国語の中で特に日本語を選ぶ理由については「一は日本語と朝鮮語と語脈同一にして相学ひ易すきか為めなり 二は朝鮮に輸入する目下適當の知識は日本語中に含有せらる、最も多きか為めなり」(p.7)、「苦し外国語を教ゆるとせば、必ず

日本、支那、英吉利の三候補者現はるゝは今より疑ふべからず、其中何れを採用せば、其目的を達すべき、其实用に適すべきか。支那語は其根本たる語脈よりして反対なり。之れを学ぶや困難にして、其益や少なし。英語は(中略)京城に一英学校<sup>62</sup>あり、創立以来茲に八年。其間卒業者僅に一人、而かも猶ほ片言交りにして完全ならず。他は皆困難に驚き、中途廃学せり。以て證すべし。採用すべきは日本語のみ」(pp.11-12)と述べている。上記から岡倉は文章構造の類似による習得の容易性と、日本語の実利的側面を強調し、日本語教育を推していることがわかる。

「外国語教授新論・附国語漢文の教授要領」(岡倉 1894c)から岡倉の外国語教授観について窺える。岡倉(1894c)では日本の外国語教授法において改正を施すべき点として「教授法の改正、教師の矯正、教科書の改正」を挙げており、「言語教育方法中『オルレンドルフ』『オットー』『コンフォート』『グアン』『モンテーヌ』の如き形式を採り之に充分日本語の特質より来る変更を加へて着々学習せしむるに於ては必ず良結果を生ずるに至る」(p.14)と述べている。また、外国語教授において「余が考へにては時間を改め増さざるも方法の如何に依り遙に立ち優りたる効果を収むるを得べしとなり」(p.20)と述べ、語学教授の最も肝心なところは、教授法であることを力説している。岡倉(1894c)は、文法教育において、弊の生ずる原因として、「文法だけを重んじすぎる」と「教師が文法について十分に理解せずに、定義を暗記させること」を挙げ、次のように説いている。

文法と云ふ科目を廃し、会話の時間に於て一方より教材を授くと共に他の一方より其中に存する法則を与へ両々相携へて相互の進歩を促さしむるにありては彼のオルレンドルフの外国語教授式の如きを本邦語の性質に由り大に斟酌を加へて実行するに於いては假令へば餌食に混ざるに菓を以てするに其苦きを知らずして其効を享くるが如く知らず識らず無味の規則を学ばしむるの益あり此種の方法の善良なるは世間既に定論あり余の如き実験上充分其利を感じたる者の一なり (p.34)

---

<sup>62</sup> 1886年設立された育英公院を指している。

また会話の教え方については次のように述べている。

初学者には、嚮に云へるオルンドルフ、又は、コンフォート教授法の如き式を似てことばの組織上似寄りたる語句文章の使用に慣れしめ生徒をして其学びたる一定のことばづかひに抛り之になづらへて自らこれと同類のことばづかひを為す事を得せしむる様努むべき (p.36)

上記の記述から、岡倉は当時の文字中心の教育を批判し、文法は会話教授の中で自然に習得する方法を提案し、その方法としてオレンドルフの教授法を推奨している。また実験よりオレンドルフの教授法の利を充分感じたと言っているが、この実験とは、韓国の「日語学堂」における日本語教授であると考えられる。

岡倉は日本語教育の実践について詳らかに記した資料も残していないため、開化期に日語学堂でどのような教材を使用し、どのような教育を行ったのか、その詳細は不明であるが、「朝鮮国民教育新案」で「余は、去る明治二十四年より、朝鮮政府に聘せられて、日本語の教師と為り、同二十六年に至るまで、該国に在て、語学の教授に従事したりき」(p.4)、「余はオレンドルフの教授法を用ひたり」(p.12)と述べていることから岡倉が日本語の教授において、オレンドルフの教授法を用いたことがわかる。

オレンドルフの教授法は、オレンドルフ(Heinrich Gottfried Ollendorff,1803-1865)が開発した文法・訳読式教授法<sup>63</sup>のひとつであるが、文法・訳読式教授法でありながらも、会話の練習に力を入れたのが特徴である。平高(1997:61)は、19世紀に入って産業革命の影響で交通機関が発達し、国や大陸の間に往来が活発化したのにもなって、実用的

---

<sup>63</sup> 平賀(2005)は、英語教育において日本では「Grammar-Translation Method(G-TM)」と文法訳読式教授法、訳読法の3つが区別されることなく用いられることに異論を唱え、この3つの定義を再考しており、オレンドルフの教授法は「文法・訳読式教授法」ではなく、「G-TM」を継承した教授法であると記している。しかし、日本語教授法においては、上記の議論はされておらず、平賀(2005:8)も「これまで英語で書かれた外国語教授法関連の文献で、日本語に翻訳されたものを見てみると、原著による Grammar-Translation Method(G-TM)には9割以上が「文法・訳読(式教授)法」という訳語があてられている」と述べているように一般的に「Grammar-Translation Method(G-TM)」と「文法・訳読式教授法」は同じ意味として用いられる。本論文の記述にあたっては、上記の3つを区別せず「文法・訳読式教授法」と記す。

な言語教育が求められるようになり、旅行会話集などが売り出されるようになったが、こうした教授法や教材市場の拡大を代表するのがオレンドルフであると記している。

岡倉は「日語学堂」における日本語教育の成果について、次のように記している。

余の担任せる日本語学校に徴するに、三ヶ月にして通弁を廃するを得たり。一年半にして日本新聞などを読むもの数人を出せり。(日本の卑近なる俗語は未だ解せざるものも多かりき)三年にして通弁、差備官等数人を出すに至れり (岡倉 1894a :12)

余の実験よりするも、朝鮮人は善く日本語を解し、大抵一年にして、普通の用を弁ずるに差支なきに至る。且や日本語は、目下朝鮮に必要な知識を包含して余りあり、又何をか疑はん。 (岡倉 1894b:24)

鈴木(1894:220-221)でも、日本語学校は「其成跡最もよく既に十数人の卒業生を出だし」と述べられている。岡倉が日本語教授に用いたオレンドルフ教授法は、文法・訳読式教授法のひとつであり、教師が学習者の母語を十分に理解していることが前提となっている。上記の成果は、岡倉の韓国語に対する深い理解と熱意および新しい教授法に対する工夫から得られた結果と考えるべきである。

## 第6節 まとめ

本章では日本語教育者ならびに韓国語研究者としての岡倉を取り上げ、開化期、日語学堂における岡倉の日本語教授法、ならびに彼の韓国語研究と日本語教育との関連性を明らかにすることを試みた。

岡倉は開化期「日語学堂」の日本語教授において、オレンドルフ教授法を用いたと記している。オレンドルフ教授法は、文法・訳読式教授法を代表する教授法であり、教師が学習者の母語を十分に理解していることが前提となっている。本稿の考察から岡倉が韓国語について幅広く研究をしており、韓国の固有文字である「諺文」に対して

高い評価を与えていたことがわかった。「日語学堂」の日本語教授において文法・訳読式教授法であるオレンドルフ教授法を用いたことは、岡倉の韓国語に対する深い理解および彼の諺文観と無関係ではないと考えられる。

岡倉はその論文で、語学教授の最も肝心なところは教授法であると唱えている。また、外国語教授において国語と外国語との比較を基礎とし、外国語教師は、外国語は勿論国語と漢文についても精通しているべきであることを主張しており、外国語教育における母語の重要性を力説している。このような岡倉の外国語教授観は、帝国大学に在学中チェンバレンから受けた影響が大きかったと考えられる。また岡倉がチェンバレンから教えてもらった韓国語の研究を深めたいということで、韓国へ赴いたと記しているように、韓国語また岡倉に韓国語を教授したチェンバレンとの出会いは、日本語教育者としての岡倉を生み出した決定的な要因であったと考えられる。

また、岡倉は小倉進平や前間恭作といった韓国学研究者との学問的な交流があり、韓国学から英語学に転向した後も交流を続けていたが、小倉宛の書簡では「唯今斯うした余蘊のない御調査の跡に接し」と述べており、岡倉は韓国語研究に心残りがあったと考えられる。

岡倉の日本語教育は、その歴史的背景から植民地教育に繋がったという評価は避けられないだろうが、岡倉は韓国における日本人による日本語教育の先駆者としての役割を十分に果たした実践的な言語学者であった。上述のような岡倉の日本語教育観ならびに韓国語研究に対する姿勢から見ても、岡倉の日本語教育を単なる政治的な道具として見てしまうと、現代において改めて考察に値する彼の日本語教育者・韓国語研究者としての考え方や業績を捉え損なうことになると思う。岡倉の日本語教育についての評価は、言語教育者としての岡倉に焦点を置くべきであろう。

## 第5章 韓国開化期の日本語学習書の概観

### 第1節 はじめに

第2節 『日語工夫』 (1891 ; 明治24)

第3節 『日語捷徑』 (1895 ; 明治28)

第4節 『日本語獨案内』 (1895 ; 明治28)

第5節 『單語連語日話朝雋』 (1895 ; 明治28)

第6節 『簡易捷徑日語獨學』 (1897 ; 明治30)

第7節 『獨修自在日語捷徑』 (1905 ; 明治38)

第8節 『日語會話』 (1908 ; 明治41)

第9節 まとめ

## 第5章 韓国開化期の日本語学習書の概観

### 第1節 はじめに

本章では、開化期に日本人により著された日本語学習書について概観し、その特徴を考察する。

語学学習書は当時の言語使用の特徴が反映されていることから、研究資料としての価値が高く、また、その前書きや内容から当時の教育の目的を窺うことができることから、教育の実態を究明する研究資料としても活用されている。

韓国開化期の日本語学習書の先行研究は、大きく日本語学習書の全体を対象としたものと、一部を取り上げて考察をした個別研究に分けることができる。開化期における日本語学習書の全体像をつかもうとする試みとしては、한중선(1994)、편무진(2001)、박성희(2005)、金義泳(2012)が挙げられる。

한중선(1994)は、14種の日本語学習書を韓日両国語学習書・文法書・会話書・一般学習書・教科書に分けて概観し、日本人のための韓国語学習書を含めて、開化期の「日本語学習書の年表」を作成している。편무진(2001)は、「開化期から植民地時代にわたって編纂された韓国人のための日語学習書の中で対訳の本文または例文を持つ文献資料」を『韓国資料』と定義した上で、「韓国資料目録」<sup>64</sup>を作っている。開化期の日本語学習書10種、植民地時代の学習書23種の計33種の日本語学習書について、「歴代韓国文法大系」の該当文献の解説を参照し、その書誌的な事項を説明しており、開化期における日本語学習書の全般を把握するため、資料の構成を中心とした書誌的概観を行っている。

一方で박성희(2005)は、開化期の日本語教育の全般的な実態を把握するためには、

---

<sup>64</sup> 편무진(2001:194)は、「この目録は山田(1998)の<朝鮮語学習書・辞書目録>に一部新しい資料と狭義の「韓国資料」を追加したものである」と記している。

学習書の資料的な特徴や体制面的な研究だけではなく内容的な検討も行うべきであると指摘し、開化期に学部によって編纂された教科書である『日語読本』(1907)と、民間人が編纂した教科書の『獨習日語正則』(1907)、『日語大成』(1910)、『改正精選日語大海』(1909)の本文内容を比較・分析しているが、その論文で「資料収集の難しさにより、日本語学習書のすべてを扱うことができなかった。また、近代教育が始まった開化初期の日本語教育の実態についての研究が不足しているため、開化期の全体的な教育のあり方を十分に把握したと言えない」と述べているように、従来の研究では、開化期の日本語学習書の全体像が把握できていない状況である。特に開化期前期の日本語学習書はすべて日本人によって発行されており、開化期における日本語学習書の全般を把握するためには、日本人により著された学習書の検討が必要であると考えられるが、その研究は、最近始まったばかりで、先行研究の数も非常に少ない。

金義泳(2012)は、1890年代の開化期から現代の第7次教育課程期までの韓国の日本語教科書を、日本観という一つの観点を持って通時的に考察したものであり、開化期韓国の民間人による日本語学習書を対象として分析をしている。同論ではその特徴を明らかにするために、日本の民間人による韓国人向けの日本語教材である『日本語獨案内』(1895)、『日語捷徑』(1895)、『獨修自在日語捷徑』(1905)と、日本側(政府)による日本語教科書である『日本読本』(1907)を比較対象としている。同論では従来の研究で取り扱われてなかった日本人による日本語学習書を取り上げているが、その資料は日本人による日本語学習書の一部であり、主な研究資料の比較対象であるため、各々の学習書についての書誌学的な考察も行なわれていなかった。

開化期日本人により著された日本語学習書についての考察は、前掲の한중선(1994)、편무진(2001)、박성희(2005)、金義泳(2012)の他に、이강민(2011)と成玗珂(2014)が挙げられる。

이강민(2011)では、『簡易捷徑日語獨學』(1897)の内容と言語資料としての性格について考察しており、成玗珂(2014)は、『日語會話』(1908)の書誌概要、出版経緯、会話用例文の内容など、当時の日本語教育環境との関わりを考慮しながら資料の位置及び役割について考察をしている。一方で、Mina Hattori(2011)では、1868年から1945年ま

での日本の植民地における日本語教育と、日本軍人に対する言語学習書について検討しているが、同論文で開化期の日本語学習書である『日語捷徑』(1895)と『単語連語日話朝雋』(1895)の序文の一部が言及されている。

以上を踏まえ本稿では、日本人による日本語学習書『日語工夫』(1891)、『日本語獨案内』(1895)、『日語捷徑』(1895)、『単語連語日話朝雋』(1895)、『簡易捷徑日語獨學』(1897)、『獨修自在日語捷徑』(1905)、『日語會話』(1908)の7種を文献学的な観点から検討する。

また、開化期に発行された学習書の目録を【付録1】に載せた。当時の言語学習書は、ひとつの言語だけではなく、互いに学びあう両言語学習書、また一冊の本で多言語の習得が可能な学習書も多数出版され、ある意味で日本語学習書ともいえるが、本稿ではそれについての考察は行なわない。

また本章で用いる『日語工夫』(1891)、『日本語獨案内』(1895)、『日語捷徑』(1895)、『簡易捷徑日語獨學』(1897)、『獨修自在日語捷徑』(1905)、『日語會話』(1908)は、現在日本国会図書館関西館で所蔵しているが、近代デジタルライブラリーによりデジタル化されて公開されていることからその現物の閲覧において「利用不可」になっている。本研究では日本国会図書館関西館の許可を得て、その実物を確認し、カラー複写本が入手できた。本論で使う資料は、日本国会図書館関西館のご厚意によるものであることを記しておく。

【表1】

	書名	出版日	著者	発行地	容量・大きさ
1	日語工夫	1891.5.20	中野許多郎	釜山	21p ; 19.3cm×12.3 cm
2	日語捷徑	1895.5.31	金澤末吉	東京	82p ; 14.6cm×11.1cm
3	日本語獨案内	1895.6.16	稲益謙吉	大阪	85p+8p ; 21.6cm×14.7cm
4	単語連語日話朝雋	1895.6	境益太郎・李鳳雲	京城	48張; 19.5cm×13.1cm
5	簡易捷徑日語獨學	1897.12.26	弓場重栄	東京	118p ; 19.7cm×13.6cm
6	獨修自在日語捷徑	1905.9.21	金島苔水・広野韓山	東京	285p ; 19cm×13.2 cm
7	日語會話	1908.6.1	島井浩	東京	197p ; 15cm×10.9 cm

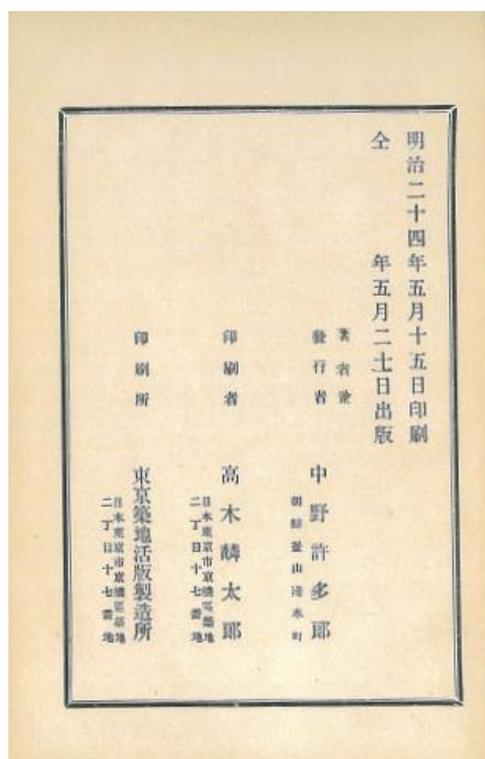
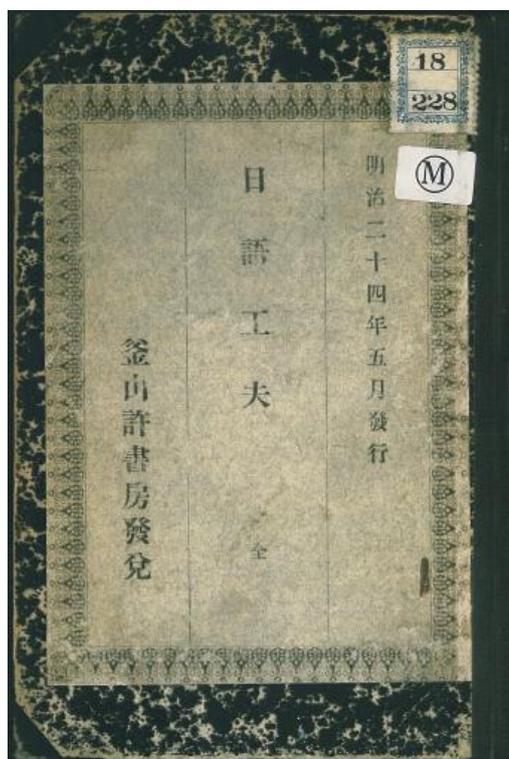
## 第2節 『日語工夫』(1891 ; 明治24)

『日語工夫』は、1891年5月21日、中野許多郎によって韓国釜山で出版された日本語学習書である。山田(2004 : 232)では、「当時の雑誌・書籍等の広告欄等には、学習書と思われる文献が示されている。これらの文献については筆者が直接調査していないので学習書の定義にあてはまるかどうか判断ができないため、参考文献として別に提示した」と述べ、中野許太郎著の『商語捷徑』(1890)と『仮名行商手引』(1891)を挙げているが、所蔵場所が明らかになっていないため、筆者もまだ実物を見ていない。従って、現在実物が確認できる資料の中では、この『日語工夫』が最も早い時期の日本語学習書であると言える。

しかし『日語工夫』は、日本国会図書館の近代デジタルライブラリーによりデジタル化されて公開されており、한중선(2007)の日本語教材目録でもあげられていたものの、現在までその考察は行なわれていない状況である。

『日語工夫』は、表紙と総21ページの本文及び、奥付からなっており、その大きさは「19.3cm×12.3cm」である。以下の【資料 14】は、その表紙と奥付である。

【資料14】『日語工夫』(1891) 表紙／奥付 (日本国会図書館所蔵)



〈表紙〉

明治二十四年五月發行

日語工夫

釜山許書房發兌

〈奥付〉

明治二十四年五月十五日 印刷

全 年五月二十一日出版

著者兼發行者 中野許多郎

朝鮮釜山港本町

印刷者 高木麟太郎

日本東京市京橋區築地

二丁目十七番地

印刷所 東京築地活版製造所

日本東京市京橋區築地

二丁目十七番地

## 2.1 著者

『日語工夫』の著者である中野許多郎の生没年に関する記録は見つかっていないが、彼の通詞としての活躍に関する記録は少なくない。その記録の中では、中野許多郎の名前が中野許太郎として書かれてものも多くあり、その中で最も早い時期の記録は、『高宗時代史』1集の1870(明治3)年5月4日付のものである。

高宗 7 年 5 月 4 日(己巳) 日本駐劄北獨逸聯邦代理公使「브란트」(Brandt, Max von)、日本外務少丞馬渡俊邁・對馬島通事 中野許太郎等과 함께 軍艦「헤르다」號에 塔乘、釜山倭館前洋에 來泊하다。(中略) 그 中의 中野라고 하는 者는 일찍이 倭館에 居住하던 者로 洋船을 勾引、來泊한 것은 그 情이 매우 痛惋할뿐 아니라 日後에도 이와 같은 일이 없으리라고 할 수 없으므로 그 顛末을 書啓로써 對馬島에 轉送하여 嚴辭詰責케하고 (下略)

### 【和訳】

(西曆)1870年6月2日、日本駐在のドイツ連邦の代理公使の「ブランド」(Brandt, Max von)、日本の外務少丞の馬渡俊邁・對馬通事の中野許太郎などと共に軍艦「ヘルダ」号に搭乗、釜山倭館の前洋に來泊する。(中略)その中の中野という者は、かつて倭館に住んでいた者で、洋船を勾引、來泊したことはその実状が非常に悲しいことであり、後もこのようなことがないと言い切れないため、その顛末を書啓として對馬に轉送し嚴辭詰責するようにし、(下略)

この記事から中野が對馬藩の通事であったことが明らかである。また、このドイツの軍艦が來泊し、對馬通事の中野が搭乗していた事件が、中野許多郎の諸資料に登場する最初となるようである。以前異船(西洋の軍艦)が江華島に侵入して、徳山にある先廟を破壊して靈骨を持ち去った事件(江華島事件)以来、異船を敵船と見做していたため、それに中野が搭乗していたことで、東萊側は中野を好ましくない人と見ていたと考えられる。

また、黒田清隆特命全權弁理大臣が江華島事件の処理のために、訪韓する際に随行員として随行したという『朝鮮事務書』の記事があり、更に以下の『日東記游』<sup>65</sup>の

---

<sup>65</sup> 『日東記游』は、1876(明治9)年修信使として日本に派遣された金綺秀の見聞録であり、1877年で発行

記録から、彼が1876年の韓国から派遣された修信使の通訳を努めたことがわかる。

中野許多郎、位亞於荒川、亦書記生、年近四十、體短少詳謹從頌、迎余釜山、送余釜山、始終無少失（巻二）

第三條、外務六等書記生荒川徳滋同中野許多郎及生徒十一名、負荷通譯及延接事務（巻三）

前掲の奥付には「著者兼発行者 中野許多郎 朝鮮釜山港本町」と記されていたが、上記の記録から当時、中野が釜山に設置された日本領事館で外務六等書記生として勤務していたことも窺える。

## 2.2 構成及び表記

『日語工夫』には、前書き及び目次は記されていないため、ここでは、その構成を簡略にまとめ、発行の背景について考える。

『日語工夫』は総21ページからなっており、目次は記されていないが構成からみて、大きく「文字部」、「単語部」、「会話部」に分けることができる。最初の2ページに、文字が記されており、片仮名五十音と合略仮名「ㄱ」・「ㄷ」・「ㅂ」・「ㅅ」・「ㅇ」が書かれている。濁音・半濁音が記されておらず、合略仮名が提示されている点は、開化期の他学習書と区別される特徴である。以下の【資料15】は、『日語工夫』の文字部である。

---

されたとされている。



行 간다 유구      가자 유고우      갔다 유이다      가거라 유계  
 学 비은다 마나부      비우자 마나보오      비왔다 마난다      비와라 마나피요

(p.8)

キマシヨウ      キマスニヨリ      キマスカ      キマスル  
 오리다 기마쇼      오 니 기마스니요리      오갯소 기마스가      오옵네 기마스루

ヲ イ デ      コ イ      ク ル ナ      コ ヌ  
 오쇼셔 오이데      오느라 고이      오디말라 구르나      아니온다 고느

キマセヌ      コラレヌ      コヌカラ  
 아니오갯다 기마세느      오지못혼다 고라레느      못오니 고느가라

動詞語尾変化の後の8ページから最後の21ページまでは「会話部」に該当するが、11  
 9句の文型が「韓国語(日本語読みのカナルビつき)－日本語のハングル表記」「例：  
 ノチアイマシヨウ  
 나중만나보자－노지아이마쇼 (和訳：後で会いましょう) p.10」で書かれており、日本  
 語の文字が読めなくても、学習ができるように配慮したことが窺える。

また、『日語工夫』の会話部は、平易簡略の短文及び句からなっており、以下のよ  
 うに複文の場合は、あえて分けて提示しているが、日本語教師も日本語教育機関も存  
 在していなかった当時の状況を考えると、このように簡単な形式でないと、初級レベ  
 ルの韓国人が独学することは難しかったと考えられる。

(pp.13-14)

【和訳】

ハルハ    アタ、カニシテ 봄은 온화하고    하르와아다다가니시데	春は暖かにして
ナツハ    アツク 넘롬은 덩아    나즈와아즈구	夏は暑く
アキハ    스미시ク 마올은 서늘히여    아기와스즈시구	秋は涼しく
フユハ   サムウアリマス 겨울은 집스외    후유와사무우아리마스	冬は寒うあります

『日語工夫』は、総21ページという非常に短い書ではあるが、「文字・単語・会話」

という当時の他学習書の構成と同じ形式をとっており、学習書としての形が備わっていたといえる。

### 2.3 発行背景及び目的

釜山は1876年日朝修好条規によって開港され、日本人の商業活動が認められていた所であり、1891年の日本人居住者は5,254人にも達している<sup>66</sup>。また当時の日本政府は、釜山への渡航と貿易を奨励していたようであるが、このような背景から『日語工夫』が発行されたのである。『日語工夫』には前書きがないため、その発行背景や目的については不明の部分が多いが、当時の釜山の状況と前述の本文内容から見ると、日本人と韓国人の商業活動において便宜を図るための実用的な目的で発行されたと考えられる。

### 第3節 『日語捷徑』(1895 ; 明治28)

『日語捷徑』は、1895年5月31日東京の丸善出版社で金澤末吉により発行された。本書については Mina Hattori(2011)で前書きの一部が挙げられており、金義泳(2012)では、会話の内容を分析しているが、その書誌的情報についての考察は行なわれていない。

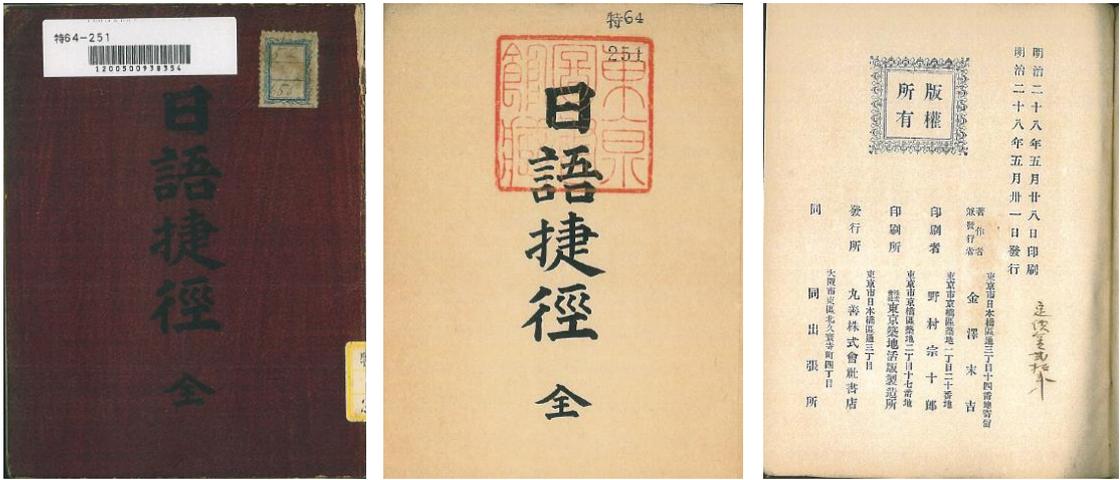
本章では『日語捷徑』の書誌的情報を中心にまとめておく。

『日語捷徑』は、表紙、裏表紙と4ページの前書き及び82ページの本文と奥付からなっており、大きさは「14.6cm×11.1cm」である。以下の【資料16】は、その表紙と中表紙、奥付である。

---

<sup>66</sup> 김대래(2009)「移住와 支配:개항이후 부산거주 일본인에 관한 연구(1876-1910)」 pp.145~147

【資料16】『日語捷徑』(1895) 表紙／中表紙／奥付 (日本国会図書館所蔵)



<表紙>

日語捷徑 全

<中表紙>

日語捷徑 全

<奥付>

明治二十八年五月廿八日印刷

明治二十八年五月卅一日發行

(定價金式拾錢)

著者兼發行者	東京市日本橋區通三丁目十四番地奇留 金澤末吉
印刷者	東京市京橋區築地一丁目二十番地 野村宗十郎
印刷所	東京市京橋區築地二丁目十七番地 株式会社東京築地活版製造所
印刷所	東京市日本橋區通三丁目 丸善株式会社書店
同	大阪市東區北久宝寺町四丁目 同出張所

### 3.1 著者

著者の金澤末吉については、1980年に発刊された『丸善百年史』に、「金澤末吉は、慶応一月十一日岐阜県恵那郡岩村に金澤林平の四男として生れ、(中略)二十一年五月唐物店の横浜出張所に転じ、この間朝鮮へ出張、唐物の販売に従事したが、三十年一月丸善大阪出版所に転勤、(中略)大正十二年三月十五日第六代社長に選ばれた」(pp.1014-1015)と書かれており、『朝鮮銀行會社組合要録』1937年版、1939年版、1941年版、1942年版に金澤が「丸善」の社長を務めていたことが分かる。これらの記録から金澤末吉が韓国で商業活動を行っていたことが分かり、この時に韓国語を学んだと考えられるが、『丸善百年史』と『朝鮮銀行會社組合要録』の他に資料が見つからないため、彼の韓国・韓国語との関わりの詳細についてはまだ確認できていない。

### 3.2 構成及び表記

『日語捷徑』は4ページの前書きと82ページの本文から成っており、目次は記されていないが、前半部は「文字部」・「単語部」・「会話部」の三つに分けられ、後半部は、単語と会話が折衷形式で記されている。

1～6ページまでは「日本仮名」、7～25ページまでは「助数詞・時間副詞」、「助詞」、「日本貨称法・朝鮮貨称法」が書かれており、25ページから最後の58ページまでは「物貨売買」・「相逢人事」・「雑事問答」についての会話文から成っており、58ページ以降は「日用物名(単語)」、「常食物名(単語+会話文)」、「官位(単語)」、「日本地名(地名+会話文)」、「雑話(会話文)」、「朝鮮地名(地名+会話文)」が書かれている。

対訳表記は大きく単語と会話文に分かれ、単語表記においてはいくつか揺れが見られるが<sup>67</sup>、主に「日本語-日本語読みのハングル表記」(例：冬-하동、朝-아사 p.11)

---

<sup>67</sup> 「日本語読みのハングル表記-韓国語」(例：日-오늘 p.12)、「ルビつき日本語-韓国語」(例：一ツ<sup>ヒト</sup>-하나 p.7)、「日本語カタカナ-韓国語」(例：サカナ-물고기 p.59)、「ルビつき日本語-対訳無し」(例：湯<sup>ユ</sup>-対訳無し p.59)などの揺れが見られる。

になっており、会話文は「日本語文(漢字にカナルビ)-韓国語文」(例：安ク買イマシタ  
－싸게샅소 p.32)と書かれている。他の日本語学習書には日本語読みがハングル表記に  
なっているのに対して、『日語捷徑』は日本仮名の習得が前提になっており、またあ  
る程度の漢字力も必要とされていたと考えられる。

また、本書の会話部は、問答形式の場面シラバス(例：コノ紙ハ、一枚、イクラデス  
カ 이종이는, 한장에, 얼마요 / 二十文ヅハデス 두돈식이요 p.26)と文型練習の構造シ  
ラバス(例：イクツ、有リマスカ 멧개 잇소 / 三ツアリマス 셋 잇습니다 / ソノ、中ニ  
アリマス 그 속예잇습니다 / ソノ、上ニアリ마스 그 우에잇소 / 其下ニアリ마스  
그밑테잇습니다 / 其本ノ下ニアリ마스 그척(의)밧테잇습니다 / 其机ノ上ニアリ마스  
그척상우에잇소 pp.44-45)の折衷形式を採用しており、会話の練習にも工夫をしている。

### 3.3 発行背景及び目的

本書には前書きとして「紫山生」<sup>68</sup>という人物が書いた推薦文と、「編者識」即ち  
著者の金澤の序文が書かれている。

文祉益御清健奉恭賀候陳者御著述ノ日語捷徑一讀仕候今ヤ朝鮮ハ一大革命ノ機ニ際シ上ハ  
政治法律經濟ヨリ下ハ文學社交衣食住ニ至ルマテ一變セサルヲ得サル氣運ト相成候此時ニ  
於テ朝鮮ノ文明ヲ啓導スルモノ韓人ヲシテ日本語ヲ解セシムルヨリ先キナルハ無之ト存候  
兄朝鮮ニ在リテ韓語ヲ學ブコト數年此書ノ如キ其餘緒ニ成ルモノニ過キ不申候ヘトモ韓人  
ノ智識ヲ開クノ初步ト爲ルコトハ不可疑ト存候時下春寒未除幸爲國自愛

於京城南學 紫山生

今日ノ朝鮮ハ革新ノ氣運ニ際セリ此時ニ當リ朝鮮人ニシテ日本語ヲ學ブノ必要アルハ日本  
人ノ韓語ニ於ケル比ニ非ザルベシ生近日感アリー小冊ヲ編ミ名ケテ日語捷徑ト曰フ蓋シ韓

<sup>68</sup> 紫山生がどのような人物であったかは知られていないが、1932年4月23日から4回にかけて釜山日報に  
「新滿洲國建築後の實情」を連載している。

人ノ日本語ヲ學ハントスル者ニ資セント欲スルノミ然ルニ塵事急忙添削ノ暇ナク直ニ印刷  
ニ附セシヲ以テ其順序當ヲ得サル所アルモ未タ知ルベカラズ大方ノ君子幸ニ之ヲ諒セヨ

編者識

上記の推薦文では、「朝鮮ハ一大革命ノ機ニ際シ(中略)此時ニ於テ朝鮮ノ文明ヲ啓導  
スルモノ韓人ヲシテ日本語ヲ解セシムルヨリ先ナルハ無之ト存候」、序文では「今日  
ノ朝鮮ハ革新ノ氣運ニ際セリ此時ニ當リ朝鮮人ニシテ日本語ヲ學ブノ必要アルハ日本  
人ノ韓語ニ於ケル比ニ非ザルベシ生近日感アリ」と書いており、激変する時代の中、  
日本語を通じた文明開化を提唱していたことが窺える。

また著者の金澤も韓国で商業活動を行った人物であり、本書では、単語編で「日本  
貨称法・朝鮮貨称法」、会話編では「物貨売買」という項目を設け、商業活動に役に立  
つ日本語学習に重点をおいていることが確認できる。

以上から、『日語捷徑』の発行目的は実用的な目的を持ちつつ、日本語を通じて開  
化を遂げることであったと考えられる。

#### 第4節 『日本語獨案内』(1895 ; 明治28)

『日本語獨案内』は、1895年6月16日に京城で稲益謙吉により発行された日本語学習  
書である。本書については金義泳(2012)が会話の内容を分析しているが、その他に  
『日本語獨案内』及び著者の稲益謙吉について言及している先行研究は見当たらない。

『日本語獨案内』は、表紙、裏表紙と85ページの本文と8ページの附録及び、奥付か  
らなっており、大きさは「21.6cm×14.7cm」である。以下の【資料17】は、その表紙と  
裏表紙及び奥付である。

【資料17】『日本語獨案内』(1895) 表紙／中表紙／奥付 (日本国会図書館所蔵)



〈表紙〉

日本語獨案内 全

〈中表紙〉

在朝鮮京城 稲益謙吉 編纂

일본말을공부하는책이라

日本語獨案内 全

大日本大阪 大阪活版製造所印行

〈奥付〉

明治廿八年六月六日印刷

全 年六月十六日發行

(定價金拾錢)

朝鮮國京城泥峴第廿九号地

稲 益 謙 吉

日本國大阪市東區北久宝寺町

二丁目 大阪活版製造所

谷 口 默 次

著者兼編纂者

印刷者

#### 4.1 著者

著者の稲益謙吉については、「旧韓末民事判決文」に次のような記録があるので、仁川にて米穀商を営んでいたらしい。

1906(明治39)年10月31日 委託販賣金請求事件 闕席判決原本

原告 稲益謙吉 仁川港京城中通旭一九八号

1907(明治40)年5月13日 賣掛代金請求事件 認諾判決

原告 稲益謙吉 仁川港京城中通米穀商

1910(明治43)年5月25日 賣掛代金請求事件 闕席判決

原告 稲益謙吉 仁川港新町二丁目拾番地白米商

前掲の『日本語獨案内』の表紙には、「在朝鮮京城 稲益謙吉編纂」と記され、奥付にも「朝鮮國京城泥岨第廿九号地」と書かれており、『日本語獨案内』が発行されていた時期に彼が韓国にいたことが窺える。また、上記の記録から、1906年から1910年まで韓国で商業に努めていたことが分かる。

#### 4.2 構成及び表記

『日本語獨案内』は、85ページの本文に8ページの附録が付いているが、第一編から第八編までは、各項目別に単語が提示された後に会話文が書かれており、第九編と第十編は、会話文のみから成っている。本文の内容は身辺雑記に関わるものが主となっており、附録には「第一 名詞 格の變化 私」、「第二 動詞 時の變化」、「第三 積極及び消極動詞の變化」、「第四 助動詞及接續詞之例解」と「日韓兩國通貨」が記されている。

本文の韓日対訳は、「日本語(ハングル表記で日本語読みのルビつき)－韓国語」

「例：사여나라－평안히가시요 (和訳：さよなら) p.79」で書かれているが、単語の一

部では、「<sup>イモ</sup>어-토란 p.67」のように韓国語に漢字のルビがついているところもある。

### 4.3 発行背景及び目的

本書には、以下のように著者の稲益の緒言が記されている。

緒言

去歲自征清役起以來東亞之局面正一變矣就中余觀我國語能熾干鷄林之野而交通及貿易上喜有所勢之推移也際此秋不暇念卑才謏劣鄙意切欲圖助長粗齒之罪元所甘受雖然一言以有可謝江湖事凡諺文者不能整明寫日語之音本冊中及窮亦採所其相類似音多矣

於朝鮮京城 明治廿八年五月某日 稻益謙吉

上記からは日清戦争で日本が勝利した社会的背景が窺え、編纂目的として「交通及貿易」という実用的な側面を重視したことがわかる。また『日本語獨案内』は、前掲の学習書と同様に助数詞及び通貨が強調されており、その編纂目的の裏付けになっている。

### 第5節 『単語連語日話朝雋』(1895 ; 明治28)

『単語連語日話朝雋』は、1895年6月に日本人の境益太郎と韓国人の李鳳雲によって京城で発刊された日本語学習書である。

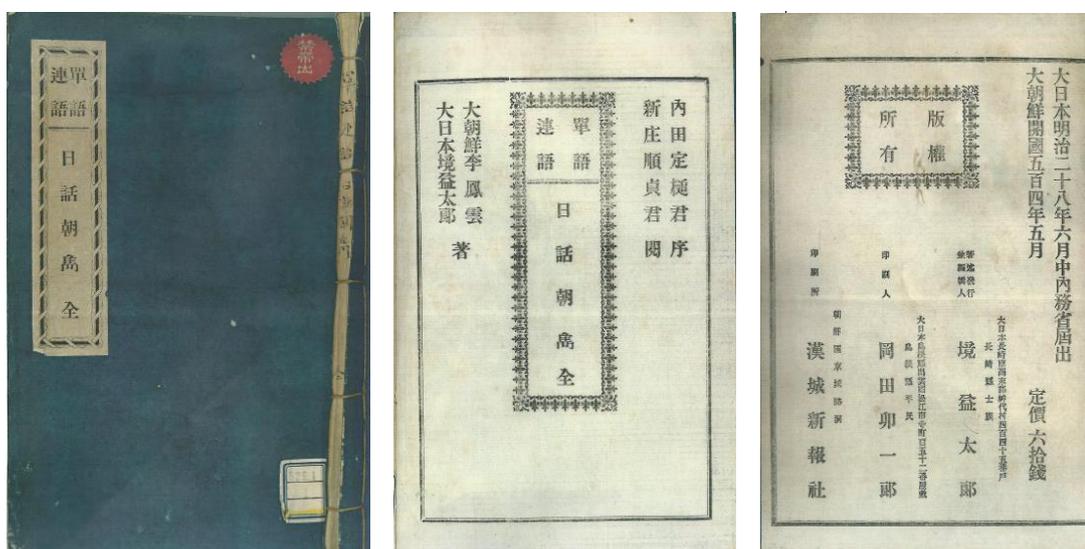
本書は金敏洙・河東鎬・高永根編の『歴代韓国文法大系』(1986)に掲載されていることから、韓国の研究者によって多く研究されている。『歴代韓国文法大系』は、『単語連語日話朝雋』の序文に「日本語を学ぶ朝鮮人の為めの著述せられたるものは蓋し日話朝雋を以て嚆矢とす(内田定槌)」と書かれていることをあげ、『単語連語日話朝雋』を韓国における最初の日本語学習書としている。当時内田は、『単語連語日話朝雋』以前に発行された『日語工夫』(1891)、『日語捷徑』(1895)、『日本語獨案内』

(1895)の存在を知らなかったようであり、これらの学習書が広く活用されなかったとも考えられる。

『単語連語日話朝雋』は、内田定槌の序文(韓国語訳付き)と著者の緒言及び凡例の前書き、「日本諺文」と「目次」、48張の本文から成っており、大きさは「19.5cm×13.1cm」である。以下の【資料18】はその表紙、中表紙と奥付である。

【資料18】『単語連語日話朝雋』(1895) 表紙／中表紙／奥付

(日本奈良県立図書情報館所蔵)



〈表紙〉

単語連語日話朝雋全

〈中表紙〉

内田定槌君 序 新庄順貞君 閱

単語連語日話朝雋全

大朝鮮李鳳雲 大日本境益太郎 著

〈奥付〉

大日本明治二十八年六月中内務省届出

大朝鮮開國五百四年五月 定價 六拾錢

大日本長崎南高来郡神代村四百四十五番戸  
長崎縣士族  
著述發行兼編輯人 境益太郎

大日本島根縣出雲國松江市寺町百五十二番屋敷  
島根縣平民  
印刷人 岡田卯一郎

朝鮮國京城駱洞  
印刷所 漢城新報社

## 5.1 著者

韓国開化期の日本語学習書は、著者によってその構成が異なっており、韓国人によって書かれた学習書は、文法項目によって構成されており、日本人によって著されたものは、内容の分類によって構成されている特徴が見られる。『単語連語日話朝雋』は内容の分類によって部立てられており、その構成的な面で日本人発行の学習書の特徴を見せている。

本稿は開化期に日本人によって発行された日本語学習書を対象としているが、日本人と韓国人の共著である『単語連語日話朝雋』も研究範囲に入れることとする。

『単語連語日話朝雋』の著者については、『歴代韓国文法大系』(1986)の解説に、「著者李鳳雲は『国文正理』で多く知られているが、高宗代の倭語訳官であろうと推測されるだけで、それ以上は知られていない。もう一人の著者である日人境益太郎についても日本長崎の土族ということ以外は分かりかねる」と書かれている。

上記のように李鳳雲は、1897年に発行された近代文法研究書『国文正理』を著した人物であり、『国文正理』については先行研究が行われている。しかし、彼の履歴などについては、まだ明らかにされていない。

境益太郎については「外務省外交史料館」と「国史編纂委員会の韓国史データベース」に以下のような記録がある。

閔妃殺人事件の予審決定書(上) 1895(明治28)年9月

長崎市南高来郡神代村居住士族境勘作長男外務省巡查 境益太郎(明治元年九月生)

駐韓日本公使館記録 暴徒状況偵察件1896(明治29)年9月24日

去ル十八日當館附巡查境益太郎外二名ヲ不取敢高原郡迄派遣シ翌十九日歸館候同巡查等復命スル所ニ據レハ當元山ヨリ高原ニ至ル沿道各部落ハ至テ靜穩ニ有

駐韓日本公使館記録 韓国居留本邦人戸口月表 1899(明治32)年5月

作成者 在朝鮮国釜山日本警察署 警部境益太郎

駐韓日本公使館記録 韓国居留本邦人戸口月表 1900(明治33)年1月

作成者 在韓国馬山分館附警部 境益太郎

駐韓日本公使館記録 朝鮮ニ於ケル外國人殺傷關係雜件 1905(明治38)年

韓國新川津村ニ於テ境警部等遭難一件 馬山北方3里半 境益太郎 火賊ニヨリ負傷

以上の記述から、境益太郎は、1867年9月に長崎で生まれた人物で、韓国の元山や馬山などで日本公使館所属の警察として勤務をしていたことがわかる。境益太郎と李鳳雲の接点はまだ確認できていないが、今後の調査が求められる。

## 5.2 構成及び表記

本書の本文は総48張であり、27張の単語編と21張の連語編に分けられている。

単語編は内容によって部立てられており、連語編は「初歩部」、「天文部」、「地理部」、「人事部」、「軍整部」、「政事部」、「形容事部」からなっている。

韓日対訳は、単語編では「漢字－韓国語－日本語のハングル表記」(例：星－별－호시 2張裏)で、連語編では「韓国語－日本語のハングル表記」(例：평안이가시오－사요나라 32張裏)の形式で表記されている。

### 5.3 発行背景及び目的

『単語連語日話朝雋』には、内田定槌<sup>69</sup>の「日話朝雋之序」と著者の「緒言」が以下のように載せられている。

#### 日話朝雋之序

客歳<sup>70</sup>以来日韓両国の関係俄然として一変し益々親密を加ふるに従ひ日本人にして韓語を学ぶ者頗る増加したると共に朝鮮人も亦上下先を競ふて日本語を修学するに至れり然に韓語を学ぶ日本人の為の著述せられたるものは世間其書に乏からずと雖も日本語を学ぶ朝鮮人の為めの著述せられたるものは蓋し日話朝雋を以て嚆矢とす思ふに当国人にして日本語を修めんとする者は此の書出版により裨益する所少からざる可し

明治二十八年四月十四日

在京城領事館に於て 内田定槌撰

#### 緒言

方今朝鮮國에 小學校를 設立호야 譯學호 디 士農工商에 人民은 生業에 골몰호야 學校에 語學호 數업고 童蒙만호기로 此編을 開錄호야 朝鮮八道各邑男女老少가 皆此編을 見習호면 日朝兩國語를 庶幾相通호야 利國勤化가 断断為호리니 類集開刊호야 著호오

在朝鮮京城 著者職

#### 【和訳】

方今朝鮮に小学校を成立し訳学教育を行うが、士農工商に人民は生業に精を出し、学校に語学することができず、また童蒙のみになっているので、この編を書きしるし、朝鮮八道各邑の男女老少が皆この編を見習えば、日朝両国語が庶幾相通じ、利国勤化が段々成立つと思うので、類集開刊して著す。

在朝鮮京城 著者職

<sup>69</sup> 1894年12月14日の『旧韓国外交文書』には、内田定槌が京城領事館の二等領事から一等領事に昇任したことが記されている。

<sup>70</sup> 昨年という意味である。本書が著された時期は1895年であり、1894年に日韓両国関係が一変したとしているが、1894年には、甲午改革と日清戦争が始まった年である。

本書の推薦文では、日韓両国の関係が親密さを増すに従い、韓国語を勉強する日本人が増え、韓国人も日本語を学ぶようになったという日本語教育の背景が書かれている。また、著者の緒言には、学校教育を受けることのできない人々のため著したと記されており、本書は、学校で使われる教科書ではなく、民間人の独学のために著されていたことがわかる。

## 第6節 『簡易捷徑日語獨學』(1897；明治30)

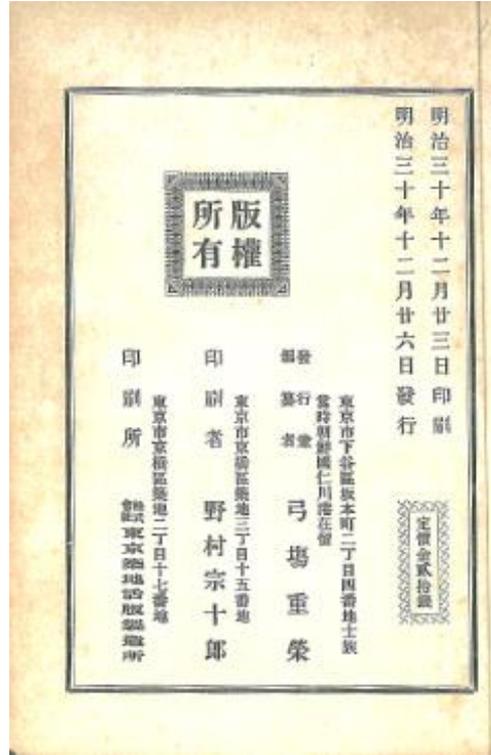
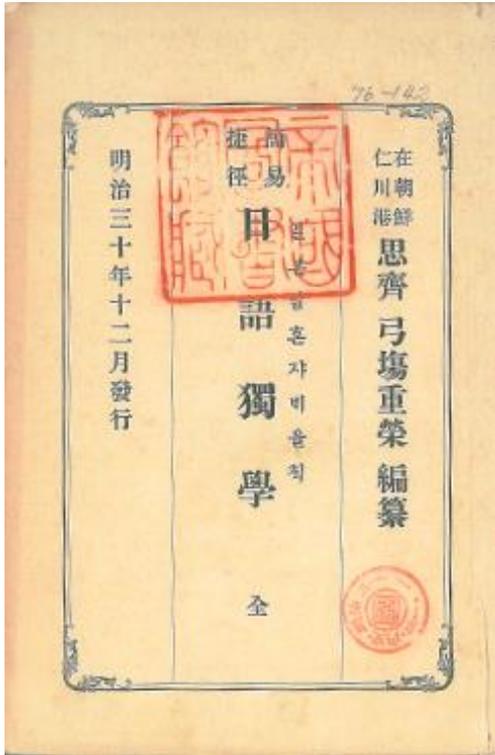
『簡易捷徑日語獨學』は、1897年12月26日に弓場重栄が東京で発行した学習書である。本書について이강민(2011)では、開化期韓国でもっとも早い時期に使用された日本語学習書という点と、春園李光洙<sup>71</sup>も使用したという点をあげ、『簡易捷徑日語獨學』の内容と言語資料としての性格について考察している。本論では이강민(2011)を参考しつつ、『簡易捷徑日語獨學』の書誌的情報を概観する。

『簡易捷徑日語獨學』は、4ページの前書きと「目次」、そして108ページの本文から成っており、大きさは「19.7cm×13.6cm」である。以下の【資料19】はその中表紙と奥付である。

---

<sup>71</sup> 李光洙(イ・グァンス、1892年3月5日－1950年10月25日)は朝鮮の文学者、思想家である。「朝鮮近代文学の祖」とも言われる。号は「春園」で、創氏改名時の日本名は香山光郎である。

【資料19】『簡易捷徑日語獨學』(1897) 中表紙／奥付 (日本国会図書館所蔵)



<中表紙>

在朝鮮仁川港 弓場重榮 編纂

일본말을혼자비을척이라  
簡易捷徑日語獨學 全

明治三十年十二月發行

<奥付>

明治三十年十二月廿三日印刷

明治三十年十二月廿六日發行

定價金貳拾錢

東京市下谷區坂本町二丁目四番地土族  
當時朝鮮國仁川港在留  
發行兼編纂者 弓場重榮

東京市京橋區築地三丁目十五番地  
印刷者 野村宗十郎

また、本書の最後には、「朝鮮各地販売所」を記している。

## 6.1 著者

1873年4月1日に東京下谷区御徒町三の三で生まれた弓場は<sup>72</sup>、1887年渡韓、第一銀行釜山支店に在勤、その間釜山語学所速成科で韓国語を学び、のち新設の京城銀行の支配人になる<sup>73</sup>。また、弓場は、『簡易捷徑日語獨學』(1897)の他にも『実地応用朝鮮語獨学書』(1896)、『ポケット朝鮮語獨学』(1915)の韓国語学習書を著している。

## 6.2 構成及び表記

『簡易捷徑日語獨學』は、「第一編基數及數稱」、「第二編單語」、「第三編會話附錄動詞變化一覽」から成っている。第一編では、「貨幣、尺度、斗量、權衡年稱、月稱、日稱、時稱、里程稱」が記されており、第二編では内容別に分類された單語が収録されている。

本書の表記は、「漢字－日本語のハングル表記－韓国語」(例：星－호시－별)で記されており、第三編の會話では、「日本語のハングル表記(カナルビつき)－韓国語」

ゴキゲンヨク  
「例：코기켄요구、유가레마시－평안히、가시요 (和訳：御機嫌よく) p.65」の形式になっている。

## 6.3 発行背景及び目的

『簡易捷徑日語獨學』の緒言には、「今呼朝鮮이시로二商港을、開發호여漸々日韓의通商貿易을、擴張히는지라、此時를當호여日韓兩國之人이、各々其語學을工夫히려、호는者가多矣라 (和訳：今朝鮮で、新しく二商港を開発し漸々日韓の通商貿易を擴張

<sup>72</sup> 川端(1913)『朝鮮在住内地人実業家人名辞典:第一編』p.227

<sup>73</sup> 櫻井(1974)「日本人の朝鮮語学研究」p.119

するので、この時期に当たって日韓両国の人が各々その語学を勉強しようとする者が多い」と学習書の発行当時の背景が書かれており、「通商貿易」における日本語の必要性により学習書が発行されたことがわかる。以下、同書の「序」と「緒言」を記しておく。

#### 序

夫方言隨其山川而各異國文隨其音響而亦殊其豈易言哉今於天下交際之時互相易教不可須臾廢者也教人不倦既有古訓學而時習不亦悅乎弓場氏生於此時以其交際之方自爲己任勤勤孜孜著成兩編其一韓語獨學其二日語獨學者也其語明晰交纂諺解與伊呂波其用緊要最合談辯及通商務在易覺懸知專心致志使之速成爰見不日有效使讀者毋至鴻鵠將至其所成就可立而待也夫

大朝鮮光武元年十月二十二日 清州 郭 明鉉 號小圃書

#### 緒言

夫國各有方言國各有國文其意則一也其音則不同讀文者難免面墻聽語者無非耳聲噫毋論才與不才若專心致志則譯文傳語不過幾年可使通達奈之何日韓交際以至久而公私談辯旨意不暢遠近通商物情未數此無異七年之病求三年之艾也豈非慨歎處乎大抵交際之務莫先乎通語通語之要莫切乎學文故前著韓語獨學一編此書使日人學韓底大槩也迺者韓訪新開二港商務之駢劇倍於前日當此時交際之方可使人人不得辭責也不思淺見薄識復克成編名曰日語獨學而豈敢望開牖來者但讀此者熟讀詳味其於交際之地庶幾有萬一之補焉

丁酉年十月 於朝鮮國仁川 大日本東京 思齊 弓場重榮 識

今呼朝鮮이、식로二商港을、開發호여、漸々日韓의通商貿易을、擴張히는지라、此時를當호여、日韓兩國之人이、各々其語學을工夫히려、호는者가多矣라

予가已往에、日人을爲호여、韓語獨學書를、編纂호엿스니、即今朝鮮人士를爲호여、淺學을不顧호고、日語獨學書를、編成호엿스니、韓人의日語를、빅오려호는人을、더불고、其楷梯를、호려호오니、萬一讀者에裨益호는바잇스면幸甚矣로소이다

日韓이音異호니、朝鮮諺文을가지고、日語之音을、明白이、쓸슈업는고로、本冊은依호여、其中相似호는音을、撰擇호야、編註호엿스나、然이나此書는、忽忽之間에、板刻호야셔、誤謬洩說漏가、多호싯호오니、그거슨他日閑暇를期於코、訂正호오려호오니、讀者는專

【和訳】

今朝鮮で、新しく二商港を開発し、斬々日韓の通商貿易を拡張するので、この時期に当たって日韓両国の人が各々その語学を勉強しようとする者が多い。私が以前、日本人のために、韓語獨學書を編纂したが、即今朝鮮人士のため、淺學を顧みず日語獨學書を編成したので、韓人の日語を学ぼうとする人と共に、その楷梯としようとするので、万一読者に裨益するところがあれば、幸いです。日韓が音が異なるので、朝鮮諺文をもって、日語の音を明白に書くことができないため、本冊はその中の相似する音を撰擇することになって編註したが、しかし、この書は忽忽の間に板刻し、誤謬洩説漏が多いようですので、それは他の日に閑暇を期して、訂正しようと思しますので、読者は専らご理解下さい。

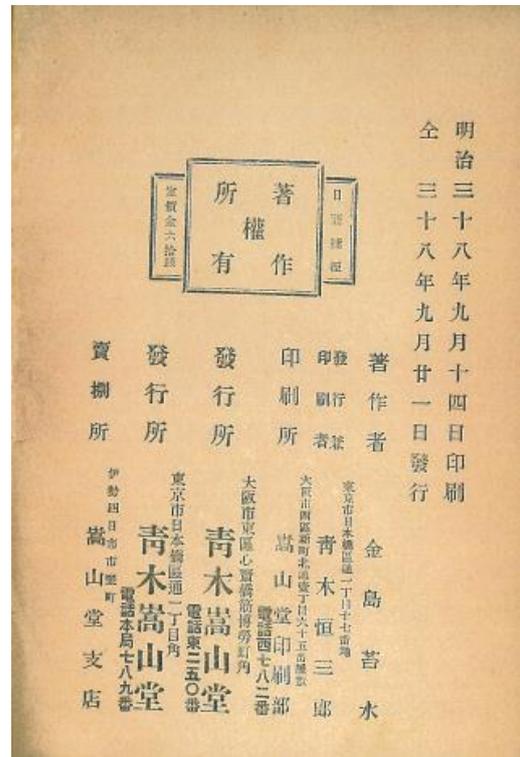
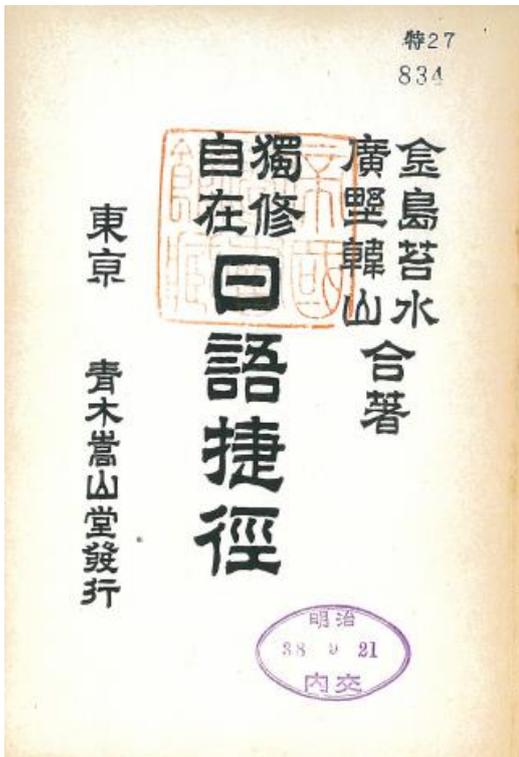
**第7節 『獨修自在日語捷徑』(1905 ; 明治38)**

1905年9月21日東京で発行された『獨修自在日語捷徑』は、金島苔水と広野韓山の共著である。

植田(2014a)では、日本近代韓国語教育史の視点から見た商業出版物としての韓国語学習書という観点から、著者の金島苔水とその著書について考察を行っており、金義泳(2012)では『獨修自在日語捷徑』の会話の内容を分析している。

本稿では著者の経歴について植田(2014a)の考察を参照し、『獨修自在日語捷徑』について概観する。

【資料20】『獨修自在日語捷徑』(1905) 中表紙／奥付 (日本国会図書館 所蔵)



〈中表紙〉

金島苔水 廣野韓山 合著

獨修自在日語捷徑

東京 青木嵩山堂發行

〈奥付〉

明治三十八年九月十四日印刷

全 三十八年九月廿一日發行

定價金六拾錢

著作者 金島苔水  
 東京市日本橋區通一丁目十七番地  
 發行兼印刷社 青木担三郎  
 印刷所 大阪市四區新町北通老丁目六十五番屋敷  
 嵩山堂印刷部  
 大阪市東區心齋橋筋博勞町角

発行所	青木嵩山堂 電話東二五〇番
発行所	東京市日本橋區通一丁目角 青木嵩山堂 電話本局七八九番
賣捌所	伊勢四日市堅町 嵩山堂支店

## 7.1 著者

植田(2014a)では、허재영(2011)が『三ヶ月卒業日：鮮語新会話』の解題で、著者を「カネシマ」(金島苔水)、コウノ(広野韓山)としていることを指摘し、彼らの著書に現れている文の分析<sup>74</sup>から、金島苔水は「カナシマ」、広野韓山は「ヒロノ」・「カンザン」と判断している。また、同論文では、『対訳日韓新会話』(1905)の内表紙や本編冒頭に金島苔水、奥付に金島治三郎となっていることから、本名は治三郎、苔水は号と見られると述べている。

金島の経歴については、植田(2014a:64)で次のように述べられている。

金島が朝鮮語や漢語を如何に習得したのかは不明であるが、朝鮮語については僅かに「余等夙に此に見る所ありて韓語を研究せること年あり(『韓新』<sup>75</sup>自序)という言葉がある。また、「御職名(オヤク)ハ何(ナン)デスカ/陸軍通訳(リクグンツウヤク)デス(『韓速』<sup>76</sup>121頁)という例文から、陸軍通訳の経歴を持つ可能性がある。漢語学習書を金島と同じ出版社からも多数刊行し、神戸地方裁判所書記・通訳を務めた函南・西島良爾も元は陸軍通訳であること(柴田

<sup>74</sup> 植田(2014a:64)は、参考にした例文として次のような文を挙げている。

『日韓会話三十日速成』(1904) 「私(ワタクシ)ハ、金島苔水(カナシマタイスイ)デス」 121項

『日韓言語合璧』(1906) 「私(ワタクシ)ハ金嶋(カナシマ)ト申(モウ)シマス」(嶋はママ) 144項

「広野様(ヒロノサン)」 149項

「金島(カナシマ)ト広野(ヒロノ)ト云(イ)フ人(ヒト)ノ合著(ガフチヨ)デス」 171項

例文の提示はしてないが、上記の他に『日韓言語合璧』(1906) 171項と『対訳日韓新会話 附文法註解』(1905) 109項・111項を記している。

<sup>75</sup> 『対訳日韓新会話 附文法註解』(1905)のことである。

<sup>76</sup> 『日韓会話三十日間速成』(1904)のことである。

2002)等から蓋然性がある。あるいは、『日清会話語書類集』の自序に「明治三十八年五月三十一日波羅的艦隊全滅の広報号外を手にし/感極って泣きつゝ石塚松雲堂編輯局に於て」とあることから、同社の編集者であった可能性もあり得る

金島は本書の他に、『日韓会話三十日間速成』(1904.10)、『韓語教科書』(1905.1)、『対訳日韓新会話 附文法註解』(1905.3)、『対訳日韓会話捷徑』(1905.3)、『韓文日本豪傑桃太郎伝』(1905.7)、『日韓言語合璧』(1906.4)といった韓国語学習書を発行しているが、この中で『韓語教科書』(1905.1)、『対訳日韓新会話 附文法註解』(1905.1)、『対訳日韓会話捷徑』(1905.9)は広野との共著である。

## 7.2 構成及び表記

『獨修自在日語捷徑』は、285ページの本文から成っている。

本書の「第一編」には日本語と韓国語の文字が提示されており、「第二編」には、三十二章にかけて単語が「日本語(ハングル表記)－漢字－韓国語」で記されている。「第三編 会話」は四十課から成っているが、第一課から第三十七課の前半部までは、主に新出語が提示された後、会話文が対訳が出されており、第三十七課の後半部から第三十九課までは品詞に関する説明と練習問題が、第四十課には問題のみが書かれている。

「第三編 会話」の表記においては、漸次的に日本語が増えていく様相をみせている。単語においては、第一課から第二十五課及び二十八課には「日本語(カナ表記とハングルの提示)－韓国語」「例: 타이헨다이헨－너무 p.125」になっているが、第二十六課・第二十七課及び二十九課からには、日本語のハングル表記がなくなり、「日本語(ハングル表記とカナ表記)－韓国語」(例: 코도모－어린이 p.204)に変わる。会話文の対訳においても、前半部の二十八課までは、「日本語(ハングル表記)－韓国語」  
「例: 시즈레이, 이다시마수－실례, ㅎ읍니다(和訳:失礼いたします) p.132」<sup>77</sup>で書かれているが、後半部の二十九課からは、「日本語(ハングルとカナ混じり表記)－韓

---

<sup>77</sup> 第三課までは日本語(ハングル表記)に、部分的にカナルビがついている。

国語」 「例：고레ヲ、고이데スカ-이는、닝어오닛가 p.211」、第三十五課からは「日本語(カナ表記)－韓国語」 「例：サケヲ、モツテコイ－술을가져오니라 (和訳:酒を持ってこい) p.232」のように日本語表記の割合が高くなっていく。

表記において変化をみせていることや品詞の説明及び練習問題の提示は、他学習書と区別できる特徴である。

### 7.3 発行背景及び目的

『獨修自在日語捷徑』は前書きがなく、その刊行目的などについて記していないため、著者の金島が著した韓国語学習書に記されている前書きと韓国語学習書の著者としての金島に関する評価を参考にする。

金島は、『日韓会話三十日間速成』(1904)、『韓語教科書』(1905)、『対訳日韓会話捷徑』(1905)では、各々の著書の「例言」において簡略に本の語学的側面について紹介しており、『対訳日韓新会話 附文法註解』(1905)では、「自序」に学習書の発行目的について7ページにわたって述べている。また、本研究で考察する『獨修自在日語捷徑』と『韓文日本豪傑桃太郎伝』(1905)、『日韓言語合璧』(1906)には前書きを記していない。即ち彼は、1905年7月を境として前書きをやめている。

『対訳日韓新会話 附文法註解』(1905)には、「自序」には韓国語学習の必要性について以下のように書いている。

今後眞に彼の国民の知識を開発し根本的に彼の国を改革せんとせば韓語の研究一日も忽  
にすべからざるなり韓国として日本の附庸たらしむまでに至らしむるの道は他なし韓語に熟  
達せし彼の国情に通じたる我邦人が一人も多く彼の地に渡航して日本の文化を移植するにあ  
るのみ (pp.5-6)

彼は、言語を通じてこそ文化を移植することができると思っており、そのために言語教育が必要であると論じている。この序文について、Mina Hattori(2011:89)では、

「Although the author does not seem to expect Korea to be completely annexed by Japan, he

suggests assimilating Korea into Japanese culture by sending Japanese experts on Korea there (和訳：著者は、韓国が日本によって完全に植民地化されることを期待しているようには見えないが、韓国に日本の韓国専門家を送ることにより、日本文化を韓国に同化させることを提案している)」と解釈している。

一方で植田(2014a:69)は、金島の韓国語学習書を商業出版物という観点から考察しており、「金島による著書は実用書であり、時流に乗った売れ筋商品、おそらく作り本であるといえよう。(中略) 極言すれば、内容の充実度や正確さより売れ行きが重要であったと再解釈できる。また人物史主義から見れば、著者にとっても自己のより豊かな物質的生活の追求のために、生涯のある時期に身に付けた朝鮮語を使い、生涯のある時期に時流に乗った本を、時には原稿の使い回しもして書いたという側面も見出せる」と記しており、今までの研究までになかった新しい見解を見せている。

## 第8節 『日語會話』(1908 ; 明治41)

東京築地活版製造所で発行された『日語會話』は、1908年6月1日、島井浩によって著された学習書である。『日語會話』については、成玗珂(2014)によってその詳細が考察されており、著者の島井浩については韓国語学習書の著者として多く研究されている。本節では、先行研究を踏まえつつ、『日語會話』についてまとめておきたい。

【資料21】 『日語會話』(1908) 表紙／中表紙／奥付 (日本国会図書館所蔵)



<表紙>

日語會話

<中表紙>

島井浩 著

日語會話

<奥付>

明治四十一年五月二十七日印刷

明治四十一年六月 一 日發行 (定價參拾五錢)

著者 長崎県下県郡厳原宮谷町百四番戸  
韓国釜山西町二丁目二十四番地  
島井浩

印刷者 東京市京橋區築地三丁目十五番地  
野村宗十郎

印刷所 東京市京橋區築地二丁目十七番地  
株式會社 東京築地活版製造所

## 8.1 著者

島井浩は、対馬旧厳原の藩士で1883年釜山朝鮮語学所に学び、のち公立釜山商家学校、釜山第一公立小学校の教員を歴任し、1935年3月2日、69才で没した。1906年に島

井浩が著わした日本語学習書であり、韓国語学習書でもある『日韓韓日新会話』の韓国語校閲に携わった、忠清道の文官である成斗植が寄せた序文に「在釜山島井浩氏」という記録があることから、当時島井浩は釜山に在住しており、成斗植のような韓国の官吏らとも親交があったものとみられる<sup>78</sup>。

また島井は、『日語會話』の他にも『実用韓語学』(1902)、『実用日韓会話獨学全』(1905)、『日韓韓日新会話』(1906)、『韓語五十日間獨修』(1910)、『韓語五十日間獨修』(1918)の韓国語学習書を著している。

## 8.2 構成及び表記

本書は197ページから成っており、会話文は、「韓国語(ルビつきのハングル表記)ー日本語ー日本語のハングル表記」で書かれており、単語においては「韓国語(ルビつきのハングル表記)ー日本語(ルビつきの漢字)ー日本語のハングル表記」で表記されている。

序文で「本書는 順序업고、部門업고、雜然는 觀이有는나、全編通讀는 者는、或其間에、序列이、有는 全斟酌는 잇습니다(和訳：本書は、順序なく、部門なく、雜然たる觀が有るが、全編通読した者は、そのうちに序列があることを斟酌すると思います)」と述べているように、目次を記しておらず、部門分けもしていないのであるが、上段に会話文を、下段に単語を載せており、単語の収録において他学習書と同様に内容の分類を行っている。またその内容も数量関連の語彙が多く見られるが、これも開化期に発行された他の日本語学習書と同じところである。

会話文において、開化期に発行された他の日本語学習書は、内容の分類を採択しているが、『日語會話』は、時制・仮定・可能・推量・打消・条件の項目別に整理した「文法シラバス」と勧誘・依頼・意志・伝言・謝罪・禁止・命令・当為といった項目別の「機能シラバス」の折衷形式を採用しており、学習者が多様な表現の習得ができるようにしている<sup>79</sup>。

<sup>78</sup> 成琬珂(2014)「開化期の日本語学習書『独学日語会話』に関する考察」p.67

<sup>79</sup> 成琬珂(2014)「開化期の日本語学習書『独学日語会話』に関する考察」p.81

### 8.3 発行背景及び目的

本書には、以下の前書きでの発行背景と発行経緯について記している。

近來朝鮮사람이、日語비우느니라、次々흔히고、的當흔冊은、업스니、或日人애、口語를、써서비우고、그러치아니면、本是日人이、韓語工夫를爲하여、編纂흔冊을、가지고、각구로、日語를、비우는지라、내가、여러히、朝鮮에잇고、朝鮮親舊도만키로、그런親舊<sup>ママ</sup>子弟 들이、日語工夫를、하고자、하여異口同音으로、日語冊編纂하기를、催促하니、不顧淺學하여、此小冊을編함  
或曰、日人을、先生삼아、工夫홀써는、其所用이、업지마는、或시골의잇고、先生업시、홈자、비울사람은、기려이、朝鮮諺文을、가지고、日語를、써야하깃다고、그말도、至當하니、그리하엿소、然이나、諺文으로、日語쓰라면、춤극難이라、일홀터이면、日語濁音(ガギグゲゴ)를、(싸끼꾸쎄꼬)라고、씻스되、꼭日本語과、긋치안고、다만近似하다뿐이요、因하여、本文中에는或(ガ)를(가)로、쓰고、(ギ)를(기)라고、쓴디가、만소이다、또흔(ツ)가(두)도、아니요、(주)도、아니로되、的當흔文字가、업스니、或(두)或(주)라고씻습니다、其他其種類가、不少하니、그런거슨練習홀外에良道가無흔줄、암니다  
本書는順序업고、部門업고、雜然흔觀이有하나、全編通讀흔者는、或其間애、序列이、有흔줄斟酌하깃습니다

明治四十年陽曆十一月六日

隆熙元年

編者識

#### 【和訳】

近來朝鮮の人が日語を学ぶ人が、次々多くなるのに、適当な学習書がないので、日本人に口語で学び、あるいは、日本人が韓語勉強のために、編纂した学習書を使い、逆に日本語を学ぶのである。私が幾年朝鮮に居り、朝鮮の友達も多いので、そのような友達のご子息らが日本語の勉強を望み、異口同音で日本語学習書の編纂を催促するので、淺學を顧みず、この小冊を編する。

ある人が、日本人を先生として学ぶ時は必要がないけど、もし田舎に居り、先生無く、一人で学ぶ人は必ず朝鮮諺文をもって、日本語を書かなければならないと言い、その言も至

当なので、そう思いました。しかしながら、諺文をもって、日本語を書くのは極めて難しい。言わば、日語濁音(ガギゲゴ)を、(sga sgi sgu sgiei sgo)と書いたが、日本語と同じではなく、ただ近似しているのみである。因って、本文中には或は、(ガ)を(ga)に書き、(ギ)を(gi)と書いたところが多いです。また(ツ)が(du)でも(ju)でもなく、適当な文字がないため、或は(du)或は(ju)と書きました。その他、その種類が少なくないので、そのようなことは練習する外に、良道がないと存知ます。本書は、順序なく、部門なく、雑然たる観が有るが、全編通読した者は、そのうちに序列があることを斟酌すると思います。

明治四十年陽曆十一月六日

隆熙元年

編者識

以上の前書きから当時日本語学習者が増えていたこと、また日本語学習に対訳の韓国語学習書が用いられていたことが窺える。

## 第9節 まとめ

以上韓国開化期に日本人によって著された7種の日本語学習書について、その書誌情報を概観した。

上記の学習書は、釜山で出版された『日語工夫』(1891)を除くと、いずれも東京及び京城で出版されているが、学習書が出版されたころの著者の出版時の居住地を調査すると以下のとおりである。

- ①『日語工夫』(1891)：中野許多郎—釜山
- ②『日語捷徑』(1895)：金澤末吉—不明
- ③『日本語獨案内』(1895)：稲益謙吉—京城
- ④『単語連語日話朝雋』(1895)：境益太郎—元山、李鳳雲—不明
- ⑤『簡易捷徑日語獨學』(1897)：弓場重榮—仁川

⑥『獨修自在日語捷徑』(1905)：金島苔水・廣野韓山－不明

以上から開化期の日本語学習書の著者の中、3人が元山、釜山、仁川といった開港地にいたことがわかる。

韓国開化期は、韓国と日本との貿易・商業活動が活発になる時期であり、商人たちには両国の言語習得が必要とされていた。韓国では1891年に7月に京城において、日本語教育機関ができ、日本語教育が始まるようになるが、それとは異なる性格の日本語教育が、韓国最初の開港地である釜山で始まったのである。

稲葉(1997:449)は、漢城日語学校(1891年設立)と仁川日語学校(1895年設立)の創立が最も早いことから、「日語学校」の歴史は官立主導によって首都圏からスタートしたとしているが、日本語学習書からという観点からみると、開化期の日本語学習書は開港地で民間人主導で行なわれたと見られ、「日語学校」とその性格が異なっている。

しかし日本人により作られた日本語学習書を韓国人が購入し学習したという点は、「日本側の働きが多かったが、韓国側による自主的採択の結果であった」という開化期「日語学校」の性格と同様であった。

また、開化期に出版された学習書は、金澤末吉と稲益謙吉のような自ら商業に携わっていた人物が、商業活動上の必要を感じ作りあげたものと、弓場重栄、金島苔水・廣野韓山、島井浩のように、韓国語学習書に携わった経験を活かして発行したものがある。後者については、韓国語学習書に関する研究が多くなされており、成玗珂(2008:39)では、「(島井浩は)金島苔水とともに、明治後期における代表的な韓国語の普及者といえよう」と評価をしているが、これについて植田(2014a:9)では、「島井浩や金島苔水を「代表的な朝鮮語の普及者」・「両国の架け橋」とするような、誤った評価が下されることがあった。他方では、支配のための朝鮮話教育・朝鮮語学習というように短絡的な把握がなされることもあった」という批判もある。これは著者に対する批判ではなく、ある人物について一時期の活動を見て、その人物像を評価してしまう研究者への批判であろう。

日本語学習書の著者についての資料が充分とはいえないため、その経歴の詳細まで

は調査できなかったが、中野許多郎、金島苔水の通詞経歴と弓場重栄と島井浩が日本対馬の朝鮮通詞養成機関を嚆矢とする、釜山朝鮮語学所で韓国語を学んでいたことからみると、近代の始まりである韓国開化期の日本語教育は、近世日本の韓国語教育との関連が深かったと考えられる。

韓国近代における日本語教育は、近代に生れた帝国主義の「支配のための教育」ではなく、近世からあった両国の言語教育の延長線であり、時代的背景から生まれた実利的な目的から始まったのであろう。

## 第6章 韓国開化期の日本語学習書の内容的特徴

### 第1節 はじめに

### 第2節 韓国開化期の日本語学習書の語彙

### 第3節 韓国開化期の日本語学習書の内容分析

### 第4節 まとめ

## 第6章 韓国開化期の日本語学習書の内容的特徴

### 第1節 はじめに

第2章で述べたように、開化期における日本語学習書は、学教育機関で使用された「教科書」と民間人の独学のために著された「学習書」に分けられる。また、「教科書」には「学部編纂教科書」と「民間人編纂教科書」があった。

박성희(2005)は、開化期に学校で使われた教科書の本文内容について、開化期の「学部編纂教科書」と「民間人が編纂した教科書」に分けて比較・分析し、両教科書は日本語教育のための教材という点は同一であるが、教育目的は著者により異なっていたと述べている。日本（「学部編纂教科書」）は韓国を植民地化しようとする意図を前面に現した反面、韓国（「民間人編纂教科書」）は自主独立と民族意識に関連した本文内容を提示しているというように、教科書の本文内容に現れた相反する面が開化期当時の日本語教育の性格を決定する要素であるとしている。

一方で、民間人によって著され、民間人の独学で利用された日本語の「学習書」は、第5章で述べたように「日本人著学習書」と「韓国人著学習書」に分類できる。学者によっては、これを「文法書」、「会話書」、「辞典」などに分けて考察しているが、本稿では、総称して「学習書」とする。

金義泳(2007:311)は、開化期の日本語会話書は、語学教材というより一般教養書のよりに多くの話題を持っていたと述べている。そして、日本語を通して先進文物を学び、社会・経済的な国の発展を図ろうとしていた当時の日本語教育について、「日本語教材は単純に語学勉強のためのものだけでは不十分であったかもしれない。他の目的まで満足させなければならなかったと思われるし、それが教材の編纂にも影響を及ぼしていたと考えられる」と述べており、開化期の日本語学習書は日本語学習の役割に加え、いわゆる思想的な面の教育が求められたようである。

また、金義泳(2012)では、韓国人がその時代に日本語教育と教科書を通じてどのよ

うな日本(人)、日本文化が伝えられていたか分析している。そして、比較のため、日本の民間人による韓国人向けの日本語教材である『日本語獨案内』(1895)、『日語捷徑』(1895)、『獨修自在日語捷徑』(1905)、『独学日語教範』(1912)と、日本側(政府)による日本語教科書である『日本読本』(1907)巻1~8を対象にして考察している。

以上のように、先行研究では学習書の内容分析を通じて開化期の日本語学習書の目的について明らかにしようとする試みがあったが、その考察は教科書に集中している<sup>80</sup>。

韓国開化期における「日本語学習書」の発行巻数を表にすると以下のようになる。学習書目録は【付録1】として載せている。

【表2】 日本語学習書の発行状況

編著者	韓国人		日本			
			学部		民間日本人	
学習書種類	教科書	学習書	教科書	学習書	教科書	学習書
開化期前期	0	1(1) <sup>81</sup>	0	0	0	6(1)
開化期後期	5	11	8	0	0	1

【表2】で見られるように、「民間日本人」は学習書のみ発行しているが、1種を除くとすべて開化期前期に発行されている。換言すると、開化期の韓国民間人向けの日本語教育は、民間日本人の手から始まったといえる。

「民間日本人編纂学習書」については、第5章で述べたように、이강민(2011)では『簡易捷徑日語獨學』(1897)、成玗珂(2014)では『日語會話』(1908)が考察対象として取り上げられている。金義泳(2012)では、「韓国人編纂教科書」の比較の対象として『日本語獨案内』(1895)、『日語捷徑』(1895)、『獨修自在日語捷徑』(1905)が取り上げられ、内容分析が行なわれた。

以上を踏まえ、本章では先行研究を参考にしつつ、日本人により著された日本語学

<sup>80</sup> 金義泳(2012)では開化前期の学習書を扱っているが、同論では韓国人著の学習書の特徴を考察するにあたり、比較資料と使用しており、開化後期の学習書が主な考察対象になっている。

<sup>81</sup> ( )は共著の巻数を表す。

習書の語彙と会話文に現れる内容的特徴について考察する。

## 第2節 韓国開化期の日本語学習書の語彙

開化期の日本語学習書7種のうち、目次が記されている『日本語獨案内』(1895)、『単語連語日話朝雋』(1895)、『簡易捷徑日語獨學』(1897)、『獨修自在日語捷徑』(1905)については、目次の分類に基づき考察する。また、『日語工夫』(1891)、『日語捷徑』(1895)、『日語會話』(1908)については、単語部に記されている語彙を取り上げ、それを内容別に分類する。なお、『日語會話』(1908)においては、成玗珂(2014)を参照する。

### 2.1 『日語工夫』(1891 ; 明治24)

『日語工夫』は総21ページから成っているが、目次がなく、その構成においても部および課の設定など行っていないため、第5章においては表記及び内容から「文字部」、「単語部」、「会話部」に分けて考察した。

本書には101語の単語が提示されているが、「数字・単位」が64語、「時間」が37語であり、すべて数量関係の語彙である。

『日語工夫』は、初級レベルの人も独学で日本語学習ができるように工夫されており、「単語部」は「数字・単位」と「時間」の数量関連の語彙だけで構成されている。また、「会話部」には日常生活に使用する内容が平易簡略な短文及び句で119句が収録されている。

### 2.2 『日語捷徑』(1895 ; 明治28)

『日語捷徑』は4ページの前書きと82ページの本文から成っており、目次は記されていない。

1 ページから 58 ページの前半部は「文字部」・「単語部」・「会話部」の三つに分けられ、58 ページからの後半部は、単語と会話が折衷形式で記されている。

「文字部」には、日本仮名と物種・文芸・草木及果實・衣服・建設物の 13 語の語彙が収録されている。

「単語部」には、数字・時間・方位・自然と 10 語の助詞が提示された後、27 項目<sup>82</sup>の例文が書かれており、日本貨称・朝鮮貨称と 2 文の例文が収録されている。『日語捷徑』も『日語工夫』の「単語部」と同様に数量関連語彙に集中していることがわかる。

『日語捷徑』の「会話部」は「物貨売買」・「相逢人事」・「雑事問答」に分かれており、「物貨売買」には 42 文の商業関係の文が、「相逢人事」には日本人と韓国人が会う場面が設定され、問答形式の会話 23 文が収録されている。続いて「雑事問答」には 84 項目が収録されているが、前半は文型練習が中心であり、後半には以下のように始まる日本語学習に関する問答が 20 文にかけて記されている。

58 ページからは「日用物名(単語)」、「常食物名(単語+会話文)」、「官位(単語)」、「日本地名(地名+会話文)」、「雑話(会話文)」、「朝鮮地名(地名+会話文)」が収録されている。

### 2.3 『日本語獨案内』(1895 ; 明治28)

『日本語獨案内』は、85ページの本文に8ページの附録が付いているが、第一編から第八編までは、各項目別に単語が提示された後に会話文が書かれており、第九編と第十編は、会話文のみから成っている。以下、本書の目次を記しておく。

日韓兩國假名及諺文之對照	一丁
第一編 ・・基数 貨幣 度量衡及稱量	三丁
第二編 ・・年稱 月稱 日稱 時稱	一四丁
第三編 ・・天文 方位 地理 建設物 國土	二十三丁

<sup>82</sup> 1 項目に複数の句が記されている場合もある。(例：○ 日本ノ人 朝鮮ノ本 p.16)

第四編	・官職 人族 親屬	三十六丁
第五編	・身體 疾病	四十四丁
第六編	・住居及家具 飲食物及食器 衣冠及織物	四十九丁
第七編	・武器 馬具 鐵器 文房具 雜器 舟車及輿轎	五十九丁
第八編	・金石 穀物 蔬菜 草木 花卉 果實 魚類 鳥類 獸畜	六十五丁
第九編	・對談	七十五丁
第十編	・雜話	八十丁
附錄	・名詞、動詞、副詞及接續詞之變化 日韓兩國通貨之相當表	一丁

## 2.4 『単語連語日話朝雋』(1895 ; 明治28)

本書の本文は総48張であり、以下のように27張の単語編と21張の連語編に分けられている。

### 単語目録

日本數文部 日本錢數部 朝鮮錢數部 朔數部 日數部 時數部 天文部 地理部 日本國都部 朝鮮國都部 人形部 動事部 人倫部 仕進部 飛禽部 走獸部 軍物部 文房部 飲食部 魚物部 米穀部 花草部 果實部 物種部 財物部 虫部 疾病部 家物部 寺僧部 樹木部 語助辭部

### 連語目録

初歩部 天文部 地理部 人事部 軍整部 政事部 形容事部

これ以前の学習書は、日常生活に必要とされる文や商業活動に役立つ文が大部分であったが、『単語連語日話朝雋』には「軍整部」、「政事部」と言った内容が含まれている点が特徴であると言える。

## 2.5 『簡易捷徑日語獨學』(1897 ; 明治30)

『簡易捷徑日語獨學』は、総118ページからなっており、以下のように「第一編基數及數稱」、「第二編單語」、「第三編會話附録動詞變化一覽」から構成されている。

日韓兩國假名及諺文之對照 .....	一丁
<b>第一編 基數及數稱</b> .....	五丁
基數 貨幣 尺度 斗量 權衡 年稱 月稱 日稱 時稱 里程稱	
<b>第二編 單語</b> .....	二十五丁
天文地理 時期 身體 人族 文藝及遊技 國土及都邑 官位 職業 商業 旅行 家宅家具 及日用品 衣服及寢具 飲食 草木及果實 家禽獸 貿易品 日韓地名	
<b>第三編 會話</b> .....	六十二丁
第一 人事要談 第二 旅行用談 第三 商事對談	
<b>附錄 動詞變化一覽</b>	

## 2.6 『獨修自在日語捷徑』(1905 ; 明治38)

『獨修自在日語捷徑』は、285ページの本文から成っており、その目次を以下に翻刻する。

### 第壹編

第壹章 日本諺文(일본언문) 第貳章 朝鮮綴字

### 第貳編

第壹章 日本數爻部(일본수효부) 第貳章 日本錢數部(일본전수부)

第參章 朝鮮錢數部(조선전수부) 第四章 年數部(년수부) 第五章 朔數部(달수부)

第六章 日數部(일수부) 第七章 時數部(시수부) 第八章 天文部(턴문부)

第九章 地理部(디리부) 第十章 日本國都府(일본국토부) 第十一章 人形部(인형부)

第十六章 仕進部(스진부) 第十七章 飛禽部(비금부)

第十八章 走獸部(쥬수부) 第十九章 軍物部(군물부) 第二十章 文房部(문방부)

第二十一章 飲食部(음식부) 第二十二章 魚物部(어물부) 第二十三章 穀菜部(곡직부)

第二十四章 木草部(목초부) 第二十五章 物種部(물종부) 第二十六章 財物部(직물부)

第二十七章 蟲部(침충부) 第二十八章 疾病部(질병부) 第二十九章 家物部(가구물부)

第三十章 語助詞部(어조스부) 第三十一章 代名詞部(디명스부)

第三十二章 諸語部(제어부)

## 第參編會話

第一課 第二課 第三課 第四課 第五課 第六課 第七課 第八課 第九課 第十課  
第十一課 第十二課 第十三課 第十四課 第十五課 第十六課-名詞雜品 第十七課  
第十八課 第十九課 第二十課 第二十一課 第二十二課-日本諺文讀法練習  
第二十三課 第二十四課 第二十五課-日本語(其一) 第二十六課-日本語(其二)  
第二十七課 第二十八課 第二十九課 第三十課 第三十一課 第三十二課 第三十三課  
第三十四課 第三十五課 第三十六課  
第三十七課-飲食(음식)、物詞各論(물시각는)<sup>83</sup>

練習問題 一 名詞 二 代名詞 三 動詞 四 形容詞 五 副詞 六 接續詞  
七 感動詞 八 助動詞 九 助詞

練習問題 一 名詞答 二 代名詞答 三 動詞答 四 形容詞答 五 副詞答  
六 接續詞答 七 感動詞答 八 助動詞答 九 助詞答

第三十八課 一 代名詞 二 動詞 三 形容詞  
四 第一例 第二例 第三例 第四例 第五例 第六例

第三十九課

助詞用例 ハ(撥音와)之部 ヲ워之部 ガ○가之部 데ㄴ데之部 니니之部 노너之部  
에예又에之部 모모之部 코、ソ고서之部 토더之部

第四十課-演習

## 2.7 『日語會話』(1908 ; 明治41)

本書は197ページから成っており、目次は記されていない。本文においては単語部と会話部が分類されておらず、上段に会話文を、下段に単語を載せておける。成玗珂(2014:81)では、以下に引用するように、下段に単語を対象にその内容をみている。

『独学日語會話書』に収録された語数は総784語である。部立ては行われていないが、敢えて分類を試みると、数字(38)・自然(20)・時間(44+17)・季節(4)・人体(32)・人事(32)・学校(3)・文

---

<sup>83</sup> 구語에서도文語에서도文章이란것은다單語으로成호거시니그單語의種類를物詞라謂호 (日本語：口語においても文語においても文章というものはすべて単語からなったものであるため、その単語の種類を物詞と称する)『獨修』 p.234

房具(13)・趣味(12)・国(7)・行政区域(4)・地域(3)・施設(13)・職業(18)・売買(32)・故郷(4)・道(2)・乗り物(12)・方位(4)・日(31)・家屋(13)・月(12+12)・副詞(4+8+5+8+4+11+10+6+2+6)・家財(4+14+14+3)・年(11)・単位(7+9+26+21+17+5)・衣服(14+3)・飲食(35+3+8)・禽獣(24)・繊維(2+2)・金属(2+6)・食器(6+3)・雑(10)・修飾語(89)になる。そのうち、時間・副詞・家財・単位・衣服・飲食・繊維・金属などの関連語彙は数回にわたって掲載されている。

本章では、上記の項目を用いるが、内容によってその分類と用語について他の学習書とのバランスを考え、修正を施す。

### 第3節 韓国開化期の日本語学習書の内容分析

学習書の内容別の分類においては、学習書7種の部立て<sup>84</sup>を話題別に分類した。その分類においては、吉岡(2000)、河先(2006)、金義泳(2012)を参考にして整理する。

---

<sup>84</sup> いくつかの部門・部類に分けること。また、その分類。

【表3】 単語部の話題別分類

書名 話題	工夫 (中野)	捷徑 (金澤)	案内 (稲益)	朝雋 (境・李)	獨學 (弓場)	獨修 (金島・広野)	會話 (島井)
日常生活 (人間・物種)		文芸 物種 衣服 日用物名 常食物名	人族 親属 身體 疾病 人形部 住居及家具 飲食物及食器 衣冠及織物 馬具 鐵器 文房具 雜器	人倫部 仕進部 疾病部 文房部 飲食部 物種部 財物部 家物部	身體 人族 文藝及遊技 官位 職業 家宅家具 及日用品 衣服及寢具 飲食	人形部 仕進部 疾病部 文房部 飲食部 物種部 財物部 家物部 家禽獸	人事 趣味 職業 文房具 家屋 家財 衣服 食器 物種
時間	時間	時間	年稱 月稱 日稱 時稱	朔數部 日數部 時數部	年稱 月稱 日稱 時稱 里程稱 時期	年數部 朔數部 日數部 時數部	時間
自然		草木及果實 自然 天文 方位 地理 建設物 國土	金石 穀物 蔬菜 草木 花卉 果實 魚類 鳥類 獸畜	天文部 地理部 魚物部 米穀部 花草部 果實部 虫部 樹木部	天文地理 草木及果實 家禽獸	天文部 地理部 飛禽部 走獸部 魚物部 穀菜部 木草部 蟲部	自然 季節 禽獸
産業					商業 貿易品		売買
数量	数字 単位	数字	基數 貨幣 度量衡及稱量	日本數文部 日本錢數部 朝鮮錢數部	基數 貨幣 尺度 斗量 權衡	日本數文部 日本錢數部 朝鮮錢數部	数字 単位
社会/政治		官位	官職 武器	軍物部		軍物部	
教育							学校
場所/移動		建設物 方位 日本地名 朝鮮地名	舟車及輿輶	日本國都部 朝鮮國都部 寺僧部	國土及都邑 旅行 日韓地名	日本國都府	国都 地域 施設 交通 方位

上記から見ると、商業活動・教育などの機能的な単語および思想に関わる単語はあまり現れておらず、「日常生活」、「自然」、「数量」に関わる語彙が多く収録されていることが分かる。박성희(2005)では、韓国人の民間人が編纂した教科書の分析から、時代的狀況と関連した特徴的な文を項目別に整理し、「独立や民族意識、軍事、孝行、教育」と関連した内容をあげている。

本稿でも、日本人により著された日本語学習書の会話文から、特徴な内容を以下のような項目で分類・整理した。

### 3.1 商業に関連した内容

『日本語独案内』(1895)では「而交通及貿易上喜有所勢之推移也」、『日語独学:簡易捷徑』(1897)では「漸々日韓의通商貿易을、擴張<sup>ママ</sup>하는지라」と述べられており、当時韓国人と日本人の通商・貿易が活発になり、両国語の習得が必要とされていたと考えられる。第5章で見たように、韓国開化期の日本語学習書の「単語部」では、貨幣、尺度、斗量など商業活動に役に立つ内容が多く分量を占めていたが、「会話部」でも商業活動に関わる内容が多く見られる。その例文を以下に記しておく。

#### ①『日語工夫』(1891)

- ◆ タカイニアキナイシヨウ  
서로 흥정<sup>히</sup>자 — 당아이니아기나이사요(ママ)  
(和訳: 互いに商いしよう) (p.18)
- ◆ ウリカイシマス  
딤패<sup>히</sup>옵네 — 우리가이시마스  
(和訳: 売買します) (p.18)
- ◆ トリヒキシマス  
거<sup>히</sup>갯소 — 도리히기시마스  
(和訳: 取引します) (p.18)
- ◆ カズガイチイチヨイ  
슈효가<sup>나</sup>나<sup>치</sup>올다 — 가중아이디이디요이  
(和訳: 数が一々よい) (p.20)

#### ②『日語捷徑』(1895)

- ◆ 코ノ紙ハ、一枚、イクラデスカ — 이중의는、한장에、얼마요 (p.26)
- ◆ ワ ア  
모<sup>트</sup>트、야스<sup>이</sup>노ハ、有<sup>리</sup>마센카 — 더싼것<sup>슨</sup>업<sup>습</sup>넛가 (p.27)
- ◆ 스코시、オヒキナサイ — 좀덜바드오 (p.27)
- ◆ シナ  
コレハ、ヨロシイ品<sup>デ</sup>스 — 이것<sup>슨</sup>쵸흔물<sup>건</sup>이요 (p.29)

③ 『日本語獨案内』 (1895)

- ◆ 子 タンハ イ クラ デスカ  
넷탐와 이구랏테수가 — 갑시얼마요

(和訳: 値段はいくらですか)

スコシ タカイデス  
수고시 다가이테수 — 좀빚스요

(和訳: 少し高いです)

(p.8)

- ◆ ヒドク タカイ スコシ マ케ナサイ  
Hitsogu dagai sugoshi mikenasai — 밍우빚스요좁감호오

(和訳: ひどく高い、少しまけなさい)

(p.9)

- ◆ 거레와마다도나기치요뎃테수가라마가리마센 —

이거슨다시업는호품이니감홀슈업소

(和訳: これはまたとなき上等ですからまかりません)

(p.10)

④ 『單語連語日話朝雋』 (1895)

- ◆ 네ㄴ단와이구라ㄴ데스가 — 갑시얼마요

(和訳: 値段はいくらですか)

(28張裏)

- ◆ 가네오이구라구다사이마스가 — 돈을얼마나쥬겏소

(和訳: 金をいくらくださいますか)

(34張裏)

- ◆ 사가ㄴ대ㅇ가미나ㄴ데이구라니나리마스가 — 술갑시모도얼마나되옵느니라

(和訳: 酒代が皆でいくらになりますか)

(35張表)

- ◆ 흥정홀줄모르니로형이사쥬시오 —

아기나이와시리마센가라아나다갓테구ㄴ다사레

(和訳: 商い知りませんからあなた買ってください)

(39張表)

⑤ 『簡易捷徑日語獨學』 (1897)

- ◆ コメノソウバハ イクラデスカ  
고메노소바와, 이구라테수가 — 찢시가가, 얼마요

(和訳: 米の相場はいくらですか) (p.95)

- ◆ 子ガアマリ タカイデス  
네카아마리, 다가이테수 — 갑시, 너무, 밋스오

(和訳: 値があまり高いです) (p.100)

- ◆ ワ タクシノミセハ カケウリワ シマセン  
와다구시노미시와, 가계우리와, 시마신 — 우리전방은, 외상은, 아니호오

(和訳: 私の店は掛売りはしません)

- ◆ ゲンキンデ オカイナサイ  
첸킨데, 어가이나사이 — 맞돈으로, 사시요

(和訳: 現金でお買いなさい) (p.103)

## ⑥ 『獨修自在日語捷徑』 (1905)

- ◆ ワ イクラ  
거래와, 이구라, 니테수마 — 이것슨, 얼마, 오닛가

(和訳: どれはいくらですか) (p.108)

- ◆ 서레니데와, 거너호오니, 셔오 — 그러면, 이것슬, 사갯다

(和訳: それではこのほうにしよう) (p.134)

- ◆ ○계즈마즈계이산ワ, 이즈니, 스투가子 — 월말셈은, 언제, 헐더인가

(和訳: 月末計算はいつにするかね) (p.215)

- ◆ 곤더ワ, 세이규으셔ヲ, 가이テ, クダサイ — 이번에는, 청구셔를, 써주시요

(和訳: 今度は請求書を書いてください) (p.220)

## ⑦ 『日語會話』 (1908)

- ◆ 셔-바이오, 하지메요도, 오모이마수

ショウバイ ハジメ オモ  
商賣ヲ始ヨウト思ヒマス

チャグサール シチャク ハリャコ ハムニダ  
장스를, 시작호라고힙니다

(p.40)

- ◆ 아다이가, 다가이나라, 가와레나이

アタイ タカイ カワ  
價ガ高ナラ、買レナイ

カブシ ビツサンヂク サルスオクタ  
갑시, 빚산즉, 살슈업다

(pp.63-64)

◆ 가계우리와, 시나이가라, 겐킨데, 갓데유가레요

カケウリ ゲンキン カツ ユカ  
掛賣ハ、シナイカラ、現金デ買テ行レヨ

オイサーグン アニチューニ マツトヌロ サーカーシヨ  
외상은, 아니주니, 맞돈으로, 사가시요

(p.117)

上記のように開化期の学習書には、商業活動における会話が多数見られており、中には、商業を奨励するような内容も記されている。

◆ 셔바이오, 욱스레바, 구니가, 도미마수 — 장사를 잘하면 부국이 됩니다

(和訳: 商売をよくすれば国が富みます) (『獨学』、p.108)

◆ 셔-바이오, 시데, 가네모지니, 나리마시다

ショウバイ カネモ  
商賣ヲシテ、金持ちニナリマシタ

チャンサハタカ ブチャテイヨツソ  
장스ㅎ다가, 부자되엿소

(『会話』、pp.111-112)

久保田(1996)では、日本語が朝鮮開化の手段から同化の手段へと転化していく過程を、日清戦争期から日韓併合に至るまでの教育雑誌や一般雑誌の記事・論説で朝鮮教育に関するものを取り上げ分析している。そこでは日本語の役割を開化・実利・同化に分けているが、「(日清戦争頃)日本語は朝鮮を「開化」する外国語とみなされていたのである。日本語の役割は、日清戦争が終結する頃は、開化面に加えて実利面も主張された」(p.4)と書いている。しかし、開化期の日本語学習書の内容からみると、韓国における日本語教育は、もっと早い時期に民間人の手によって始まり、開化面よりは実利面な役割が求められたと考えられる。

### 3.2 教育・開化を促求する内容

『日語捷徑』(1895)では、日本語が「朝鮮ノ文明ヲ啓道スルモノ」としており、『単語連語日話朝雋』(1895)でも両国語の相通により「利国勤화가断断為기리니」と書いていることなど、開化期の日本語学習書では、「日本語教育を通じ開化を遂げる」という目的があったと想定される。日本は、彼らが作った「開化＝富国強国」という公式と、富国強国に導く「開化」の手段は日本語に他ならないというメッセージを、学習書という媒介を使い、韓国人の日本語学習者に伝えたかったと考えられる。

#### ②『日語捷徑』(1895)

- ◆ ニホンゴ ケイゴ 日本語ノ、稽古モ、初メハ、ムヅカシウゴザリマス

일본말공부도처음에는어렵소이다

- ◆ シカシ、二三年、稽古ヲシマスレバ、ダンと、コとロヤスウナリマス  
그레도이삼년공부허면차と쉬워지と요 (p.53)

#### ④『単語連語日話朝雋』(1895)

- ◆ 일본말을잘통치못하오 — 닛본고도바와요구즈우지마셴

(和訳: 日本ことばはよく通じません)

셔로통치못하니답답하오 — 다○가이니즈우지마셴가라깡아모메마스

(和訳: 互に通じませんから気が揉めます) (48張裏)

- ◆ 일본말칙을민드러쵸선사름을가르치면쵸켓소 —

니혼고노혼위고시라예데쵸셴진니오시예다라바요로시우고자리마시오

(和訳: 日本語の本を拵えて朝鮮人に教えたならよろしゅうございましょう)

그러하면지화가츄츄되오리다 — 소오스레바가이과니ㄴ단ㄴ단나리마시오

(和訳: そうすれば開化に段々なりましょう) (48張表)

⑤ 『簡易捷徑日語獨學』 (1897)

- ◆ コトバガ ワカリマセンカラ コマリマス  
고도파카, 와가리마신가라, 고마리마수 — 말을, 모르니, 민망허오

(和訳: ことばが分かりませんから困ります)

- ◆ コレカラハ ニホンゴガ ヒツヨウデス  
고레가라와, 니혼코카, 히트요테수 — 이후는, 일본말이, 요긴허오

(和訳: これからは日本語が必要です) (p.74)

⑥ 『獨修自在日語捷徑』 (1905)

- ◆ 여호ㄴ더, 게이고, 시마센도, 하나시ㅇ가, ㄴ데기마센

만이, 공부허지안이흐면, 말을, 허지못허리다

(和訳: よほど稽古しませんと話が出来ません)

- ◆ 니흥고워, 시라누도, ㅇ고선ㄴ데수 — 일본말을머루면, 해러운일이만소

(和訳: 日本語を知らぬとご損です) (p.184)

- ◆ 시가시, 넷신니, ㄹ벤겨요, 스투ㄹ바, ㄴ데기누, 거더와, 아리마센

그러나, 전심, 공부허면, 안이될니는업슬더이요

(和訳: しかし、熱心に勉強をすればできぬことはありません) (p.186)

- ◆ ベンキョウ ヒト コオフク  
勉強스르, 人二ハ, 幸福アリ

공부허는, 스람에케는, 덕탁이있다 (p.240)

- ◆ オオイ ナ ヒト モット ツト  
大二, 爲サントス르, 人ハ, 最モ, ヨク, 勉メザルベカラズ

크기, 일을할야흐, 니는, 가장, 공부를하야흐깃소 (p.247)

- ◆ ショ ヨ アルヒ ジ カ カ ニホンゴ マナ  
書ヲ, 讀み, 或ハ, 字ヲ, 書キ, 且ツ, 日本語ヲ, 學バン

책을, 닐고, 혹은, 글즈를, 써고, 쫌논, 일본말을, 공부하라호오 (p.249)

⑦ 『日語會話』 (1908)

- ◆ 세신오, 이레테, 마납요으니, 나사이

セイ シン イ マナ ヨウ  
精神ヲ入レテ、學ブ様ニ、ナサイ

チヨグシンツ リヨ バイ ウケ ハー シ ヨ  
정신드려, 빅우게히시오

(p.85)

◆ 마나바렐나라, 작짓니, 마나바레마세

マナ チャクジツ マナ  
學バレルナラ、着實ニ、學バレマセ

ペーウコチヨハルチンデン チャクシリ ペーウシヨ  
빅우고져홀진딘, 착실이, 빅우시오

(p.99)

◆ 나니노, 계-고데모, 벤교, 세네바, 나리마센

ナニ ケイコ ベンキョウ  
何ノ稽古デモ、勉強セネバ、ナリマセン

アムコグプラト プーチュロンハヨヤハチヨ  
아무공부라도, 부즈런히여야히시오

(p.117)

◆ 마납도기와, 호가노고도오, 간가예차, 나라누

マナ トキ ホカ コト カンガ  
學ブ時ハ他ノ事ヲ 考ヘテハナラヌ

バイウルテイヌン タルンニール センガクチマラ  
빅울썌눈, 다른일을, 싱각치마라

(p.124)

『日語工夫』(1891)と『日本語獨案内』(1895)は、商業関係の例文と日常生活に使う平凡な文が多く、教育・開化に関わる内容は現れない。学習書の分量の面もあるだろうが、開化期日本語学習書において、日清戦争が終結した1895年を境目として、教育・開化に関わる内容が多くなる傾向が見られる。

『日語工夫』(1891)と『日本語獨案内』(1895)は、日常生活や商業に関わる表現が多いため、教育・開化に関する内容は見当たらないが、『日語捷徑』(1895)と『単語連語日話朝雋』(1895)には、その序文と本文に日本語を通じ開化を遂げるという考えを表しており、以降に発行された『簡易捷徑日語獨學』(1897)、『獨修自在日語捷徑』(1905)、『日語會話』(1908)でも教育の重要性を訴えている。

### 3.3 倫理に関わる内容

当時の学習書には、倫理に関わる例文が見られる。特に商業倫理に関わる例文と儒教的思想が窺える例文が多く見られる。開化期の日本語学習書は日本語教育の役割に加え、倫理教育の視野に入れていたと考えられるが、これは近代日本で強調されていた修身教育の影響であると考えられる。

#### ① 『日語工夫』 (1891)

- ◆ ス ナ マゼ ル ナ  
모래숫기기마라 — 스나오마절나

(和訳: 砂を混ぜるな) (p.17)

- ◆ チ キリ ト マ ス ハ  
저울과슈도는 — 디기리도마스와

(和訳: ちきりと升は)

- ◆ アザムカレルナ  
속기디마소 — 아자무가레르나

(和訳: 欺かれるな) (p.20)

#### ③ 『日本語獨案内』 (1895)

- ◆ オトナガ コドモヲ ウツガドウイウ ワケデスカ  
어도나가 거토머오 우둑가 티오유...(ママ)와게테수가 —

어른이어린놈을썩리니웬일이오

(和訳: 大人が子供を打つが、どういうわけですか)

- ◆ オトナヲ ハツカシメルカラ ソウスルノデス  
어도나오 흥두가시메루가라 서수루노테수 — 어른을욕하니그리오

(和訳: 大人を辱めるからそうするのです) (p.41)

#### ④ 『単語連語日話朝雋』 (1895)

- ◆ 욱호지마라 — 와루구지유우나(和訳: 悪口言うな) (34張表)

- ◆ 싸호지마라 — 겐콰스루나(和訳: 喧嘩するな) (37張表)

- ◆ 시비히지마시오 — 소오론시마스나又히난나사루나  
(和訳: 争論しますな又非難なざるな) (39張裏)

⑤ 『簡易捷徑日語獨學』 (1897)

- ◆ 셔바이와, 셔지기니, 시나계레바, 이계미(ママ)신 —  
장스는, 덩직케, 히여야, 올소  
(和訳: 商売は正直にしなければいけません)
- ◆ 신여가, 타이이지테수 — 미더미, 제일이요  
(和訳: 信用が第一です) (p.108)

⑥ 『獨修自在日語捷徑』 (1905)

- ◆ オン ウケ カナ ムク  
恩ヲ、受テワ、必ラズ、酬イヨ  
  
은혜를, 넘으면, 부디, 又버라 (p.241)
- ◆ イヤシク ヒト レイ ハナハ イヤシ  
苟モ、人トシテ、禮、ナキハ、甚ダ、賤ムベキモノナリ  
  
대테, 슴름이되여, 례가, 읍스면, 심히, 상놈이요 (p.248)

⑦ 『日語會話』 (1908)

- ◆ 히도와, 두네니, 진도워, 오고나와네바, 나리마센  
ヒト ツネ ジン ドウ オコナ  
人ハ常ニ人道ヲ行ワネバ、ナリマセン  
  
サーラムン サーゲ イン도르 헤그 하 요 야 올 슴니다  
사람은, 상의, 인도를, 히히여야, 올습니다 (p.188)
- ◆ 후보니, 두가예테, 고-고-슬노와, 고달모노노, 혼분테수  
フ ボ ツカヘ コウ コウ コ ホンブン  
父母ニ事テ孝行スルノハ、子タルモノハ、本分デス  
  
ブモルハ ソムギ코 히요드 헤그실러 하키멘 치 시어 케 폰 브어 니 요  
부모를, 섬기고, 효도히실히기논, 자식의, 본분이요 (p.191)

また『単語連語日話朝雋』(1895)と『日語會話』(1908)には、以下のように愛国に関わる内容が見られる。

◆ 나라를위하야죽어도관겨치아니하오 — 구니노다메신데모사시즈가예마셴  
(和訳: 国のため死んでも差し支えません) (『朝雋』、44張裏)

◆ 독립국되면빅성도평안하고나라도요부하오 —  
니도구리즈고구니나레바진민모라구니데구니모후교오니나라마스  
(和訳: 独立国になれば民も楽で国も富強になります) (『朝雋』、46張裏)

◆ 국가노, 다메니, 오주도메, 나사이  
コツカ タメ ツト  
国家の爲に、才勉メナサイ  
ナラル ウイハヨ ヒームル スーシヨ  
나라를, 위하여, 힘을, 쓰시요 (『會話』、p.168)

このような内容的特徴は、以下のように、開化期の韓国人著の日本語学習書でも見られる。

ワ クニ ドクリツケン クワンゼン クワイフク ミナサン セキニン イ ホカ シカタ  
我が国ノ独立権ヲ完全ニ恢復スルコトハ皆様ノ責任と云フ外仕方ガアリマセヌ<sup>85</sup>

【鄭雲復(1907)『獨習 日語正則』 p.122】

しかし、両学習書(日本人著・韓国人著)での「独立」は、その性格が異なっていると考えられる。

『朝雋』が出版された1895年6月は、日清戦争(1894年7月～1895年3月)の直後である。日清戦争に勝利した日本は、1895年4月17日に下関で日清講和条約<sup>86</sup>を結び、韓国の独

<sup>85</sup> 박성희(2005:42)は、開化期に民間人によって編纂された教科書の、国家と愛国心及び忠義など、民族的独立心を悟らせる内容の例文として、この文をあげている。

<sup>86</sup> 日清講和条約は、「清国は朝鮮国が完全無欠なる独立自主の国であることを確認し、独立自主を損害するような朝鮮国から清国に対する貢・献上・典礼等は永遠に廃止する」を第一条としている。

立を清に認めさせており、上記の『朝雋』での「独立」とは「清からの独立」を意味していると見られる。

一方で、『獨習 日語正則』が刊行された1907年は、日露戦争終結後の1905年11月17日に締結された第二次日韓協約により、韓国の外交権は日本に掌握されることとなり、事実上保護国となった時期である。従って『獨習 日語正則』でいう「独立」は、「日本からの独立」のことを指していると考えられる。

このように開化期の学習書は、同じ単語・文章であっても、時代的背景及び著者の性格によりその意味は異なっている。各々の日本語学習書は日本語学習のために作られたという点では一致しているものの、日本語教育を通じて得ようとするもの、即ち日本語教育の目的は、出版背景及び著者の価値観によって異なっていたと考えられる。

### 3.4 時代的背景がわかる内容

韓国開化期の日本語学習には、時代的背景を反映している例文が収録されている。日清戦争が終結した直後の1895年に発行された『日語捷徑』と『単語連語日話朝雋』の会話文には、以下のように戦争の様子や終戦の結果が窺える例文が見られる。

#### ②『日語捷徑』(1895)

- ◆ ニチシンセンソウ 日清戦争ハ、ドウナリマシタカ — 엇덧케뵈슴닛가
- ◆ ワシン 和親ニナリマシタ — 화친이되엿슴니다 (p.81)
- ◆ ヤクソク ナ ドウ云フ約束か成り立チマシタカ — 엇던약조가되엿슴닛가
- ◆ シンコク タイワン シヤウキン 清國ハ臺灣ト償金トヲ 出スコトニナリマシタ  
청국이티완과상금을일본에줄약조가되엿슴니다 (p.82)<sup>87</sup>

<sup>87</sup> 日清講和条約清国の第二条と第三条では、「遼東半島、台湾、澎湖諸島など付屬諸島嶼の主權ならびに該地方にある城堡、兵器製造所及び官有物を永遠に日本に割与する」としている。

④ 『単語連語日話朝雋』 (1895)

◆ 대포소릭느니싸호나보외다 —

대호오노오동아스루가라이구사데오루도오모이마스

(和訳: 大砲の音がするから戦でおおと思います)

(40張裏)

◆ 덕국이 패하얏소 — 데기고구ㅇ가 마계마시다

(和訳: 敵国が負けました)

(42張裏)

◆ 나라이위턱하게되얏소 — 구니ㅇ가아부나구나리마시다

(和訳: 国が危なくなりました)

(44張表)

1908年に発行された『日語會話』には、当時全国に拡大されていた義兵運動について言及されている。それ以前に国難報復のために行われていた義兵運動は、日露戦争後の1904年の第1次日韓協約、1905年の第2次日韓協約を契機として国権回復という目的でその勢いが高まっており、反日的な性格で広がっていたが、その様子が学習書に反映されている。

⑦ 『日語會話』 (1908)

◆ 기혜-가, 오소로식데, 쥬-워, 모지마와리, 마수

ギヘー オソロ ジウ モ  
義兵ガ 恐 シクテ、銃ヲ持チマワリマス

ウイビョーギ ムソブキルレ チョクカ チコ タンギオ  
의병이, 무섭길네, 총가지고, 단기오

(pp.141-142)

## 第4節 まとめ

本章では開化期に日本人により著された日本語学習書の語彙を話題別に分類し、会話文を取り上げ、内容別にまとめた。

以上で見たように開化期の学習書には語彙において「日常生活」、「自然」、「数

量」といった機能的・思想的な面よりは、数量関係や時間を表す語彙が多く見られた。

会話文においては「商業に関連した内容」が多く見られる。前章で述べたように開化期は、韓国と日本との貿易・商業活動が活発になる時期であった。このような背景の中、学習書の著者は、両国の言語習得が必要とされていた商人たちを読者として想定したのであろう。また上記の学習書には、「教育・開化の促求する内容」と「倫理に関わる内容」が載せられており、当時の著者は「言語教育を通じた開化」そして、「言語教育を通じた修身教育」といった第二の目的も、念頭に入れていたと考えられる。

開化期の学習書には当時の「時代的背景がわかる内容」が見られ、開化期の歴史事件が反映されている。

開化期の日本語教育の役割は、「開化・実利」から「同化の手段」に変わったとされており<sup>88</sup>、統監府期に学部で出版された教科書である『日語読本』には、韓国に対する否定的なイメージを強調したり、日本の勢力を誇示する内容を中心として韓国人を同化させようとした意図を前面に現していた<sup>89</sup>。しかし、開化期の日本人著の日本語学習書では、上記の「同化の手段」としての意図が現れているとは言い難い。

開化期の日本人による日本語学習書は商業出版物であり、第一読者は商業に携わっている韓国人であった。学校で日本語教育を受けられない状況の読者は、商業に役に立つ独学用の実用書を求めており、学習書の著者は一冊でも多く売りたいという営利的利益を求めていたはずである。このような状況で日本語学習書の著者は、韓国に対する否定的なイメージなど、韓国人にとって気に障る内容はあえて入れなかったと考えられる。

---

<sup>88</sup> 久保田(1996) 「朝鮮に対する日本語教育論の展開」 p.12

<sup>89</sup> 박성희(2005) 『개화기의 일본어 교과서에 관한 연구』 p.52

## 第7章 結論

## 第7章 結論

本研究では、近代韓国における日本語教育の始まりという点に焦点をあて、日本語教育機関と日本語教師及び日本語学習書について、先行研究で明らかにされなかった事項を中心に、一次資料の分析に基づき考察した。

第2章では、韓国における日本語教育史に関する先行研究を検討し、時代別の日本語教育の流れについて概観した。韓国における日本語教育は、1414年、朝鮮中央政府の司訳院において外交事務に必要な通訳、翻訳の仕事と訳官の養成を目的として始まったとされており、近代の開化期に入ってから、官公立学校と私立学校のほかに「日語学堂」(1891年設立)を始めとする開化期独特の学校形態である「日語学校」が日本語教育を担当していたことを記した。

第3章では、近代韓国における最初の日本語教育機関である「日語学堂」の設立時期と設立地域について、従来の研究において未調査であったソウル大学奎章閣韓国学研究院所蔵の『統理交渉通商事務衙門日記』、『統椽日記』、『仁川港関草』、『日本語学校教師雇傭契約書』等の一次資料に基づき考察した。その考察から、「日語学堂」が西暦「1891年7月25日」に「漢城府南部薰陶坊鑄字洞契鑄字洞」に設立されたことを主張した。

第4章では、「日語学堂」の初代教官、即ち近代韓国における最初の日本語教育者である岡倉由三郎の日本語教授法ならびに、彼の韓国語研究と日本語教育との関連性を明らかにすることを試みた。その考察から、岡倉が韓国での日本語教授において、伝統的な文法訳読法に対して新しく起こったオレンドルフ教授法を明確に認識・実践したことを検証した。また、教師が学習者の母語を十分に理解していることが前提となるオレンドルフ教授法を用いたのは、岡倉の韓国語に対する深い理解、およびハンブルに対する高い評価によるものであり、韓国語また岡倉に韓国語を教授したチェンバレンとの出会いが、日本語教育者としての岡倉を生み出した要因であったことを論じた。

第5章では、開化期における日本語学習書について、従来の研究では全体像が把握されておらず、部分的・個別的に分析がなされてきた開化期日本人著の日本語学習書7種を時代順に概観し、文献学的検討を行い、日本人による日本語学習書の全体像を把握するとともに、開化期前期における日本語学習書の発行状況を明らかにした。

第6章では、開化期日本人による日本語学習書の内容的特徴について考察し、開化期における日本語学習書は、商業活動、即ち生計のため独学用の実用書である日本語学習書を求めていた読者と、営利的利益を求めていた著者の目的が相まって生まれた商業出版物であったことを論じた。

韓国開化期における日本語教育については、韓国植民地化の過程として考えられる傾向が多かったが、本研究の考察から見ると、韓国開化期で行われた日本語教育は、教育時期と教育主体、また韓国人の日本語に対する態度などによりその目的が異なっており、近世言語教育の影響も見られるなど、複雑な様相であることが分かった。

近代韓国の日本語教育機関における日本語教育は、官立主導によって首都圏からスタートしており、岡倉由三郎といった日本人が初代教官を務めるなど日本側の働きが多かったが、その学習については韓国人の選択によるものであった。

一方で、韓国開化期の日本語学習書による日本語教育は、日本人により作成され、韓国人によって学習されたという点では「日語学校」の性格と同様であるが、その成立においては民間人の主導により、開港地から始まっていることが注目される。

開化期の日本語学習書の著者についての調査からは、中野許多郎、金島苔水が通詞出身であること、弓場重栄と島井浩が日本対馬の朝鮮通詞養成機関を嚆矢とする釜山朝鮮語学所で韓国語を学んでいたことが確認できた。また、弓場重栄、金島苔水・広野韓山、島井浩は韓国語学習書に携わった経験を活かして日本語学習書を発行したことが分かった。当時の韓国における日本語教育と日本における韓国語教育の深い関連が窺えるところであり、日本語教育と韓国語教育の連関性は、近代韓国における最初の日本語教師である岡倉由三郎の日本語教育においても見られる特徴である。

以上の考察から韓国近代における日本語教育の始まりは、近代に生まれた帝国主義の「支配のための教育」ではなく、まずは近世からあった両国の言語教育の延長線上

にあるものと見るのが妥当であると考えられる。また、開港・近代化といった時代的背景から考えても、当時の日本語教育は実利的目的により必然的に生まれたと見られる

韓国開化期における日本語教育については、韓国植民地化の過程として考えられ、外国語教育としての評価はあまり行なわれていなかった。しかし、近代韓国で行われた日本語教育をはじめとする諸外国語教育に関する研究は、近代韓国を理解する重要な端緒となるだけに、より多角的な観点からの考察が必要であると考えられる。

## 【参考文献】

<日本語文献（あいうえお順）>

- 相原由美子(1976)「バジル・ホール・チェンバレンの手紙—岡倉由三郎宛」『学苑』第436号 pp.216-227 昭和女子大学近代文化研究所
- 李光麟(1973)「旧韓末の官立外国語学校」『韓』第2巻第9号 pp.91-123 東京韓国教育院
- 李光麟著・平木実訳(1995)「韓国開化期の諸問題」『朝鮮学報』第154輯 pp.1-14 朝鮮学会
- 李淑子(1975)「日本統治下朝鮮における日本語教育--朝鮮教育令との関連において」『朝鮮学報』第75輯 pp.97-114 朝鮮学会
- \_\_\_\_\_ (1985)『教科書に描かれた朝鮮と日本：朝鮮における初等教科書の推移 1895-1979』ほるぷ出版
- イ・ヨンスク(1996)『国語という思想：近代日本の言語認識』岩波書店（韓国語版：『국어라는 사상：근대 일본의 언어 인식』(2006) 소명출판)
- 稲葉継雄(1979)「韓末教育の構造：言語教育を中心として」『韓』通巻第85号 pp.314-339 東京韓国教育院
- \_\_\_\_\_ (1982)『旧韓国の教育近代化と日本人の役割』昭和56年筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書
- \_\_\_\_\_ (1985a)「光州実業学校について：旧韓末「日語学校」の一事」『外国語教育論集』第7号 pp.105-134 筑波大学
- \_\_\_\_\_ (1985b)『東亜同文会の韓国における教育活動』昭和59年筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書
- \_\_\_\_\_ (1985c)「韓南学堂について：旧韓末「日語学校」の一事」『文藝言語研究』言語篇10 pp.79-98 筑波大学文芸・言語学系
- \_\_\_\_\_ (1986a)『大日本海外教育会の旧韓国における教育活動』昭和60年筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書

- \_\_\_\_\_ (1986b) 「釜山開成学校について：旧韓末「日語学校」の一事」 『筑波大学地域研究』 4 pp.71-94 筑波大学地域研究研究科
- \_\_\_\_\_ (1986c) 「官立漢城外国語学校について：日語学校を中心に」 『韓』 通巻第103号 pp.133-182 東京韓国教育院
- \_\_\_\_\_ (1986d) 「京城学堂について：旧韓末「日語学校」の一事」 『日本の教育史学：教育史学会紀要』 29集 pp.76-94 教育史学会
- \_\_\_\_\_ (1986e) 「韓国における日本語教育史」 『日本語教育』 60号 pp.136-148 日本語教育学会
- \_\_\_\_\_ (1987a) 「仁川日語学校について：旧韓末「日語学校」の一事例」 『文藝言語研究』 言語篇11 pp.137-155 筑波大学文芸・言語学系
- \_\_\_\_\_ (1987b) 「東本願寺の旧韓国における教育活動」 『筑波大学地域研究』 5号 pp.53-70 筑波大学地域研究研究科
- \_\_\_\_\_ (1988a) 「鮎貝房之進・与謝野鉄幹と乙未義塾」 『韓』 通巻第109号 pp.148-170 東京・韓国教育院
- \_\_\_\_\_ (1988b) 「旧韓国「日語学校」の日本語教師—その代表的な事例—」 『国立教育研究所紀要』 第115号 pp.147-165 国立教育研究所
- \_\_\_\_\_ (1989a) 「源興学校について：旧韓末「日語学校」の一事例」 『文藝言語研究』 言語篇15 pp.87-98 筑波大学文芸・言語学系
- \_\_\_\_\_ (1989b) 「日語錦城学堂について：旧韓末「日語学校」の一事例」 『外国語教育論集』 第11号 pp.297-312 筑波大学外国語センター
- \_\_\_\_\_ (1989c) 「一進会の教育活動」 『筑波大学地域研究』 7号 pp.85-102 筑波大学大学院地域研究科
- \_\_\_\_\_ (1989d) 「浄土宗の旧韓国における教育活動：日本語教育を中心として」 『文藝言語研究』 言語篇 16 pp.67-77 筑波大学文芸・言語学系
- \_\_\_\_\_ (1990a) 「旧韓末の日語学校(補遺)」 『文藝言語研究』 言語篇 17 pp.99-132 筑波大学文芸・言語学系

- \_\_\_\_\_ (1990b) 「旧韓末「日語学校」の諸特徴」 『筑波大学地域研究』 8 pp.63-84  
筑波大学大学院地域研究科
- \_\_\_\_\_ (1990c) 「旧韓末の私立学校における日本語教育」 『文藝言語研究』 言語篇 18  
pp.79-112 筑波大学文芸・言語学系
- \_\_\_\_\_ (1992a) 「旧韓国の日本語教育」 『筑波大学地域研究』 10号 pp.33-56 筑波  
大学大学院地域研究科
- \_\_\_\_\_ (1993) 「旧韓国官公立普通学校の日本人教員：教員人事を中心として」 『筑  
波大学地域研究』 11号 pp.1-24 筑波大学大学院地域研究科
- \_\_\_\_\_ (1996) 「旧韓末の「日語学校」：事例研究から全体像へ」 『アジア教育史研  
究』 5 pp.1-14 アジア教育史学会
- \_\_\_\_\_ (1997) 『旧韓末「日語学校」の研究』 九州大学出版会
- 井上薫(1991) 「韓国統監府設置前後の公立普通学校体制形成と日本語普及政策」 『日  
本の教育史学：教育史学会紀要』 第34号 pp.156-168 教育史学会
- \_\_\_\_\_ (1992) 「日本帝国主義の朝鮮における植民地教育体制形成と日本語普及政策：  
韓国統監府時代の日本語教育を通じた官吏登用と日本人配置」 『北海道大学教  
育学部紀要』 第58号 pp.163-195 北海道大学
- 岩上はる子(2013) 「「英文學叢書」と岡倉由三郎：日本の英文学受容について」 『英  
学史研究』 第46号 pp.29-50 日本英学史学会
- 岩橋小彌太(1918) 「徳川時代学者の朝鮮の文字に関する知識 上・中・下」 『歴史地理』  
上：第32巻3号 pp.32-40 1918年8月、中：同巻4号 pp.28-34 同年9月、  
下：同巻5号 pp.44-52 同年10月 日本歴史地理学会
- 上田万年(1934) 「国語学の草創期」 『国語と国文学』 第11巻8号 pp.3-10 至文堂
- 植田晃次他(2006) 『朝鮮語教育史人物情報資料集』 科学研究費補助金(17320085)報告書  
(1)
- \_\_\_\_\_ (2007) 『日本近現代朝鮮語教育史』 科学研究費補助金(17320085)研究成果報  
告書
- 植田晃次(2010) 「朝鮮語研究会(李完応会長・伊藤韓堂主幹)の活動と民間団体としての

- 性格」『言語文化研究』36号 pp.25-44 大阪大学大学院言語文化研究科
- \_\_\_\_\_ (2011)「薬師寺知嚨：別府地獄めぐりと朝鮮語をつなぐ人」『言語文化研究』  
37号 pp.1-19 大阪大学大学院言語文化研究科
- \_\_\_\_\_ (2013a)「伊藤伊吉の経歴と著書：日本近代朝鮮語教育史の視点から」『言語  
文化研究』39号 pp.11-29 大阪大学大学院言語文化研究科
- \_\_\_\_\_ (2013b)「朝鮮総督府『朝鮮語辞典』の書誌学的研究」『大阪大学言語文化学』  
第22号 pp.95-104 大阪大学言語文化学会
- \_\_\_\_\_ (2013c)「島井浩の経歴と著書—日本近代朝鮮語教育史の視点から」第64回朝  
鮮学会研究発表資料
- \_\_\_\_\_ (2014a)「金島苔水とその著書—日本近代朝鮮語教育史の視点からみた商業出  
版物としての朝鮮語学習書—」『日本語文化研究』第3輯 上 pp.63-72  
延边大学出版社
- \_\_\_\_\_ (2014b)「近代日本人と異文化としての朝鮮語との接触—日本近代朝鮮語教育  
史試考」第65回朝鮮学会研究発表資料
- 上田崇仁(2000)『植民地朝鮮における言語政策と「国語」普及に関する研究』広島大  
学博士学位論文
- \_\_\_\_\_ (2011)「植民地朝鮮における「国語」読本の変遷」『広島女子大学国際文化  
学部紀要』(9) pp.35-46 県立広島女子大学
- 内丸公平(2013)「岡倉由三郎の英文学研究とその「教育的」背景」『桐朋学園大学研  
究紀要』第39巻 pp.65-85 桐朋学園大学
- \_\_\_\_\_ (2014)「新事物を教ふるに當りては必ず既に知れる事物と比較し：岡倉由三  
郎「外国語教授新論」に於ける英語教授法とその教育的背景」『国学院大学紀要』  
第52巻 pp.57-80 国学院大学紀要
- 梅田博之(2007)「日本における朝鮮語研究の流れ」『日本語と外国語との対照研究  
IV：日本語と朝鮮語』上巻 pp.1-7 国立国語研究所
- \_\_\_\_\_ (2013)「廣池千九郎博士の「吏道」研究」『言語と文明』第11巻 pp.1-22  
麗澤大学大学院言語教育研究科

- 遠藤智夫(2002)「荒川惣兵衛の外来語研究:英語・英学人脈を中心に」『英学史研究』  
第35号 pp.17-30 日本英学史学会
- 岡倉由三郎(1892)『比較博言学：一名・日本語学一斑』明治義会  
\_\_\_\_\_ (1893a)「朝鮮の文学」『哲学雑誌』第8巻74号 pp.843-849 1893年4月、  
同巻75号 pp.1038-1052 同年5月 有斐閣
- \_\_\_\_\_ (1893b)「吏道・諺文考」『東洋学芸雑誌』第10巻143号 pp.432-438 1893  
年8月、同巻144号 pp.491-497 同年9月 東洋学芸社
- \_\_\_\_\_ (1893c)「字音考」『東洋学芸雑誌』第10巻145号 pp.528-538 東洋学芸社
- \_\_\_\_\_ (1893d)「東洋博言学研究の必要」『東京人類学会雑誌』第93号 pp.88-95  
東京人類学会
- \_\_\_\_\_ (1894a)「朝鮮国民教育新案」『東邦協会会報』第2号附録 pp.1-12 東邦  
協会
- \_\_\_\_\_ (1894b)「朝鮮の教育制度を如何すべき」『教育時論』第338号 pp.23-24  
開発社
- \_\_\_\_\_ (1894c)「外国語教授新論・附国語漢文の教授要項」『教育時論』第338-340  
号附録 pp.1-49 開発社
- \_\_\_\_\_ (1895)「朝鮮の墳墓」『東京人類学会雑誌』第106号 pp.134-135 東京人  
類学会
- \_\_\_\_\_ (1897)「為古吐考」『帝国文学』第3巻4号 pp.378-394 大日本圖書
- \_\_\_\_\_ (1900)「主格を示す本来の辞」『帝国文学』6巻2号 pp.152-162 大日本圖  
書
- \_\_\_\_\_ (1916)「琉球の読者に」『英語青年』第36巻2号 pp.62 英語青年社
- \_\_\_\_\_ (1935a)「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」『英語青年』第73巻2号 pp.39-  
42 英語青年社
- \_\_\_\_\_ (1935b)「恩師チャムブレン先生を憶ぶ」『国語と国文学』第12巻4号  
pp.192-194 英語青年社
- 櫻坂英子編(2007)『韓国における日本語教育』三元社

- 小倉進平(1928)「朝鮮語の toin-siot」『岡倉先生記念論文集』 pp.309-317 岡倉先生  
還暦祝賀会
- 小倉進平・河野六郎(1940[増訂]・1964[増訂・補註])『増訂・補註朝鮮語学史』刀江書院
- 梶井陟(1973)「植民地統治下の日本人の朝鮮語学習書」『朝鮮歴史論集』下巻  
pp.557-590 竜溪書社
- 金沢朱美(2006)「オレンドルフ教授法の受容の考察ー井上勤ならびに岡倉由三郎の受  
容を中心に」『目白大学人文学研究』第3号 pp.149-161 目白大学
- \_\_\_\_\_ (2007)「岡倉由三郎におけるオレンドルフ教授法の受容の考察」『日本語と  
日本文学』第44号 pp.1-12 筑波大学国語国文学会
- 河先俊子(2003)「植民地解放後の韓国における日本語教育再開に関する一考察」『ア  
メリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』第26号 pp.3-24 アメリカ・カ  
ナダ大学連合日本研究センター
- \_\_\_\_\_ (2003)「韓国における日本語教育史研究の概観」『言語文化と日本語教育』  
増刊特集号 pp.178-197 日本言語文化学会
- \_\_\_\_\_ (2013)『韓国における日本語教育必要論の史的展開』ひつじ書房
- 姜信沆・梅田博之 (1993)『ハングルの成立と歴史：訓民正音はどう創られたか』大修  
館書店
- 金義泳(2006)「韓国の開化期における日本語学習書の「会話」の文型：授受・条件・受  
身・使役を中心に」『早稲田大学日本語教育研究』第8号 pp.23-35 早稲田大  
学大学院日本語教育研究科
- \_\_\_\_\_ (2007)「開化期の日本語学習書に関する考察：「会話」を中心に」『日本文化  
研究』第22輯 pp.299-314 東アジア日本学会
- \_\_\_\_\_ (2012)「韓国の日本語教科書に関する研究：高等学校の教科書にみる日本観を  
中心に」早稲田大学大学院博士学位論文
- 楠家重敏(1986)『ネズミはまだ生きている：チェンバレンの伝記』雄松堂
- \_\_\_\_\_ (2005a)『W. G. アストン：日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』雄松堂
- \_\_\_\_\_ (2005b)『日本アジア協会の研究：ジャパノロジーことはじめ』近代文芸社

- 久保田優子(1993)「韓国における日本語教育政策の展開－保護時代から第一次朝鮮教育」『比較教育文化研究施設紀要』第44号 九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設
- \_\_\_\_\_ (1996)「朝鮮に対する日本語教育論の展開」『九州産業大学国際文化学部紀要』第6号 pp.1-17 九州産業大学
- \_\_\_\_\_ (2004)「第一次朝鮮教育令期の国語教科書における「同化」の概念」『九州産業大学国際文化学部紀要』第27号 pp.1-27 九州産業大学
- \_\_\_\_\_ (2005)『植民地朝鮮の日本語教育：日本語による「同化」教育の成立過程』九州大学出版会
- \_\_\_\_\_ (2013)「植民地末期朝鮮の国語(日本語)教育に対する国語認識」『九州産業大学国際文化学部紀要』第54号 pp.125-135 九州産業大学国際文化学会
- 栗原銀藏編(1896)「朝鮮教育上に於ける列国の勢力」『教育時論』第414号 pp.28-29 開発社
- 国際交流基金(2013)『海外の日本語教育の現状－2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版
- 桜井義之(1941)『明治年間朝鮮研究文献誌』書物同好会
- \_\_\_\_\_ (1956)「宝迫繁勝の朝鮮語学書について」『朝鮮学報』第9輯 pp.455-465 朝鮮学会
- \_\_\_\_\_ (1974)「日本人の朝鮮語学研究〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕」『韓』〔Ⅰ〕：第3巻第8号 pp.107-131 1974年8月、〔Ⅱ〕：同巻第9号 pp.83-108 同年8月、〔Ⅲ〕：同巻第12号 pp.107-129 同年12月 東京韓国教育院
- \_\_\_\_\_ (1976)「官立仁川日語学校について」『朝鮮学報』第81輯 pp.155-167 朝鮮学会
- \_\_\_\_\_ (1979)『朝鮮研究文献誌』龍溪書舎
- 齋藤一(2001)「翻案と翻訳：岡倉由三郎について」『帯大人文社会科学論集』10(4) pp.1-15 帯広畜産大学

- 佐藤喜之(2004a)「博言学事始め：明治・大正の言語学 その1」『学苑』第762号  
pp.58-69 昭和女子大学近代文化研究所
- \_\_\_\_\_ (2004b)「上田万年とその周辺：明治・大正の言語学 その2」『学苑』第769  
号 pp.57-65 昭和女子大学近代文化研究所
- \_\_\_\_\_ (2005)「初期の博言学科卒業生：明治・大正の言語学 その3」『学苑』第775  
号 pp.37-46 昭和女子大学近代文化研究所
- 白井順(2013)「書簡を通して見た前間恭作と小倉進平の交流」『東洋文化研究』 pp.1-  
31 学習院大学
- \_\_\_\_\_ (2015)『前間恭作の学問と生涯』風響社
- 白鳥庫吉(1897)「吏道」『史学雑誌』第8編1号 pp.98-108 史学会
- 昭和女子大学近代文化研究室編(1973、1975)『近代文学研究叢書』第 38 卷(1973)、第  
41 卷(1975) 昭和女子大学近代文化研究所
- 新村出編(1998)『広辞苑』第6版普通版 岩波書店
- 陳南澤(2003)『朝鮮資料による日本語と韓国語の音韻史研究』東京大学博士学位論文
- 朱秀雄(1985)「韓国における日本語教育に関する研究(1)－開化期の日本語教育」『京  
畿大学大学院論文集』第 17 号 pp.273-302 京畿大学校研究交流処
- \_\_\_\_\_ (1986a)「韓国における日本語教育に関する研究(2)」『京畿大学大学院論文集』  
第 18 号 pp.125-160 京畿大学校研究交流処
- \_\_\_\_\_ (1986b)「韓国における日本語教育に関する研究(3)－日帝時代の日本語教育 (1)」  
『京畿大学大学院論文集』第 19 号 pp. 271-292 京畿大学校研究交流処
- \_\_\_\_\_ (1987)「韓国における日本語教育に関する研究(3)－日帝時代の日本語教育 (2)」  
『京畿大学大学院論文集』第 20 号 pp. 271-292 京畿大学校研究交流処
- \_\_\_\_\_ (1988)「韓国における日本語教育に関する研究(3)－日帝時代の日本語教育 (3)」  
『京畿大学大学院論文集』第 22 号 pp. 117-147 京畿大学校研究交流処
- \_\_\_\_\_ (1989)「開化期の韓国における日本語教育に関する一研究」『日本の教育史学』  
第32集 pp.124-142 教育史学会

- 鄭光(2007)「韓国における日本語教育の歴史」『日本文化研究』第21輯 pp.315-333  
東アジア日本学会
- \_\_\_\_\_(2013)「草創期における倭学書の資料について」『日本文化研究』第48輯  
pp.369-394 東アジア日本学会
- 鄭承喆(2009)「小倉進平の生涯と学問」『2009年度 東京大学コリア・コロキウム  
講演記録』pp.17-32 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室
- 世界教育史研究会編(1975)『世界教育史大系 5 朝鮮教育史』講談社
- 末松保和(1957)「前間先生小伝」『古鮮冊譜(前間恭作著)』附録 東洋文庫(『著作  
集』下 p.568、『青丘史草第二』(1966)、p.374に再録)
- \_\_\_\_\_(1970)『朝鮮研究文献目録』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センタ  
ー刊行委員会
- 鈴木信仁(1894)『朝鮮紀聞』博文館
- 孫于正(1998)「日語学校における韓国近代学校の構想」『東京大学大学院教育学研究  
科紀要』第38号 pp.297-305 東京大学
- 成琬珂(2008)「近代日本語資料としての『日韓韓日新会話』」『日本語学論集』第4  
号 pp.37-57 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- \_\_\_\_\_(2014)「開化期の日本語学習書『獨學日語會話』に関する考察」『日本語教育  
研究』第28輯 pp.65~84 韓国日本語教育学会
- 田中寛(2015)『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相：日本言語文化政策論序  
説』ひつじ書房
- 寺西武夫(1937)「岡倉先生略伝」『英語青年』76巻8号 pp.257-258
- 東京大学百年史編集委員会編(1986)『東京大学百年史 部局史1』東京大学出版会
- 東京外国語大学史編纂委員会編(2000)『東京外国語大学史』東京外国語大学出版会
- 芳賀登編(2001)『朝鮮在住内地人実業家人名辞典：第一編』(『日本人物情報大系』第  
72巻) 皓星社
- 羽生田留彌編(1894)「岡倉由三郎氏の語学教授論」『教育時論』第340号 p.13 開発  
社

- 東博通(2014)「帝大撰科時代の岡倉由三郎」『日本英語教育史研究』第29巻 pp.1-20  
日本英語教育史学会事務局
- 農商務省山林局(1905)『韓国史』東京書院
- 野間秀樹(2010)『ハンダルの誕生：音から文字を創る』平凡社（韓国語版：『한글의 탄생—<문자>라는 기적』(2011) 돌베게)
- 平高史也・関正昭編(1997)『日本語教育史』アルク
- 平賀優子(2005)「文法・訳読式教授法」の定義再考『日本英語教育史研究』第20巻 pp.7-26 日本英語教育史学会事務局
- 平田諭治(1999)「〔論説〕日露戦争期の<日本>イメージ考—岡倉由三郎『ザ・ジャパニーズ・スピリット』をめぐって」『歴史科学と教育』(18) pp.1-20 歴史科学と教育研究会
- \_\_\_\_\_ (2008)「岡倉由三郎The Life and Thought of Japan考」『英学史研究』第41号 pp.13-31 日本英学史学会
- \_\_\_\_\_ (2009)「岡倉由三郎のThe Life and Thought of Japanはいかに読まれたか—発信された「日本」と帝国主義世界—」『英学史研究』第42号 pp.62-86 日本英学史学会
- \_\_\_\_\_ (2014)「「美術使節」としての岡倉由三郎—1930年代初めの「日本」の語りについて—」『英学史研究』第47号 pp.1-18 日本英学史学会
- ひろた・まさき(2015)「岡倉由三郎と言語と帝国主義」『日本教育史研究』第34号 pp.29-36 日本教育史研究会
- 黄雲(2010)「日本語教師ならびに朝鮮語研究者としての岡倉由三郎—その諺文観と教授法をめぐって—」第63回朝鮮学会研究発表資料
- \_\_\_\_\_ (2011)「日本語教育者ならびに朝鮮語研究者としての岡倉由三郎—旧韓末「日語学堂」における日本語教授法をめぐって—」『言語と文明』第9巻 pp.55-68 麗澤大学大学院言語教育研究科（『日本語学論説資料』第48号 第1分冊、論説資料保存会、2013に再録、pp.243-248)
- \_\_\_\_\_ (2012)「旧韓末官立「日語学堂」の設立時期と地域に関する研究—原物資料の考

察を中心に―」第63回朝鮮学会研究発表資料

\_\_\_\_\_(2013)「旧韓末「日語学堂」の設立時期と地域に関する研究―一次史料の考察を中心に―」『日本語教育』64巻 pp.81-90 韓国日本語教育学会

\_\_\_\_\_(2014)「開化期日本語学習書に関する考察」『韓国日本語文学会学術発表大会論文集：韓国日本研究総連合会 第3回国際学術大会及びSymposium』pp.89-93 韓国日本語文学会

\_\_\_\_\_(2015)「開化期日本語学習書『日語工夫』(1891)に関する考察」『韓国日本語文学会学術発表大会論文集：韓国日本研究総連合会 第4回国際学術大会及びSymposium』pp.58-61 韓国日本語文学会

藤本幸夫(2007a)「朝鮮語の史的研究」『日本語と外国語との対照研究IV：日本語と朝鮮語』上巻 pp.65-80 国立国語研究所

\_\_\_\_\_ (2007b)「朝鮮の文字文化」『月刊言語』Vol.36 No.10 pp.72-79 大修館書店

堀川貫司(1992)「チェンバレン帝大教師時代の資料」『汲古』第21号 pp.16-22 汲古書院

榎木貴之(2010)「国語教育と英語教育の連携前史：明治期・岡倉由三郎「外国語教授新論」を中心に」『言語情報科学』第8号 pp.58-61 東京大学言語情報科学研究会

松村明編(1999)『大辞林』三省堂

宮川敏春(2000)「岡倉由三郎の朝鮮教育論に関する一考察」『学校教育論集』4巻 pp.36-40 筑波大学教育学系朴研究室

村岡博(1928)「岡倉由三郎先生略伝」『岡倉先生記念論文集』pp.397-404 岡倉先生還暦祝賀会

森田芳夫(1982)「韓国における日本語教育の歴史」『日本語教育』48号 pp.1-13 日本語教育学会

\_\_\_\_\_ (1987)『韓国における国語・国史教育』原書房

\_\_\_\_\_ (1991)「戦前朝鮮における日本語教育」『講座日本語と日本語教育』15巻

pp.109-126 明治書院

安田敏朗(1999) 『「言語」の構築—小倉進平と植民地朝鮮』 三元社

\_\_\_\_\_ (2005) 「帝国大学言語学の射程」 『立命館言語文化研究』 16巻3号 pp.101-

111 立命館大学国際言語文化研究所

山田寛人(1998) 「植民地朝鮮の普通学校教育における朝鮮語の位置づけ」 『日本の教育

育史学：教育史学会紀要』 第41号 pp.134-151 教育史学会

\_\_\_\_\_ (2004) 『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策：朝鮮語を学んだ日本人』 不二

出版

陸英恵(2003) 「旧韓末の日本語教育機関に関する考察」 『日本語教育研究』 第4輯

pp.63-83 高麗大学校教育大学院同門日本語教育研究会

尹健次(1982) 『朝鮮近代教育の思想と運動』 東京大学出版会

尹秀安(2005) 「帝国日本と英語教育：岡倉由三郎を中心に」 『日本の教育史学：教育

史学会紀要』 第48号 pp.39-49 教育史学会

\_\_\_\_\_ (2011) 『帝国日本と英語・英文学教育』 京都大学大学院 博士学位論文

吉岡英幸(1997) 「岡倉由三郎と日本語教育」 『講座日本語教育』 第32分冊 pp.98-111

早稲田大学日本語研究教育センター

渡辺学(1973) 「韓国教育における二言語主義：日語の特殊歴史相のもつ重層構造」

『韓』 第2巻9号 pp.57-89 韓国研究院

#### <韓国語文献>

김대래(2009) 「이주와 지배 : 개항이후 부산거주 일본인에 관한 연구(1876-1910)」

『경제연구』 Vol.27 No.1 pp.141-169 한국경제통상학회

김대래외(2014) 「개항기 일본인의 여행기에 나타난 조선인식」 『역사와 경계』 제

93집 pp.65-99 경남사학회

김민수(1956) 「국문정리」 『한글』 통권117집 pp.45-53 한글학회

박성희(2005) 『일본어 교과서에 관한 연구』 고려대학교대학원

\_\_\_\_\_ (2006) 「개화기의 일본어 교과서에 관한 연구」 『일본연구』 제5집 pp.7-20

고려대학교 일본연구센터

서울특별시 시사편찬위원회편집부(2009) 『서울시 지명사전』 서울특별시 시사편찬위원회

주요역사연구회편(2005) 『일제의 식민지 지배정책과 매일신보 : 1910년대』 두리미디어

와타나베·다카코(2002) 『훈민정음 연구사 : 일본인 학자들의 연구를 중심으로』 연세대학교 석사학위 논문

유예근(1970) 「국문정리 연구」 『한국언어문학』 제 89 집 pp.179-198 한국언어학회

이강민(2007) 「1910 년간 『日韓言語集』 의 일본어와 한국어」 『일본학보』 제 73 집 pp.95-105 한국일본학회

\_\_\_\_\_(2009) 「『東語初階』 의 연구」 『일본학보』 제 78 집 pp.59-71 한국일본학회

\_\_\_\_\_(2011) 「春園 李光洙의 일본어 학습서 『日語獨學』 에 대하여」 『일본학보』 제 86 집 pp.89-98 한국일본학회

\_\_\_\_\_(2013) 「언어자료로서의 『日韓淸対話自在』 」 『일본학보』 제 94 집 pp.41-52 한국일본학회

이계형(2007) 『대한제국기 통감부의 식민교육정책 연구』 국민대학교대학원 박사학위논문

이광린(1974) 『한국 개화사 연구』 일조각

이만규(1949) 『조선교육사』 을유문화사

정광(2014) 『조선시대의 외국어 교육』 김영사

정승혜(2004) 『조선후기 왜학서 연구』 태학사

정재철(1985) 『일제의 대한국식민지교육정책사』 일지사 (일본어판 : 『日帝時代の韓国教育史 : 日帝の対韓国植民地教育政策史』 (2014) 皓星社)

조문제(1977) 「한말의 일어학교 교육의 연구」 『서울교대논문집』 제 94 집 pp.21-43 서울교육대학교

조문희(2005) 『한국 일본어 교육사 연구』 동덕여자대학교대학원 박사학위논문

- \_\_\_\_\_ (2011) 『일본어 교육사 상/하』 J&C
- 채휘균(2004) 「개화기 금지 교과서의 유형과 내용 연구」 『교육철학』 제26집  
pp.175-196 한국교육철학회
- 한국정신문화연구원(1991) 『한국민족문화대백과사전』 웅진출판사
- \_\_\_\_\_ (2007) 「한국 개화기 일본어 문법용어 연구」 『일본학연구』 제22집 pp.85-  
107 단국대학교 동양학연구소
- 한중선(1994) 「개화기 일본어 학습서 소고」 『일어일문학연구』 제25집 pp.139-168  
한국일어일문학회
- \_\_\_\_\_ (2007) 「한국 개화기 일본어 문법용어 연구」 『일본학연구』 제22집 pp.85-  
107 단국대학교 일본연구소
- 편무진(2001) 「『한국자료』의 기초적 연구(1) : 한국인을 위한 일어학습서를 중심으로」 『일본문화학회』 제11집 pp.175-203 한국일본문화학회
- \_\_\_\_\_ (2009) 「일본 명치시대의 한국어학습서에 보이는 한국어 가나(仮名) 표기에  
관한 고찰 : 명치 이전 한국어학습서류와의 비교를 통하여」 『일본문화학보』  
제43집 pp.83-104 한국일본문화학회
- 홍구표(2010) 「우리 민족문화의 보고 왕실도서관 규장각한국학연구원」 『국회도서관  
관보』 제47권3호 통권제369호 pp.66-71 한국국회도서관
- 허재영(2013) 「근대 계몽기 일본어 보급 정책과 경성학당의 독습 일어잡지」 『동양  
학』 제53호 pp.24-45 단국대학교 동양학연구원
- Cecil Hodges 외 [안교성역] (2011) 『영국성공회 선교사의 눈에 비친 한국인의 신앙  
과 풍속』 살림출판
- Félix Clair Riedel' [유소연역] (2008) 『나의 서울 감옥 생활 1878』 살림출판
- John Ross [홍경숙역] (2010) 『존 로스의 한국사』 살림출판
- 白井順 [황운역] (2011) 「마에마 교사쿠와 손진태 : 큐슈대학 소장 자이산로문고 자  
료를 중심으로」 『근대서지』 제4호 pp.405-431 소명출판

<その他>

Basil Hall Chamberlain, *The Invention of a New Religion* (London: Watts & Co.,1912).

Kiyoe Minami, *Forgotten Reciprocity of Languages of the Colonizer and the Colonized* (Unpublished MA thesis, UBC Department of Asian Studies, 1999).

Maurice Courant, *Bibliographie Coréenne: Tableau Littéraire de la Corée* Vol. 1-3 (Paris: Libraire de la Société Asiatique, 1894-1896).

Mina Hattori, *National and Colonial Language Discourses in Japan and its Colonies, 1868-1945* (Unpublished MA thesis, UBC Department of Asian Studies, 2008).

Ross King, "Language, Politics and Ideology in the Post-War Koreas," in *Korea Briefing*, ed. David R. McCann (Asia Society, 1997), 109-144.

【付録】開化期学習書目録

発行年	種	書名	著者	発行者(所)
1880	韓	韓語入門	宝迫繁勝	著者蔵版
1881	韓	日韓善隣通語	宝迫繁勝	著者蔵版
	韓	交隣須知	雨森芳洲	外務省蔵版
1882	両	訂正隣語大方	浦瀬裕	外務省蔵版
	韓	和韓会話独学	武田甚太郎	(記載無し)
1883	韓	再刊交隣須知	雨森芳洲	外務省蔵版
	韓	交隣須知	雨森東	白石蔵版
1890	?	商語捷解	中野許多郎	?
1891	?	仮名行商手引	中野許多郎	?
	日	日語工夫	中野許多郎	東京築地活版製造所
1892	多	日韓英三国対話	赤峯瀬一郎	岡島賓文館
1893	両	日韓通話	国分国夫	国分建見
1894	多	日清韓三国対照兵要語集	相澤富蔵	厚生堂
	韓	朝鮮医語類集	鈴木裕三	海軍軍社会
	韓	朝鮮国海上用語集	田村宮太	水交社
	韓	朝鮮俗語早学全	松栄竹次郎	松栄玄訓堂
	韓	兵要朝鮮語	近衛歩兵第一旅団	明法堂
	韓	実用朝鮮語正編	中島謙吉	尚武学校編集部
	韓	速成独学朝鮮日本会話篇	阪井武堂校閲	叢書閣・金玉堂
	韓	日韓会話	参謀本部	一二三館
	韓	従軍必携朝鮮独案内	栗林次彦	下村幸貞
	韓	新撰朝鮮会話	洪爽鉉	博文館
	多	宣戦勅語入日清韓対話便覧	田口文治	田口文治
	多	日清韓三国対照会話篇	松本仁吉	中村鐘美堂
	多	独習速成日韓清会話	吉野佐之助	明昇堂
	多	旅行必要日韓清対話自在	太刀川吉次	鳳林館
	多	日清韓三国会話	坂井夙五郎	松栄堂書店
	韓	朝鮮通語独案内	池田勘四郎	阪出町
	韓	日韓対訳善隣通話 <small>朝鮮会話篇</small>	大川通久	清華堂
	多	日清韓三国通語	天淵	薰志堂
	韓	朝鮮語学独案内	松岡馨	青山堂書店
1895	多	日清韓語独稽古	漢学散人	東京堂書房
	多	大日本国民必要下 <small>附言三国語大略</small>	斎藤和平	仙台市
	日	日語捷徑	金沢末吉	丸善
	日	単語連語日話朝雋	境益太郎・李鳳雲	漢城新報社
	日	日本語独案内	稲益謙吉	稲益謙吉
1896	韓	実地応用朝鮮語独学書	弓場重英・内藤建	弓場重栄
1896~1897	韓	朝鮮語	洪爽鉉	大日本実業学会

1897	日	日語独学:簡易捷徑	弓場重栄	弓場重栄
1900	多	日清韓三国千字文	荒浪平治郎	哲学書院
1901	韓	朝鮮語独習	松岡馨	岡崎屋書店
1902	韓	実用韓語学	島井浩	誠之堂
1903	韓	日韓通話捷徑	田村謙吾	田村謙吉
1904	多	四国会話:日英對照支那朝鮮	川辺紫石	瀬山順成堂
	多	出征必携日露清韓会話	山本富太郎	則鳴社
	韓	日韓会話	秦兵逸	田中宋栄堂
	韓	韓語会話	村上三男	大日本図書
	韓	校訂交隣須知	前間恭作	平田商店
	多	対訳日露清韓会話	米村勝蔵	啓文社
	多	日露清韓会話自在法	武智英	日本館
	多	袖珍実用満韓土語案内	平山治久	博文館
	韓	韓語独り卒業(一週間速成)	阿部正尹	川上印刷部
	韓	実地応用日韓会話独習	勝本欽軒(永次)	此村藜光堂
	多	日露清韓会話早まなび	小須賀一郎	又間精華堂
	多	日露清韓会話自在	通文書院	玄牝堂
	韓	日韓会話独習	山本治三	東雲堂書店
	韓	最新朝鮮移住案内 附日用日韓語及び会話	山本庫太郎	民友社
	韓	韓国農事案内 附韓語会話	青柳綱太郎	青木嵩山堂
	韓	いろは引朝鮮語案内	林山松吉著	偉業館書房
	韓	韓語研究	木俣安親・林英奎	清韓語学校
	韓	最新日韓会話案内	嵩山堂編輯局	青木嵩山堂
	両	日韓会話三十日間速成	金島苔水・李鎮豊	青木嵩山堂
	韓	韓語独習通信誌	奥田格	大韓起業調査局
1905	両	韓語教科書	金島苔水・広野韓山	青木嵩山堂
	韓	韓語獨習誌	藤戸計太・田中好之	大韓起業調査局
	両	対訳日韓新会話	金島治三郎・広野栄次郎	石塚書舗
	日	独修日語雑誌	渡瀬常吉	日語雑誌社
	両	韓訳重刊東語初階	泰東同文局	泰東同文局
	両	実用日韓会話独学全	島井浩・兪競鎮	誠之堂
	多	日清韓会話全	栗本長質	一二三館
	両	対訳日韓会話捷徑	金島苔水・広野韓山	石塚猪男蔵
	両	独学韓語大成全	伊藤伊吉	九善
	日	日語捷徑: 独修自在	金島苔水・広野韓山	青木嵩山堂
	多	日韓清英露五国単語会話篇	堀井友太郎	名倉昭文館
1906	両	日韓韓日新会話	島井浩	青木嵩山堂
	両	日韓言語合璧	金島苔水	青木嵩山堂
	韓	韓語正規	近藤信一/金澤庄三郎閱	文求堂書店
	日	日韓会話辞典	趙重桓	日語雑誌社

	韓	韓語	安泳中	虎与号書店
	日	独習新案日韓対話	日語雜誌社	日語雜誌社
	日	普通日本語典	崔在翊	日韓図書印刷株式会社
	韓	六十日間卒業日韓会話独修	柳洪英・高木常次郎	積善館本店
1907	日	日語独習	孫鵬九	広学書舗
	両	日韓いろは辞典	柿原治郎	東邦協会
	日	独習日語正則	鄭雲復	広学書舗
1908	日	兒学編	丁若鏞・池錫永	広学書舗
	日	日語会話	島井浩	東京築地活版製造社
1909	日	(二個月速成)日韓語捷徑	南宮濬	唯一書館
	日	精選日韓言文自通	宋憲爽	廣徳書館
	多	韓日英新會話	鮮于叡・鄭雲復	日韓書房
	多	同文新字典	伊沢修二	泰東同文局
	韓	韓語通	前間恭作	丸善
	韓	韓語文典	高橋亨	博文館
	両	独習日韓尺牘	鄭雲復	日韓書房
	韓	文法註釋韓語研究法	藥師寺知囃	盛文堂
	日	日本語法訳義	金濬植	修文書館
	日	独習国文日語自通	鮮干日	広学書舗
	日	日文訳法(上)	林圭	新文館
	日	精選日語大海	朴重華	表記なし
	日	初等自解日語文典	宋憲爽	広学書舗
	日	日本語学音・語篇	林圭	新文館
1910	韓	朝鮮国鎮海湾附近の言葉の導	本田昇三・金正淑	増田兄弟活版所
	日	高等日文読本	朴重華	光東書局
	日	日語大成	鄭雲復	永昌書館
	韓	韓語五十日間独修	島井浩	青木嵩山堂
	韓	韓語学大全	津田房吉	青木嵩山堂
	日	日語正編全	唯一書館編輯部編	唯一書館
	韓	新案韓語彙全	笹山章	平田商店
	両	日韓韓日言語集	趙義淵・井田勤衛	日韓交友出版所

# Abstract

The dissertation contains the following chapters:

- C1 Introduction
- C2 Outline of Japanese Language Education in Korea
- C3 On the Establishment of the Nichigogakudō
- C4 Okakura Yoshisaburō: First Principal of the Japanese Language School
- C5 Outline of Japanese Language Textbooks in Korea's Enlightenment Period
- C6 Characteristics of Japanese Language Textbooks in Korea's Enlightenment Period
- C7 Conclusion

This study undertakes the beginnings of Japanese language education in modern Korea. It is based on analysis of primary sources and focuses on issues related to the mechanisms, instructors, and textbooks of Japanese that are not clearly understood in the existing research.

Chapter two reviews the previous research on the history of Japanese language education in Korea and outlines its general course chronologically. Japanese language education began in Korea in 1414, when the Chosŏn court added Japanese to the purview of Sayōgwŏn in order to provide the translators and translations needed by the Office of diplomatic Affairs and so it could train its officials. During modern Korea's enlightenment period (1876-1910), in addition to public and private schools, the Japanese Language School was charged with providing Japanese language education, and I discuss the unique nature of this institution.

The third chapter discusses four primary documents related to the establishment period and geographical area of the Nichigogakudō that have not been discussed in research up to now: *T'ongni Kyosŏp T'ongsang Samu Amun Ilgi*, *T'ongyŏn Ilgi*, *Inch'ŏnhang Gwanch'o*, and

Employment Contract of Teachers in Japanese Language School. Based on examination of these materials, I assert that the Japanese Language School was founded in the seventh month, twenty-fifth day of 1891 at Hansŏng-Bu Nam-Bu Hundo-Bang Jujadong-Gye Juja-Dong.

In chapter four, I begin by treating the pedagogical methods for Japanese language used by the first principal of the Japanese Language School and first Japanese language educator in modern Korea, Okakura Yoshisaburō, and then go on to demonstrate the relationship between his Japanese language pedagogy and his studies of the Korean language. I show that as a Japanese language instructor in Chosŏn Korea, Okakura clearly was aware of and implemented the new Ollendorff method as opposed to the traditional grammar-translation approach. I further theorize that Okakura's use of the Ollendorff method, which is premised on the instructor having sufficient proficiency in the students' mother tongue, stemmed from Okakura's strong understanding of Korean, his high regard for the *hangul* script, and his interaction with B.H. Chamberlain, who taught Korean and had instructed Okakura.

Chapter five outlines seven types of Japanese language textbooks by Japanese authors from the enlightenment period, given in chronological order. Present research has analyzed these either in part or individually, but still has not grasped the overall nature of Japanese language education in this period. I narrate this phenomenon based on documentary evidence and clarify the publishing conditions for Japanese language educational textbooks during the early enlightenment period.

In chapter six I discuss the specific contents of Japanese language textbooks written by Japanese during the enlightenment period and suggest that they were produced with commercial activity in mind. These works appear at the nexus between readers who, in order to enhance their livelihoods, sought practical manuals for Japanese language for independent study, and authors, who pursued commercial profit.

The general tendency in studies of Japanese language education during the enlightenment period has been to think of it in terms of the colonization process. However,

according to my research, this situation is far more complicated. The purpose of Japanese language education differed based on the time period, educational institution, and differing attitudes among Koreans with regards to the Japanese language itself. Moreover, there was lingering influence from the language education of the preceding early modern period.

The mechanisms of Japanese language education in Korea began in the capital based on leadership from the government officials, and while there was much involvement on the Japanese side, such as the first principal Okakura, study was the choice of Koreans. Conversely, while Japanese language textbooks were similar in character to the Japanese Language School, in that they were produced by Japanese and studied by Koreans, they were produced at the direction of private citizens, and they began in the open port cities.

Based on analysis of Japanese language textbooks, I confirm that Nakano Kyotarō and Kanashima Taisui began their careers as translators and that Yuba Jūei and Shimai Hiroshi studied Korean at the Pusan Korean Language Institute, which got its start as a mechanism for developing interpreters during the Chosŏn period. Also, I reveal that Yuba, Kanashima and Hirono Kanzan, and Shimai each published their Japanese language textbooks based on their experiences using Korean language textbooks. Japanese education in Korea and Korean language education in Japan at the time had a deep relationship, and that connection is also visible in the pedagogy of modern Korea's first Japanese language teacher, Okakura.

Given the points raised above, the beginning of Japanese language education in modern Korea was not “education for domination” based in modern imperialism, but should be considered first and foremost as an extension of the language education that existed in both countries in the early modern period. Also, considering the background of modernization and open ports, Japanese language education at the time was born out of necessity because of practical concerns. Japanese language education during the enlightenment period has been considered part of the colonization process, not as foreign language education. However, study of the various foreign languages that were taught in modern Korea, beginning with

Japanese, is an important vector for understanding modern Korea and requires new and diverse approaches.

## 謝 辞

本論文をまとめるにあたり、多くの方々からご指導とご支援を賜りました。ここに記して深く感謝の意を表する次第です。

本論文の主査である井上優先生、審査員の梅田博之先生、藤本幸夫先生、岸田文隆先生には厳しくも温かなご教示をいただきました。ご多忙中に貴重な時間を惜しまず、ご指導くださった先生の方々に心より感謝申し上げます。

本論文で使用した資料において、各機関のご協力と掲載許可をいただき、資料の繙読に際しては書道家の梅田由美子先生のご教示を賜りました。深甚の謝意を表します。

カナダ・ブリティッシュコロンビア大学の Ross King 教授には、有用な資料の提供と博士課程中にカナダ留学の機会を頂きました。また、英語書の検討と翻訳において、Elliott Yates 氏と Matthieu Felt 氏のご協力を得たことを記すとともに心より感謝申し上げます。

そして、遠くからもいつも暖かく見守ってくださった大田大学校の先生方と元目白大学の金沢朱美先生、放送大学の滝浦真人先生、立命館大学の権学俊先生にもこの場を借りて御礼を申し上げます。

最後に、いつも心の支えになってくれた韓国の家族に心から感謝します。